

鹿角志

291.24
N262R
N



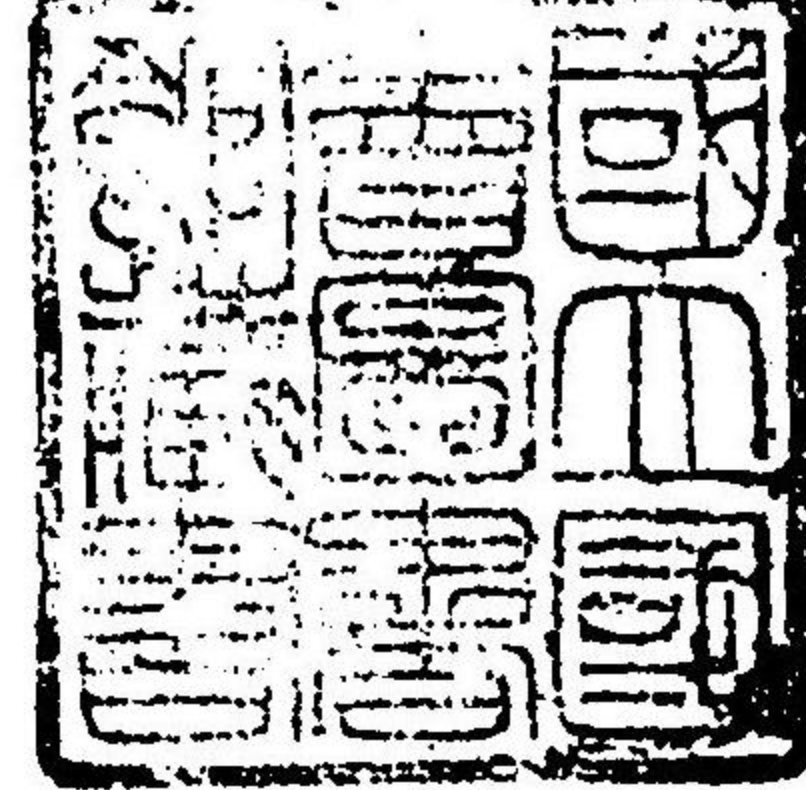
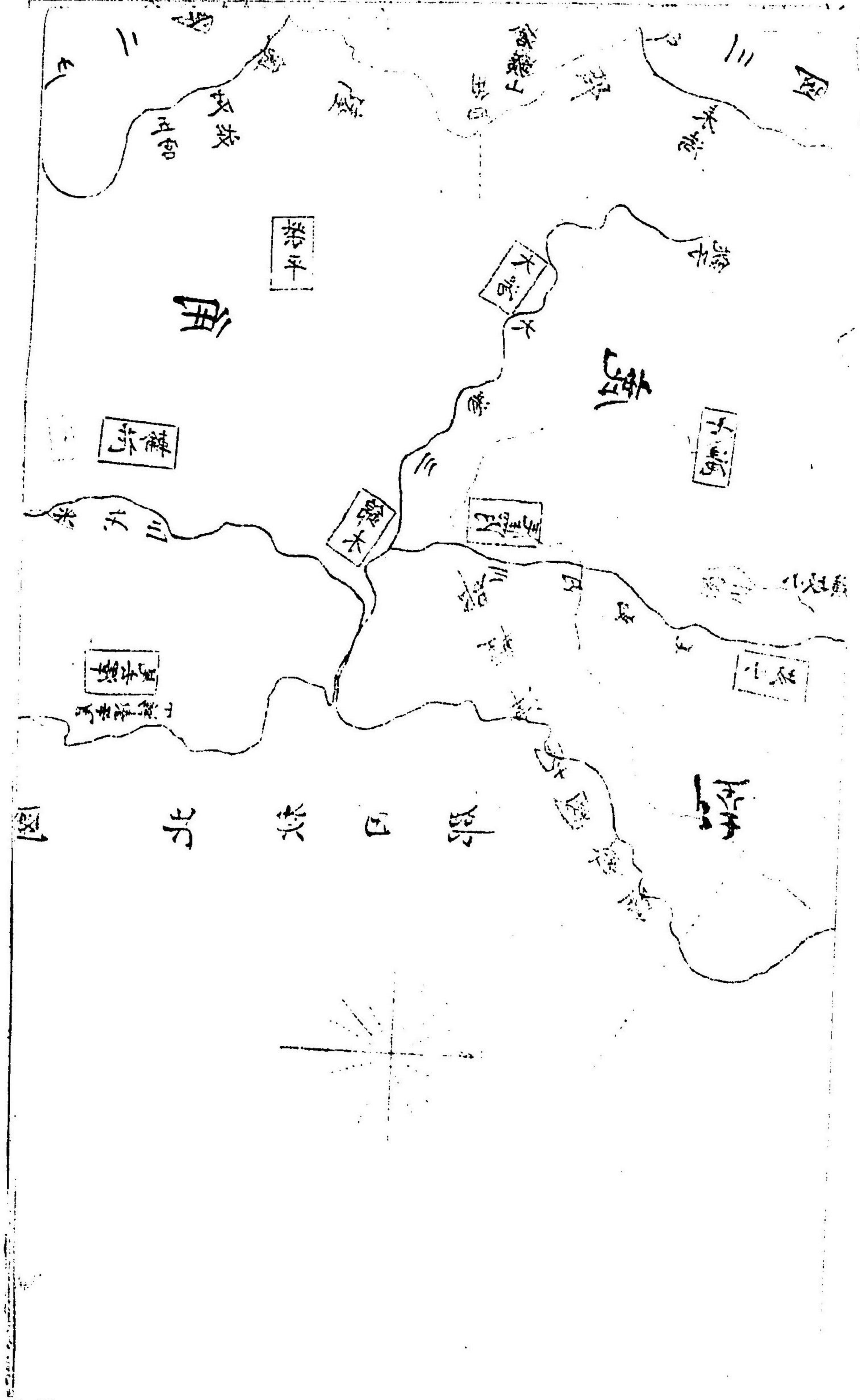
內藤十灣著

鹿角志



三餘堂藏板

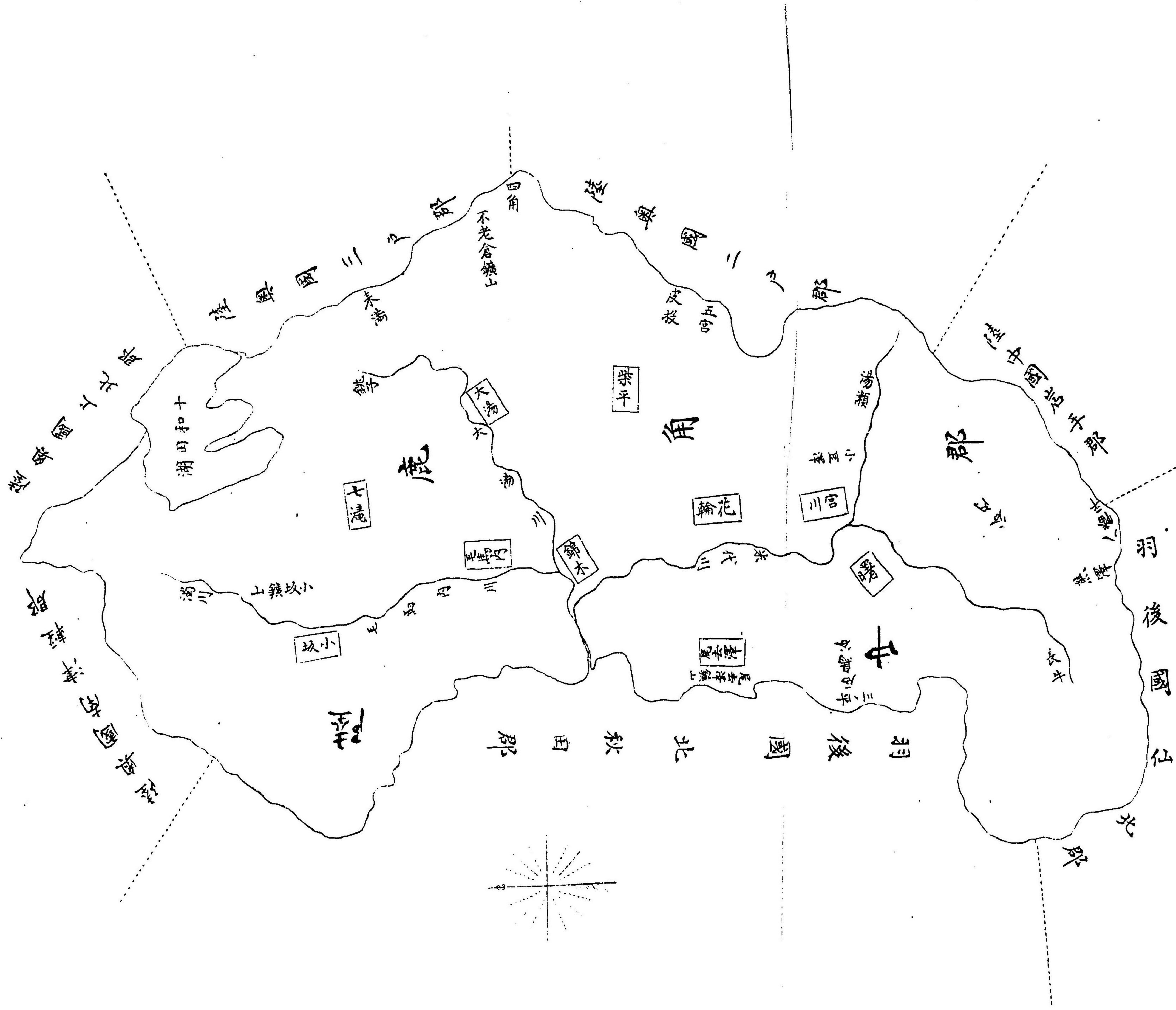




国立国会  
27. 3. -4  
図書館

261536



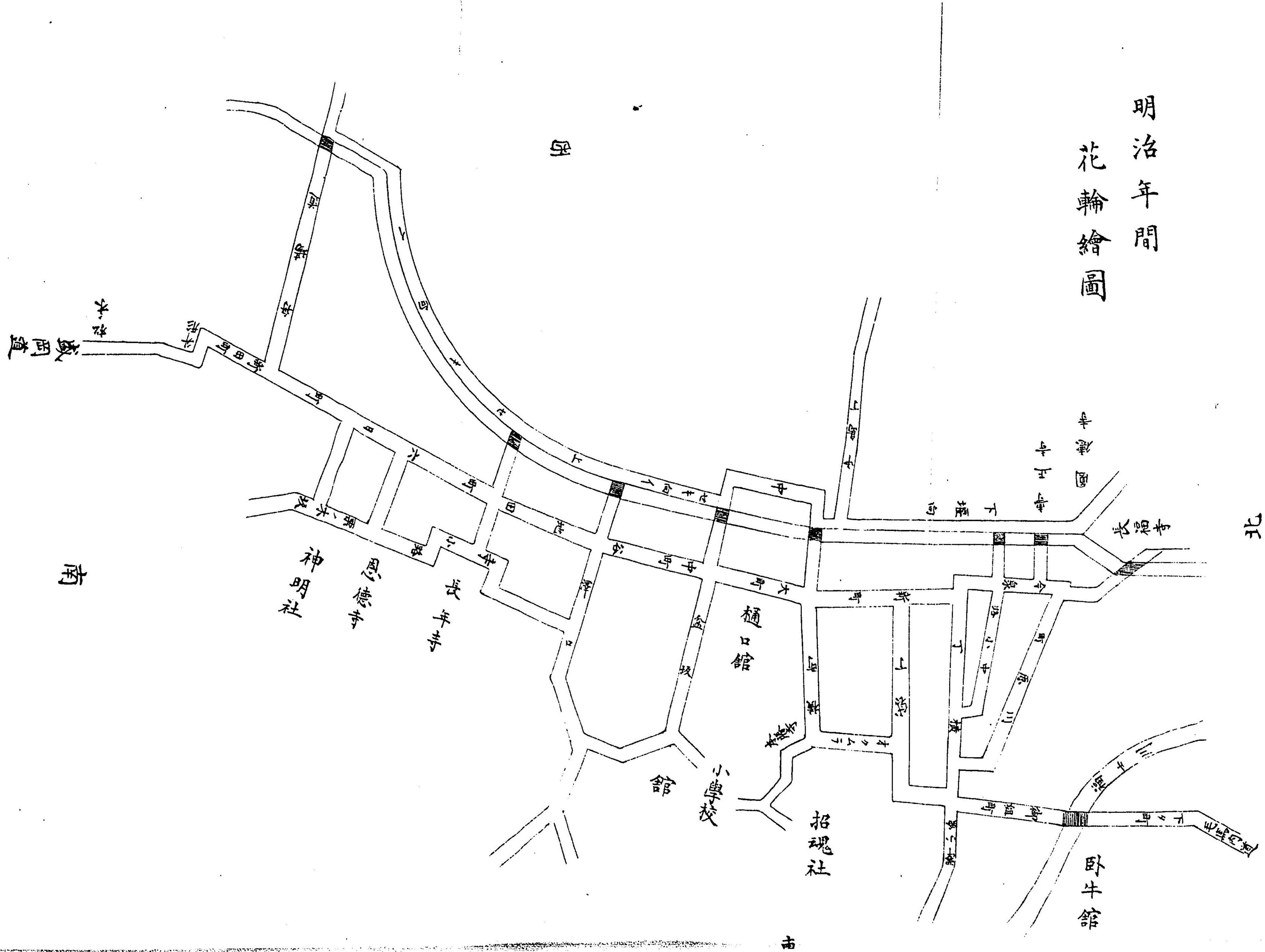






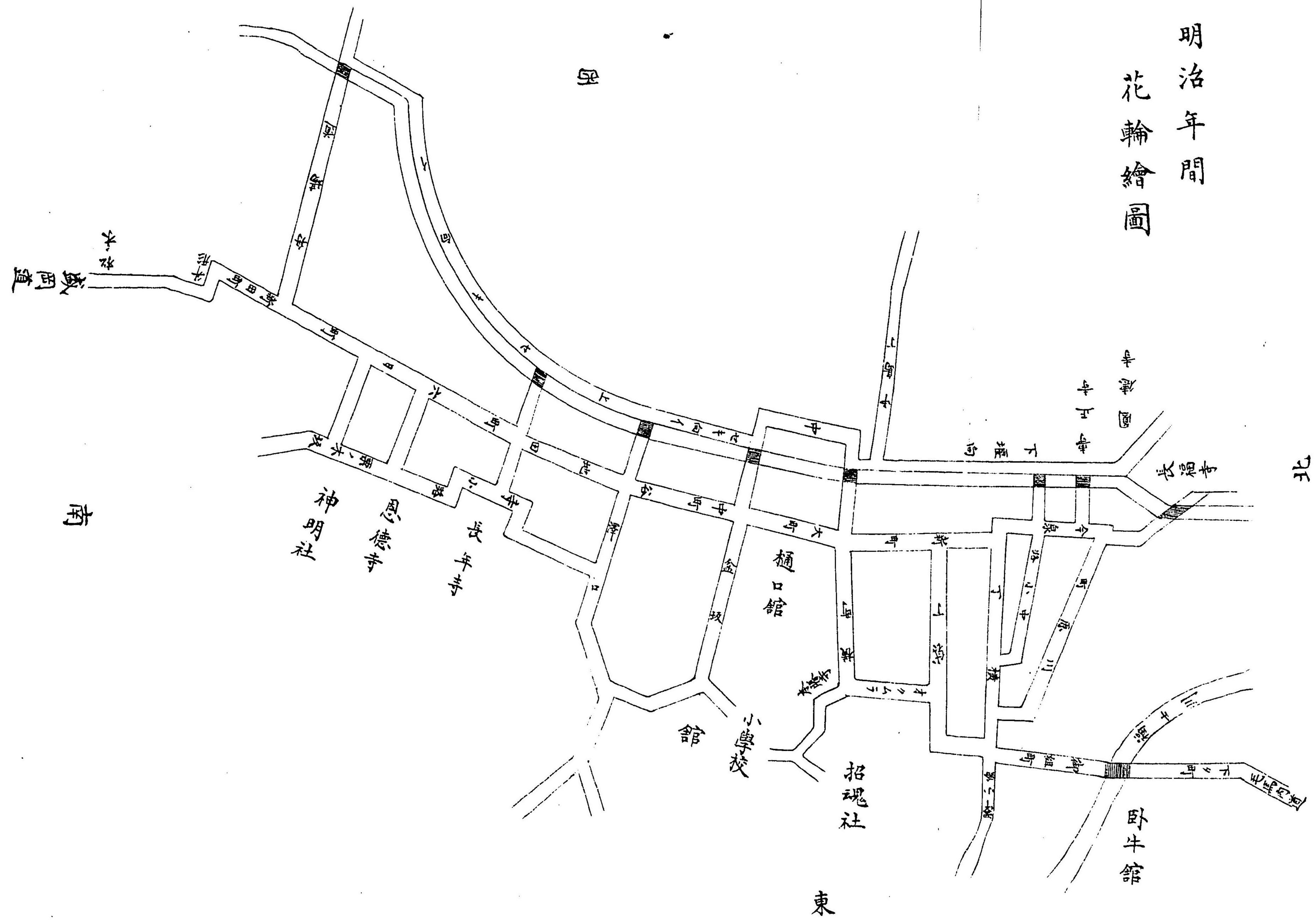


明治年間  
花輪繪圖



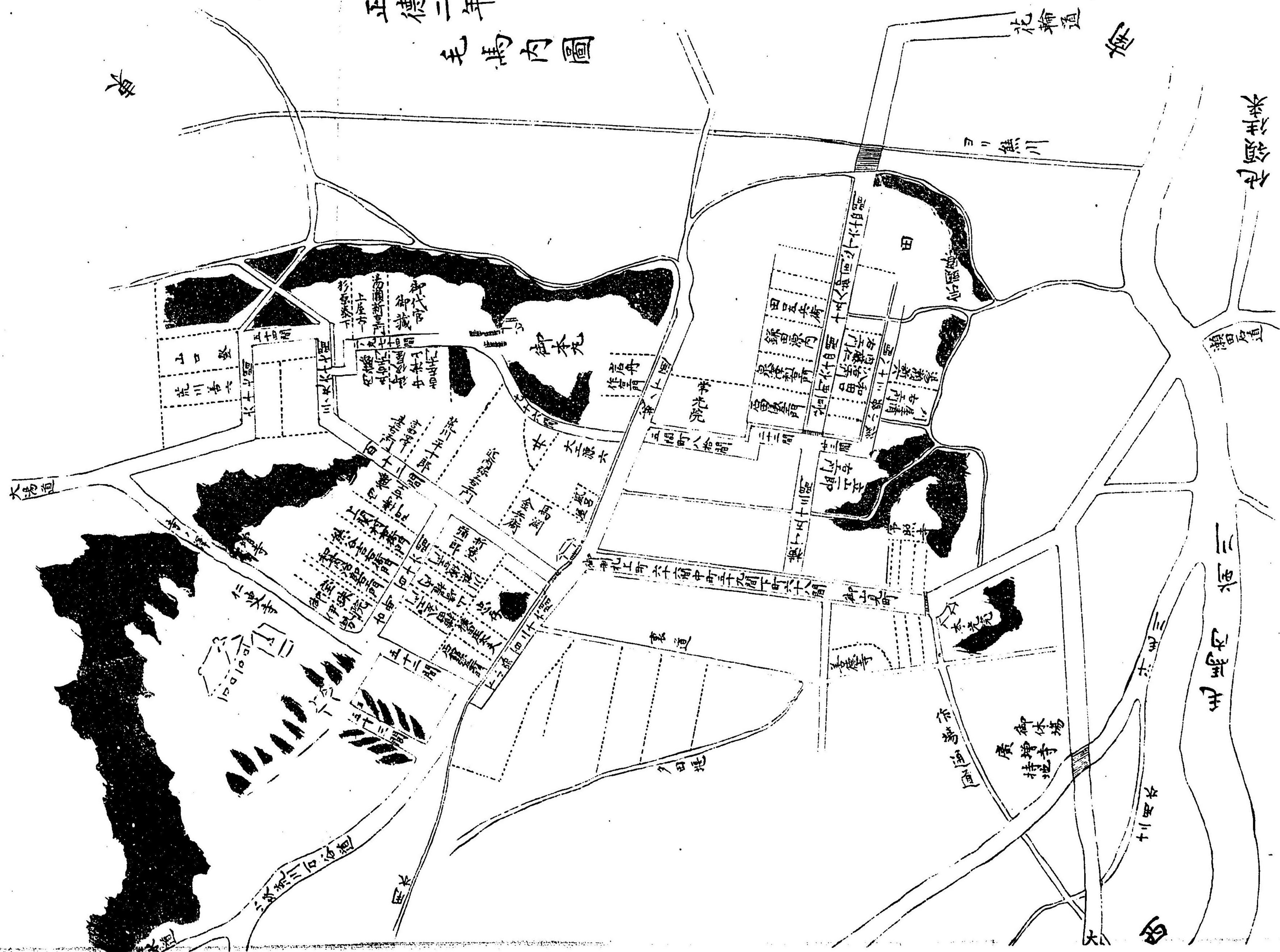


明治年間  
花輪繪圖





正徳二年  
毛馬内圖



他領往

三州

川

大

花輪通

川

御休場

持地寺

裏道

田地

御本丸

山口登  
荒川吉六

仁徳寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

持地寺

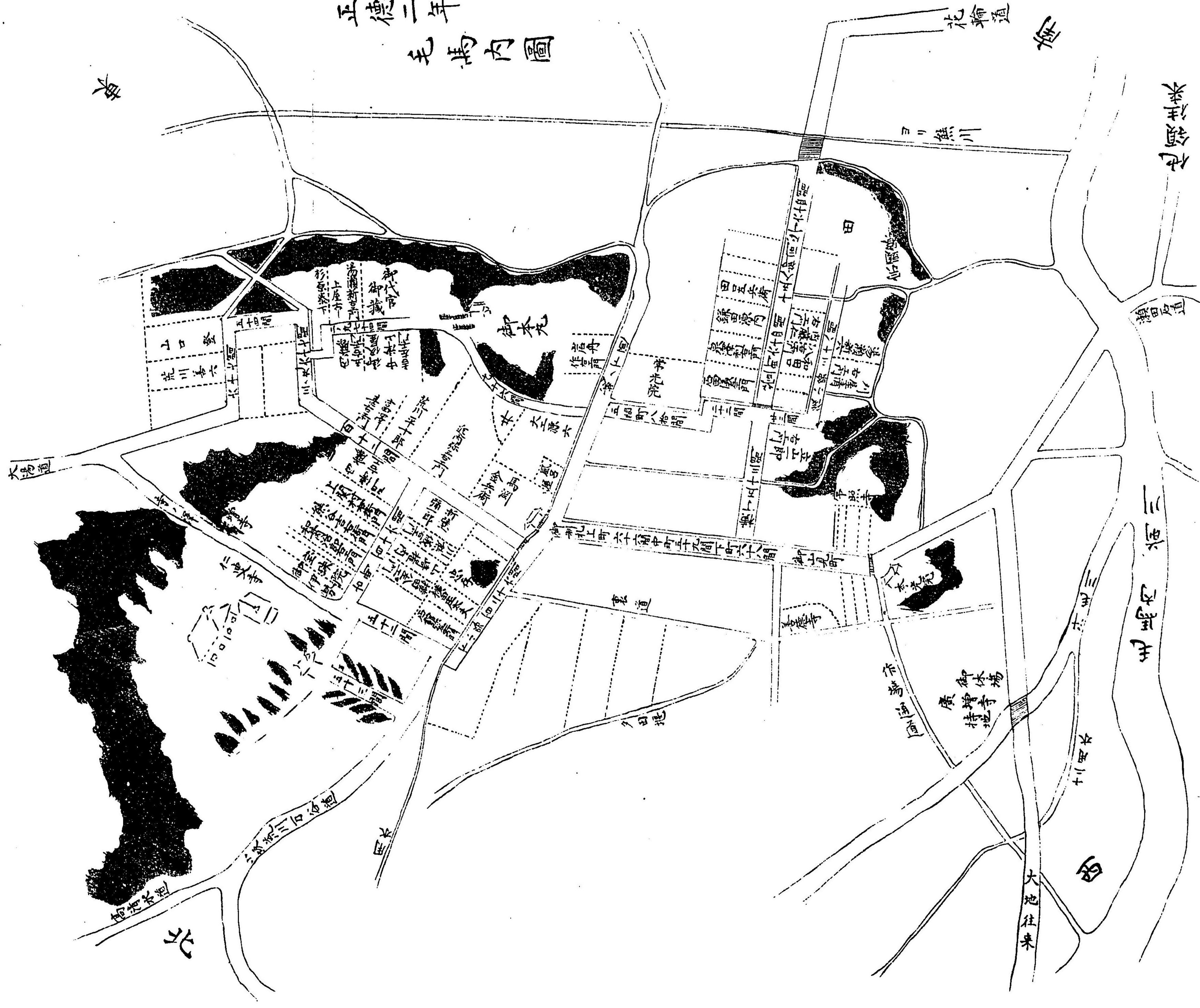
持地寺

持地寺

持地寺



正徳二年  
毛馬内圖





錦木塚之圖





291.24 N 26 2R N

鹿角志序

善記之年。狹名之傳。荒唐無稽。而三代實錄。上津野之村。已在千年之上。郡不可無志也。稗官野乘。多出近古。假託支離。雜據。口碑遺蹟。簡牘不雕。猶存古風。去記之旨。伊藤氏緣起。辯博固稱宏富。至其



翔實精確。則未<sub>レ</sub>無遺憾焉。余弗自<sub>レ</sub>揣奮。  
於<sub>レ</sub>耄年之餘。遍訪<sub>レ</sub>故家舊族。而借<sub>レ</sub>鈔系  
譜。私乘<sub>レ</sub>歷詣<sub>レ</sub>祠廟寺院。而從<sub>レ</sub>觀緣起什  
寶。又以<sub>レ</sub>早年喜探<sub>レ</sub>勝蹟。躋<sub>レ</sub>山嶽。涉<sub>レ</sub>川澤。  
迄<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>已。景象歷<sub>レ</sub>。皆在<sub>レ</sub>胸臆。以及<sub>レ</sub>口  
碑。俟<sub>レ</sub>聞之怪詭瑣屑。載<sub>レ</sub>錄<sub>レ</sub>靡遺。編<sub>レ</sub>摩

蒐討。五<sub>レ</sub>六<sub>レ</sub>年於茲。纂<sub>レ</sub>成一書。名曰<sub>レ</sub>鹿角志。  
私心竊<sub>レ</sub>期<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>地方之舊聞。使<sub>レ</sub>闔<sub>レ</sub>鄉子弟  
知<sub>レ</sub>其家世。承<sub>レ</sub>由而已。誦<sub>レ</sub>此書者。儻<sub>レ</sub>或油然  
生<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>靡<sub>レ</sub>土<sub>レ</sub>之念。繼<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>啓<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>振<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>功業。余望  
外<sub>レ</sub>之喜也。若<sub>レ</sub>夫徵<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>謫<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>訂<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>補<sub>レ</sub>  
史<sub>レ</sub>之闕<sub>レ</sub>文。則專家之事。余不<sub>レ</sub>敢<sub>レ</sub>僭<sub>レ</sub>望。



鳥紀元二千五百六十六年三月中浣。陸中鹿  
角郡毛馬内隱士十灣内藤調一撰時年  
七十有五。

兎虎謹書

例言

一我鹿角郡ノ國土ヲ形成セシヨリ其年所ヲ經ルコト亦久シカラストセス而シテ從來其事歴ヲ編輯シテ一書トナスモノアラス故ヲ以テ其風土人情ヲ知ラント欲スルモ茫乎トシテ尋ヌルニ由ナキノミ余毎ニ之ヲ憂フ今ニシテ之ヲ傳フルニ非レハ舊説ノ或ハ湮滅スルヲ恐レ又且一事ノ深ク感スル所アリ一  
片歌々ノ衷心平生已ム能ハサルハ我舊南部藩ノ一大國士ニシテ後世或ハ其傳ヲ失ハントコトヲ感ミ奮然稿ヲ起メコト、セリ

一本志ハ其口碑ニ存スル者ト稗史ニ傳フル者トニ論ナク假令假設ノ説話ト雖トモ只有リノ儘ニ採取シ以テ後日作家ノ採擇ニ資セント欲スルモノニシテ固ヨリ予カコトヲ以テ本郡ノ事實ヲ辨正スルノ意ナシ

一本會編纂ノ序次ハ能フ丈年月ノ先後ニ注意セリト雖トモ其材料ニ接スル時日ノ迅速アルヲ免カレヌ故ニ儘其先後ヲ誤ルモノアルハ己ムヲ得サルニ出  
フルナリ

一書中南部氏ノ稱謂公ト書ス君ト書ス氏ト書ス或ハ敬稱ヲ闕クモノアルハ其材料書中ノ文ヲ其儘臚寫セシモノナリ或ハ舊君臣ノ故ヲ以テ私稱ニ於テ公



ト書セシモノアリ是レ世ニ公ニスルモノニ非スシテ私志タル以テナリ  
編者識

引用書目

- |               |          |
|---------------|----------|
| 鹿角古事記         | 鹿角由來集    |
| けふのせはのゝ       | 錦木塚之傳記   |
| 毛馬内不動院舊記      | 小豆澤村大日由來 |
| 田山ダンヒル長者本地    | 日本三代實錄   |
| 古事類苑          | 新撰姓氏錄考證  |
| 最明寺殿人國記       | 仁叟寺記     |
| 岩崎御出陣記        | 鹿角緣起     |
| 神社由緒書上帳       | 秋田御論山記   |
| 羽黒山末派本末并分限御改帳 | 秋田出陣日記   |
| 鹿角太平記         | 五十四郡考    |
| 南部家御領分中惣高御年貢米 | 銅山記      |
| 御役金錢并御役立諸色員數  | 浪人詩集     |
| 元祿四年分大國改帳     | 南部氏家譜    |
| 櫻庭氏家譜         | 篤焉家訓     |



- 田道將軍墳墓并祠廟考
- 陸中國鹿角郡說
- 不動院棟札書
- 古記録
- 南部郷村志
- 日本外史
- 奥羽永慶軍記
- 糠部五郡小史
- 岩手縣史談
- 津輕のしるべ
- 刈谷氏系圖
- 秋田御論山御裁許御墨引繪圖
- 初時雨
- 鹿友會誌
- 小豆澤大日堂故實傳記
- 毛馬内古實記
- 大圓寺縁起
- 大日本史
- 日本政記
- 關三ヶ所御役寮へ書上 報恩寺
- 平泉志
- 遠野史談
- 湯瀨氏系圖
- 和田氏系圖
- 鹿角々内景况摘要
- 南部五世傳

鹿角志目次

- 卷之一  
年代
- 卷之二  
制度
- 卷之三  
地理
- 卷之四  
人物

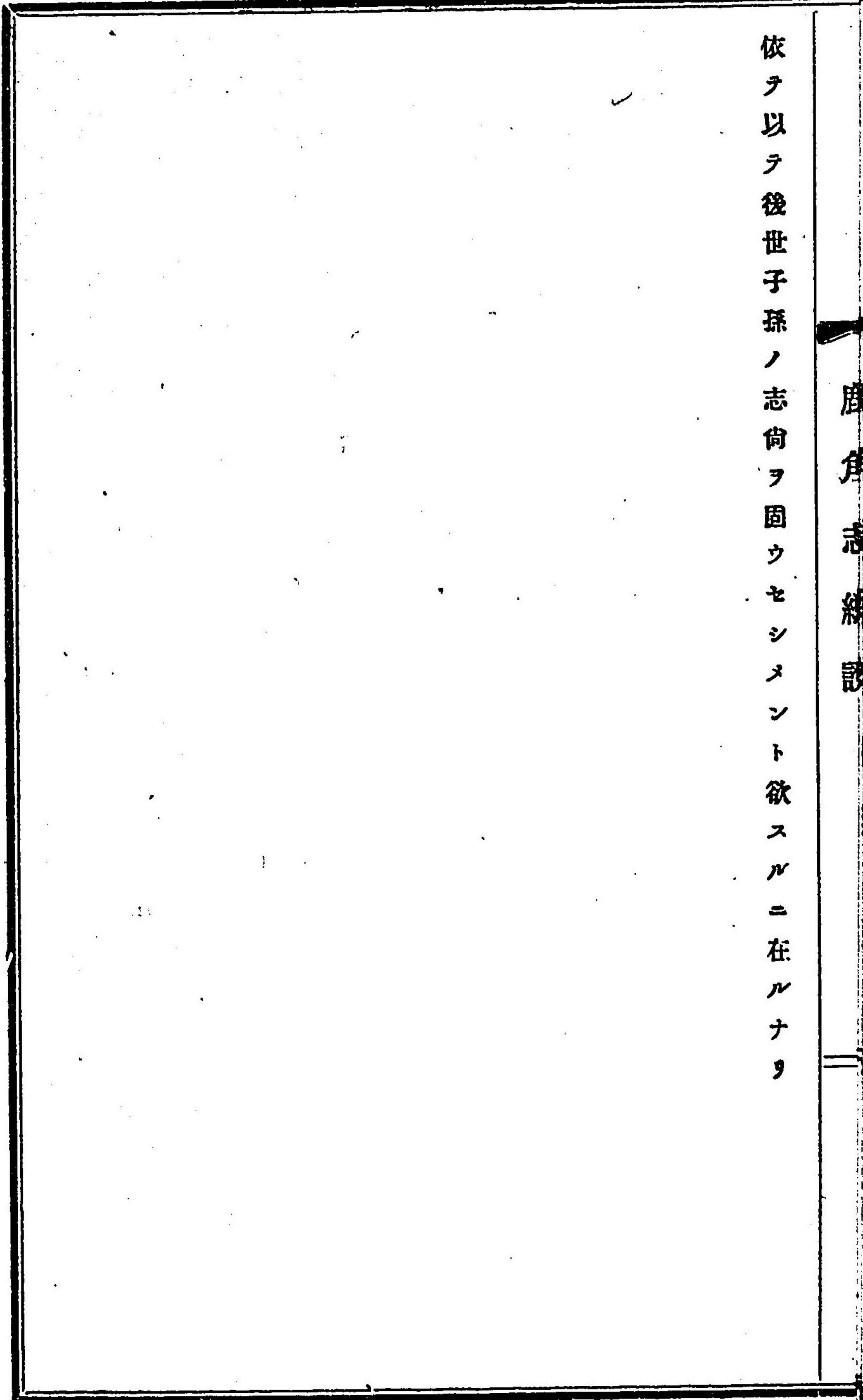


### 鹿角志總説

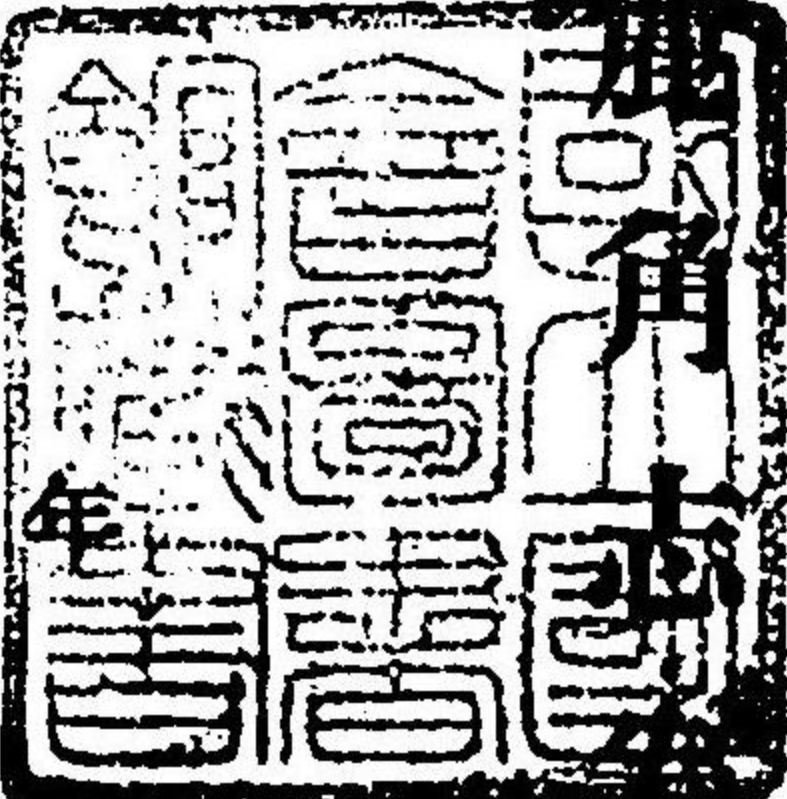
本郡ノ原始ハ曆數年日遼矣トシテ詳カニス可カラズ獨リ古代土器石器類ノ近年處々ヨリ發掘セラレ、ニ由テ一部人類學者ノ説ニ從ヘハ其コロボツクルノ居住セシ土地タルヲ知ルコトヲ得其人種ノ住セシ始メハ蓋シ三千年前後ニアルヲ覺ユ爾來文獻ノ徵スヘキモノ正史ニハ三代實錄ニ瞥見セシノミ奥州狹郡錦木山觀音寺縁起及ビダンブリ長者之事等ハ僅カニ稗官ニ傳ハリ安倍氏ノ横領及藤原氏ノ鎮國ヲ經テ而シテ建久二年以來南部氏ノ封土トナリ其制度ヲ施行セシ事ノ文書ニ見エシ初ハ明曆四年ノ梳飯金請取書及元祿四年ノ惣高改帳トス其他各家ニ散逸セル斷簡零墨ヲ蒐集雜記シテ今代ニ及ブ其地理ノ如キハ鹿角ノ名稱ノ原委ヲ究メント欲シテ繁術ニ涉ルヲ厭ハス抄録セシモノアリ又其沿革ヲ知ラント欲セハ中古ノ戰記ヲ採ラサルヲ得ス其鹿角郷村志ニ至テハ近古ノ調査ニ係ルヲ以テ是ニ由テヤ、本郡ノ面目ヲ判明スルコトヲ得其人物傳ノ如キハ各家ノ記傳ト口碑トヲ厠ヘ取リ肯テ杜撰ニ出テサルヲ失フ之ヲ要スルニ本志編纂ノ主旨ハ閩郡ノ人士ヲシテ已レノ身ノ由テ本ク所ヲ明カニシ



依テ以テ後世子孫ノ志向ヲ固ウセシメント欲スルニ在ルナリ



鹿角志綱卷之一



代

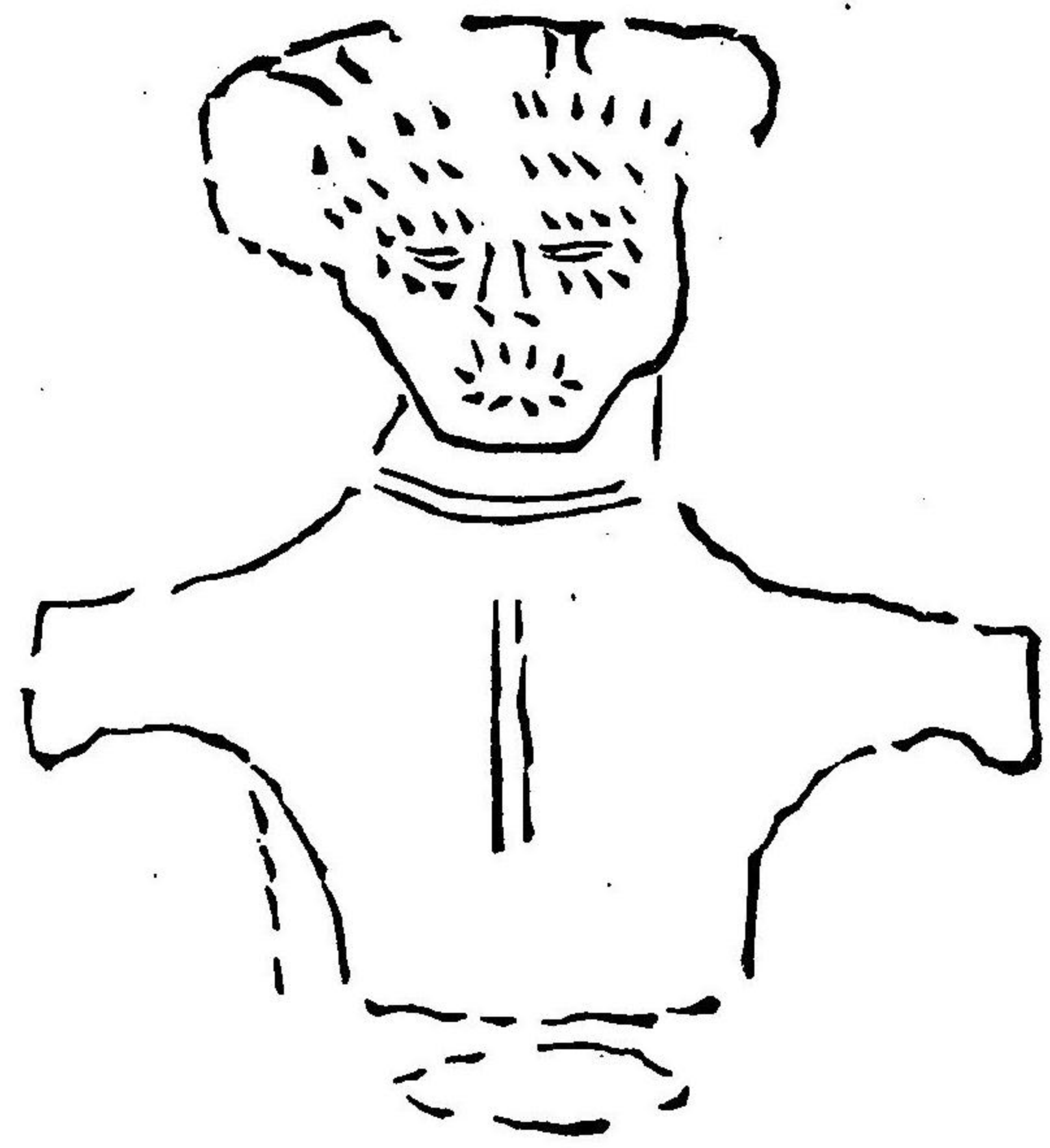
男 十 内藤調一編  
湖 南 内藤 虎校

抑モ鹿角ノ地其人類居住セル始ハ何ノ世ナルヤ今之ヲ詳カニスルニ由ナシト  
雖トモ獨リ左ニ圖スル所ノ物品ノ近年發掘セラレ、ニ徴シテ其大概ヲ推測ス  
ルノ外ナシ



輪 埴

曙村字新山發掘



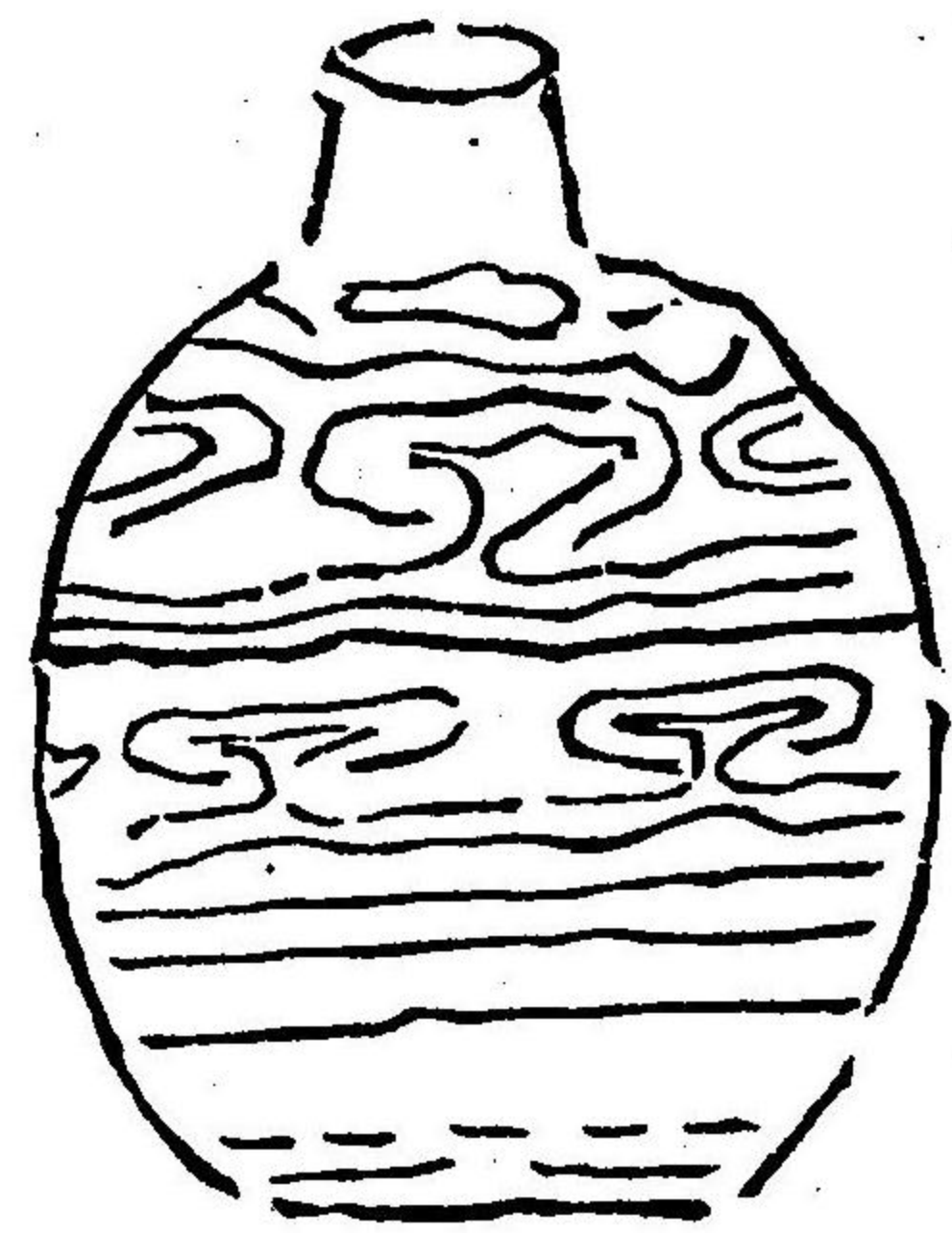
長三寸位

横四寸位

長内村 根本五郎所藏

土 器

谷内村字永田發掘



竪五寸位

徑三寸五分位

右三品

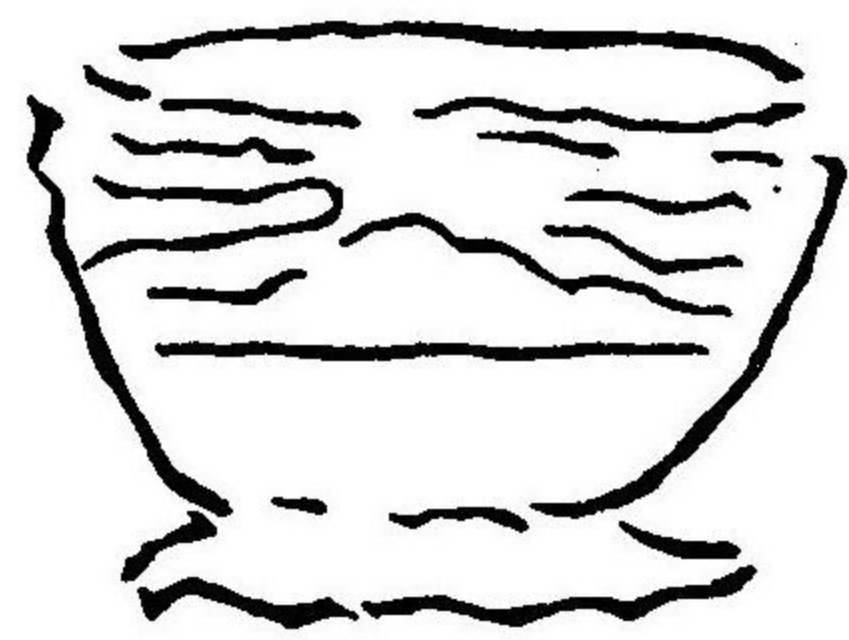
同村字老澤發掘

玉 勾



青綠模樣アリ

長五分位



竪一寸五分位

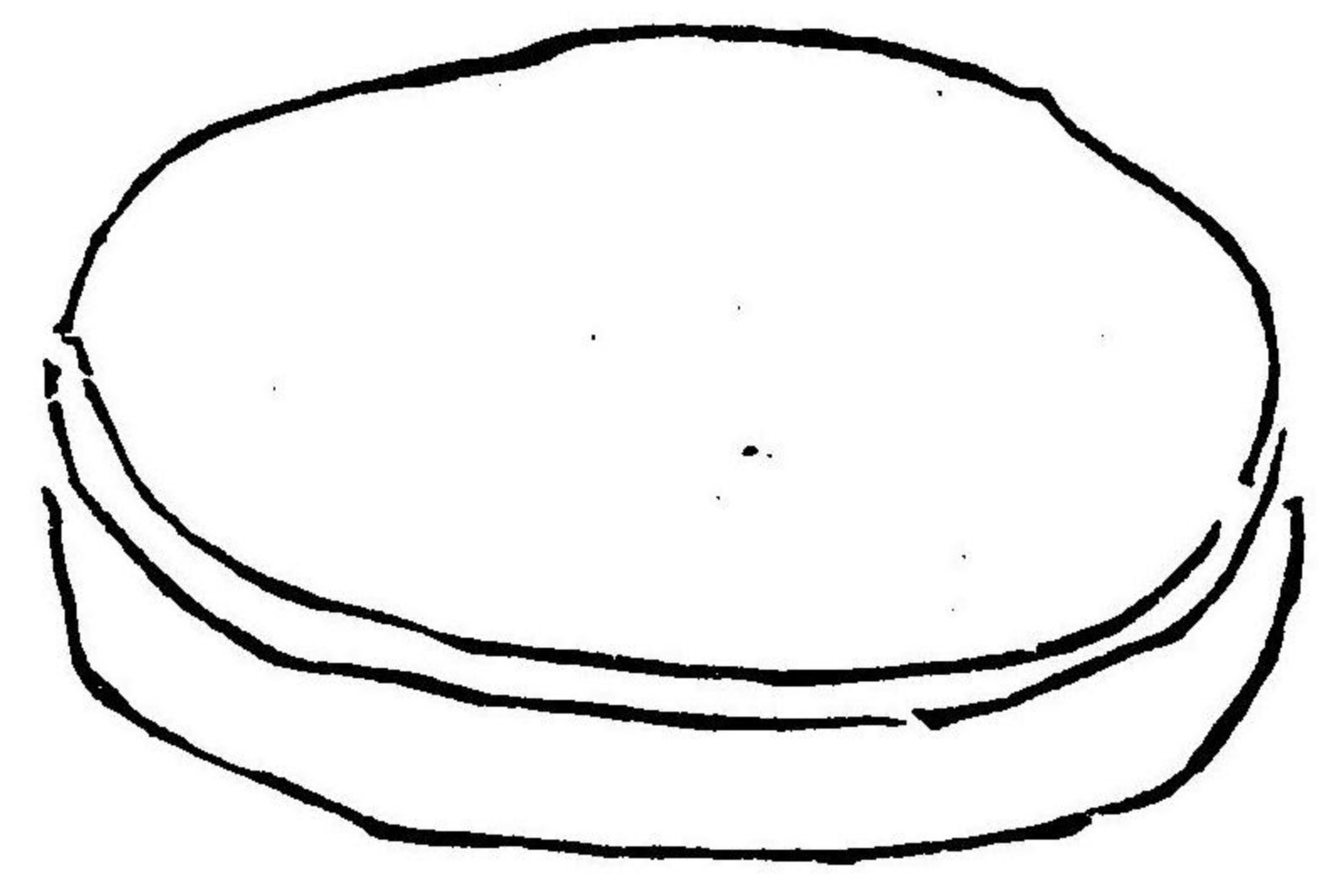
徑二寸五分位

毛馬内町字柏崎發掘

長内村 根本五郎所藏



大地古館ヨリ發掘



右二品

長一尺五寸位  
巾一尺位  
高五寸位  
石質ニシテ形今  
日ノ石當鉢ニ彷彿  
タリ

同所發掘



長二寸位  
巾一寸二三分

大地村 深口善次郎所藏

毛馬内町

泉澤恒藏  
所藏

雷 撥



北條町田中館發掘

同人所藏

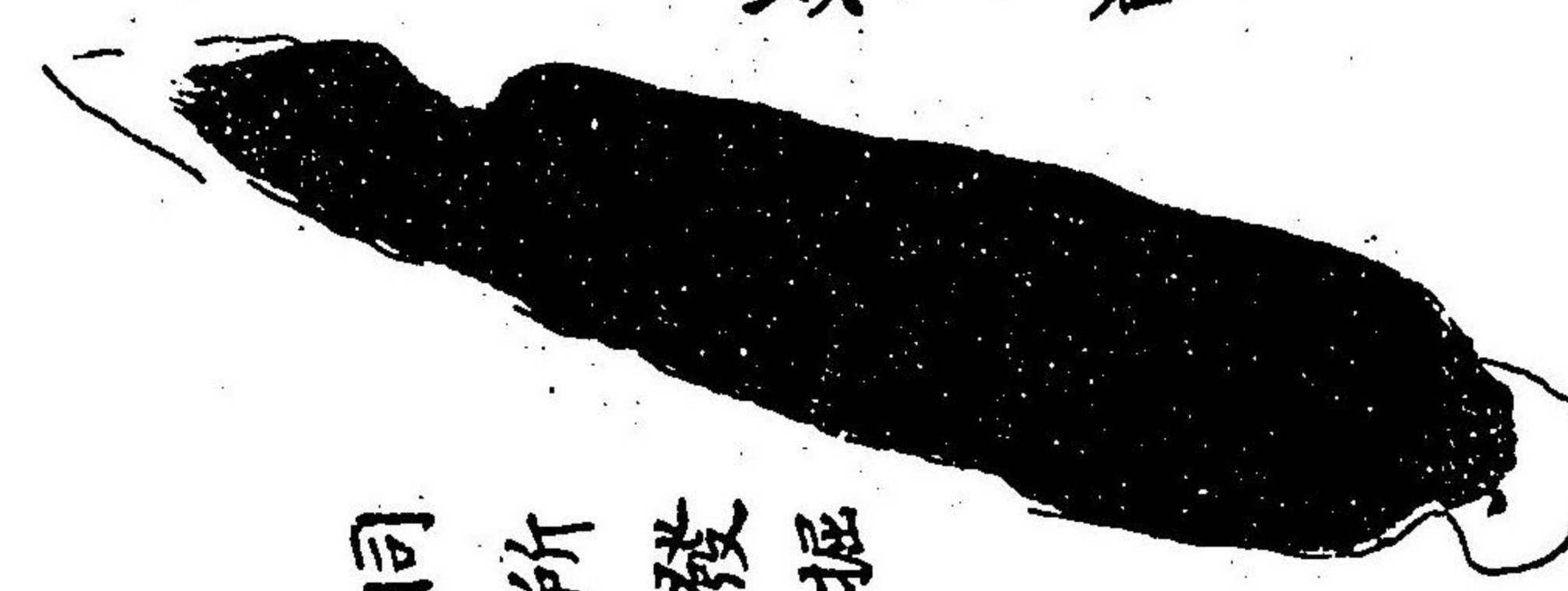
石 斧



同所發掘

同人所藏

石 鏃



同所發掘



石 鏃



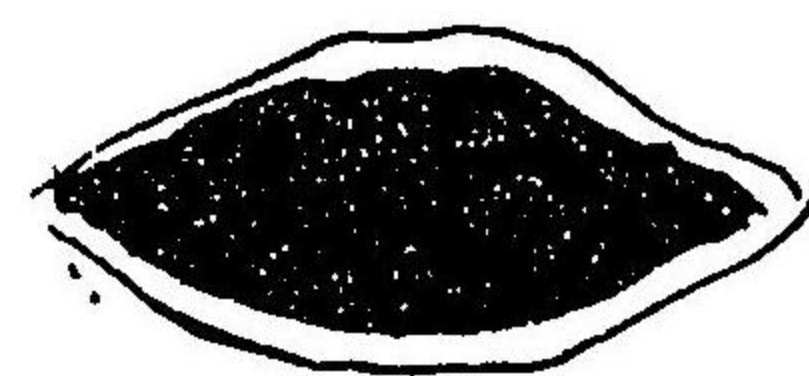
大湯村寺現出鏃

大湯村

谷地啓太郎

所藏

同 品



同所出鏃

同村

千葉梅弥

所藏

右諸品ヲ東京人類學會員ニ示セシニ其說ニ云之ヲ使用シタル人種ヲ「コロボツ  
 グル」ト云フ「コロボツグル」トハ薩ノ葉ノ下ニ居ルト云意味ニシテコロノ人種ハ薩  
 ノ葉ノ下ニ住居シ得ル程ノ矮身小軀ニシテ女ハ頰及ビ手ニ黥シ(アイヌノ黥ハ  
 コノ民族ヨリ傳ヘタルモノナリト云フ)筒袖股引ヲ着シ穴居ニシテ好シテ貝類  
 ヲ食シダケルモノ、如シト云フ常陸風土記ニ上古有人髓極小身居丘壘之上採野  
 食之トアルハコノ民族ニシテ今日ニ殘レル石器土器角器縱穴横穴及貝塚ハコ  
 ノ民族ノ遺物ナリト而シテ此人種ノ我邦東北地方ニ住居セシハ神武天皇以前  
 即チ神代ノ御世ニシテ今ヲ距ルコト二千五百年乃至三千年ノ間ニアルベシト  
 歴史上神武天皇ノ御世ニ土蜘蛛ヲ討ス云々ノコトアリコロノ土蜘蛛ナル人種ハ  
 多分此ノ「コロボツグル」一種ノ如キモノナルベシ此人種ハ漸次蝦夷人種ニ逐ハ  
 レテ東北ニ至リ次第ニ北海道ニ渡リテ消滅セシモノナルヘシトノコトナリ

鹿角ノ地名カ史書ニ見エタルハ三代實錄ヲ最古トスベシ其第三十四卷後太上天皇(陽成天皇)元慶二年七月十日ニ曰ク

十日癸卯出羽國飛騨奏曰正五位下守右中辨兼權守藤原朝臣保則到國察向



之行事、進行軍之籌策、遣權椽文室、眞上有房、左衛門權少尉兼權椽清原合望、上野押領使權大椽南淵秋郷等、率上野國見兵六百餘屯秋田河、南拒賊於河北、又秋田城下、賊地者、上津野、火内、福淵、野代、河北、腋本、方口、大河、堤、姉力、方上、燒岡、十二村也、向化、俘地者、添河、箱別、助川、三村也、云々

又八月四日ノ條ニ曰ク

勅符曰、重省來奏、曲折具之、(中略)且春風好蔭等、取陸奥路、入上津野村、與兩國兵、夾攻首尾、云々

春風ハ鎮守將軍從五位下小野朝臣春風ニシテ好蔭ハ陸奥權介從五位下坂上大宿禰好蔭ナリ又十月十二日ノ申條ニ曰ク

出羽國司飛騨奏言、秋田營、申牒、備八月廿九日、逆賊三百餘人、來於城下、見官人、時得乞降、權椽文室、眞人有房、左馬權大允藤原朝臣滋實二人、單騎直到賊所、賊先申心憂、次乞降、有房等雖不被明詔、而豫聽其降、是日陸奥權介從五位下坂上、大宿禰好蔭、率兵二千人、自流霞道至秋田營、賊乞降、之日、好蔭鼓譟而來、盛建旗幟、示威、賊虜論之、當時似有遠略、又鎮守將軍從五位下小野朝臣春風、九月二十五日、率軍四百七十八人、來着秋田營、以北即言曰、春風舍詔、先入上津野、致諭賊類、皆令降服、賊

首七人相從、同來、亦其首豪、隨而共來、以此見之、知有降心、云々

又同第三十五卷元慶三年三月二日ノ條ニ曰ク

正五位下守右中辨兼行出羽權守藤原朝臣保則飛騨奏言曰、臣保則等、(中略)臣等有、所、議、春風等且擁於鎮守府、待後告、可應機之狀、騎權椽小野春泉、告春風等、春泉未返鎮守府之間、去年九月十五日、好蔭來、自流霞路、二十五日春風來、自上津野、是時道路泥深、風寒、肅烈、經過險阻、士卒疲勞、云々

以上諸條ニ見エタル上津野ハ鹿角ナルト明瞭ナリ

○陸中國鹿角郡說

那珂通高稿

陸中國に鹿角といふ郡ありて里人は加都乃と呼び來れり此の郡は高山に登りて見れば其地のさま鹿の角に似たるゆゑにかくは號けたりといへりされど三代實錄に秋田城下の賊地十二村を擧げたる中に上津野火内と並べいへる火内は即比内にて今は檜内と書き鹿角と境を接ふれば鹿角は古の上津野にていまこそ陸中國には隸きたれ初めは出羽國の地なること疑無かるへしされは三代實錄の文の下の條にも小野春風等は自陸奥路人上津野村といひて上津野を陸奥國の地とはせさりしなり意ふに上津野はその初加美都奴といひけんを加



牟都奴と詛り終には牟の一言さへ省かりて加都乃とはなれるなるへし乃と奴とはもとより通ふ音なるに倭名鈔に妾を於美奈女とあるを此の里人は於奈女といへるにてもしるなり抑出羽國にて古くものに見へたる地名は秋田館代にて日本記には秋田を館田または館田に作り館代を淳代と書けるを三代實錄には野代に作る此館代の水門に注ぐ米代川の源は鹿角郡の東より出て西に流るれば古は此あたりまで舟よせしにこそあらめさるによりて上津とは呼ひけんを文字に泥みて其地のさまの鹿の角に似たるゆゑぞとはおしあてにいへるなるべしさて此郡の秋田の地なることはかく三代實錄に見わたれどもまたよくおもへは秋田も亦陸奥國の中なりけりそは夫木集の曾禰好忠の歌に陸奥の秋田の山は秋霧の立野の駒もちかつきぬらんと見ゆかくて此地を出羽國に隸けられしはいづばかりのことにかあらんいま考ふべくもあらねど秋田城置かれし頃なるべし秋田城は光仁天皇の實龜十一年の詔に前代將相の深く謀りて建てられたる所なりといへは孝謙天皇の御代に置かれたると明けしその後桓武天皇の延暦二十三年秋田城を停めて郡となされたれども上津野は陸奥國に隸けられたりとおぼしき由は上津野の内なる狹布里より調きする細布は何

れの書にも皆陸奥國とありて殊に延暦より十年をも經さる弘仁元年の太政官符にも應陸奥國浮浪人准土人輸狹布と見わて狹布は即細布なればその陸奥國に隸けること疑ふへくもあらず降りて文治年間に至りては上津野はさらなり比内も亦藤原泰衡の知りし所とおぼしくて東鑑に泰衡累戰皆敗將奔蝦夷云と路到比内郡贊桐爲其臣見紘といへりこれに據ればこの頃は比内郡までも陸奥國とはいへりしなり凡べて國郡は昔より制あれば誰か知る所となれりとも其境をは易ふまじきを同じ里にてあるは陸奥國に係りあるは出羽國にかくるなご皆亂れたる世の習はしにて何處にもかゝる例多ければ上津野比内のみにはあらざるへけれどこのあたりの事記せる書は世にまれなればうなきわざなれどもかく記しいでたるなりその後上津野に安保秋元、奈良成田といへる四人の武士ありて族ひろく勢強かりしを南部大膳大夫守行糠部郡より起りてこの輩を撃ち従へ秋田城介と戦ひてこれに勝ち秋田郡まで攻取りしことその家譜に見わたるが元龜天正の頃は安保秋元の人と又秋田家に屬きてければ此の郡もしばしは出羽國の地となれりその頃南部家の一族にて津輕郡大光寺城に住る左衛門光興といふ者ありてそれが秋田家の旗下淺利某を比内の大館城に



擒にしてその郡の中なる綴子といふ所まで攻とりて又陸奥國の地となし、か  
ど幾程もなく秋田家のものとなして比内は出羽國に隸き上津野は陸奥國と分  
れたりかくて慶長七年佐竹右京大夫義宣常陸國より秋田の地に移されしに陸  
奥國との境さだかならざりければ南部家とかたみに是を争ふことほとく五  
十年なり承應元年終に將軍家より御使番設樂市左衛門新御番頭中山茂兵衛な  
ごいへる人々をこの處まで下されて始めて始めて今この境をは定められつ出羽國は元  
明天皇の和銅元年に越後國言新建出羽郡許之五年九月始置出羽國十月割陸奥  
國最上置賜二郡隸出羽國焉と續日本記に見わたれども鹿角郡のことは見る所  
なし今は陸奥國を分ちて陸中國を置き舊のまゝこの郡をその國に隸けられた  
れどもその控を守る所は秋田縣なれば三代實錄の昔の如く出羽國の地となさ  
まほしくてかくなん

編者云古書色々ニ徴スルニ鹿角ハ往古ヨリ陸奥國ニ屬スル地ナルヲ以テ予  
ハ那珂氏ノ説ヲ取ラサルナリ

○建久二年源頼朝ヨリ南部三郎光行糠部五郡(三戸、九戸、北、鹿角、津輕)ニ封セラレ  
鹿角其一部ナリ

○南部氏家譜云家紋元來雖爲割菱。秋田與南部對陣之時。行兵之暇。爲慰士卒。作酒  
宴。時双舞鶴於陣營上。影翺々。映於守行盃中。鶴長生之鳥。勝利之吉兆也。既而一戰  
得勝利。守行大悅。祝而改割菱作双舞鶴也。

○櫻庭氏家譜云。應永年中。大膳大夫守行公御代。羽州秋田氏爭戰之時。櫻庭左近將  
監護御先手。進陣頭。自身取鎧而深入敵地。刺敵軍數多也。時戰急。而甲之立物四目  
結三。迄爲敵被切落。一殘留申終。追退敵首。一提飯本陣。備實檢。于時守行公問立物  
之破。護而答其故。有御威而向來可爲家紋之由。命自是取一。目而改釘貫紋也。武  
勇兼備世人是。唱牙左近不知其謂也。編者云右二條ハ鹿角郡ニ對シ關係薄キニ  
似タリト雖モ其秋田ト合戰ノ由來ニ至テハ鹿角ニ關シ重キヲ置カザルヲ得  
ズ故ニ記載ス



○十和田根ノ口古碑ノ圖

高九尺字拳大

十和田新道因別當左馬之丞願五戸郷  
藩吏木村又助秀晴窺

大守重信公之殿命普請之

昔元祿六<sup>四</sup>癸歲七月 日

山中見分之者五戸町

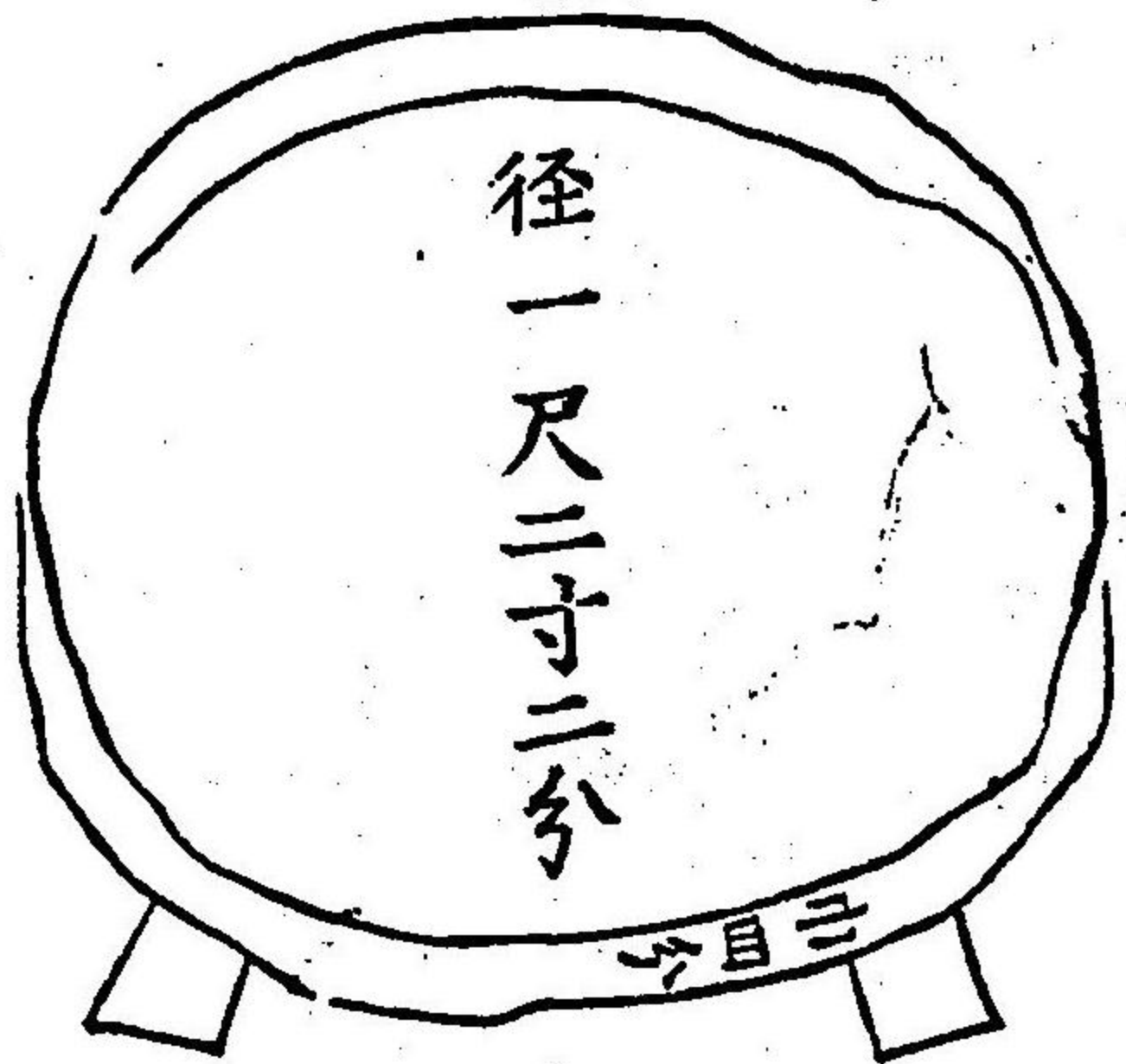
吉左衛門  
與左衛門  
太兵衛

○毛馬内人和田健次郎(舊不動院家)所藏ノ古書并古器左ニ記ス  
坂上田村麻呂眞蹟古經文 半卷 大同二年亥春

建武二年新田義貞謹書 一巻  
元龜元年六十六部卷物 一巻

古盆杉林

径一尺二寸二分



高三寸一分

裏ニ延喜十八戊寅歲ト彫刻アリ

○御巡檢使鹿角郡通行年次左ノ如シ  
舊幕時代徳川將軍代替リニ際シ幕臣三人ヲシテ各組ヲ分テ天下ノ國郡ヲ  
巡廻セシメ其政事ヲ觀察セシムルノ例ナリキ



寛永十年德川家光代麾下臣三人來ル(姓名欠)

寛文七年德川家綱代麾下臣佐々喜三郎中根宇左衛門松平新九郎ノ三人來ル  
延寶九年八月二十一日德川綱吉代麾下臣三人來ル(姓名欠)

寶永七年德川家宣代麾下臣細井佐二右衛門北條新左衛門新見七左衛門ノ三人來ル

享保二年德川吉宗代麾下臣有馬内膳小笠原三左衛門高木孫四郎ノ三人來ル  
延享三年丙寅六月德川家重代麾下臣山口勘兵衛神保四五左衛門細井金五郎

寶曆十一年德川家治代麾下臣三人來ル(姓名欠)

天明八年德川家齊代麾下臣三人來ル(姓名欠)

天保九年德川家慶代麾下臣三人來ル(姓名欠)

○當鹿角郡ハ往古糠部五郡ノ一ニシテ建久二年南部三郎光行ガ封セラレシヨ  
リ七百年領守ノ移轉ナカリシガ明治元年南部氏白石へ轉封後上地トナリ同  
二年真田藩ニ屬シ四年廢藩置縣ニ際シ江刺縣ノ管轄トナリ五年秋田縣ノ管  
轄ニ歸セシヨリ以テ今日ニ至ル

○建武元年源中納言顯家任陸奥國司居宮城郡師行爲國代從之始築城於糠部八

戸居爲顯家祝曰是蕩平本州根本之城也因号ニ根城遂賜根城傍近之地以爲采邑

適鹿角地頭有闕又併賜之(南部五世傳抄銀)

南部又次郎師行奥州鹿角郡之闕所被下證文  
顯家卿在判  
鹿角郡闕所少々所被宛行地頭也任御下文之旨可被沙汰居之内依國宣執達  
如件

建武元年三月二十一日  
南部又次郎殿

大藏權少輔清高



鹿角志卷之二

十灣 内藤調一編  
湖南 内藤 虎校

制度

○(舊南部藩)

御領分中惣高御年貢米御役金錢并御役立諸色員數元祿四年分改帳

(右ノ内鹿角一郡ノ分拔抄)

一萬一萬九千二百二十三石四升一合

鹿角郡

内

八千二百九石六斗三升六合

御藏入

一萬千十三石四斗五合

御給所

御物成納高

一萬三千七十一石五斗三升九合

花輪通

諸役



一 正月御禮金	高百石付貳分宛但肝煎一人六厘宛
一 同 御立木	高百石付十五駄宛一駄砂金七厘ノ直
一 同 ヘリナシ	高百石付十疊一疊金貳厘ノ直右之内五十三疊 ヘリナシニテ花輪御城松山御番所へ遣ス
一 五月御禮金	高百石付貳分宛肝煎一人六厘ノ直
一 同 御立木	高百石付金八厘貳毛宛
一 同 薯蕷百連代	高百石付一斗宛
一 粒菰	高百石付一貫七百目
一 麻糸	七斗
一 クルミ	高百石付壹步宛
一 走夫金	高百石付貳分宛分七厘 但二月九月兩度上ル
一 同 詰夫金	高百石付四兩貳分
一 御小者金	高百石付貳兩貳分
一 御材木金	高百石付一ヶ月三駄宛正五月之外十ヶ月分一
一 御月薪	

一 高二千六百二石四升三合

一 御馬飼料草青引代	駄金七厘ノ直
一 舫金	高百石付錢壹貫七百文
一 諸役	高百石付壹兩宛
一 正月御禮金	高百石付貳分宛肝煎一人六厘
一 同 御立木	高百石付十五駄宛一駄金七厘ノ直
一 同 ヘリナシ	高百石付十疊一疊金貳厘ノ直
一 五月御禮金	高百石付金貳分宛肝煎一人六厘
一 同 御立木	高百石付五駄宛一駄金七厘ノ直
一 同 薯蕷百連代	高百石付金八厘貳毛
一 粒作	高百石付一斗宛
一 麻糸	高百石付一貫七百目
一 走夫金	高百石付壹步宛
一 同 詰夫金	高百石付貳兩貳分七厘

毛馬内通



一 舫金 高百石付壹兩宛  
 一 御材木金 高百石付貳步宛  
 一 御月薪 高百石付一ヶ月三駄宛一駄金七厘但正五月之外十ヶ月分  
 一 御馬飼料草青引代 高百石付錢貳貫文宛  
 一 水澁柿 三百七十盃  
 一定番日用錢 高百石付四貫貳百文宛  
 一 御小者金 高百石付壹兩宛

所々御藏へ納米

一 高三千七十一石五斗三升九合 花輪御藏入  
 引合三ッ貳分貳厘九毛  
 御米千三百三十九駄片馬四升一合 毛馬内御藏入  
 一 高二千六百二石四升三合  
 引合二ッ壹分壹厘七毛

御米七百四十三駄三斗五升五合

御金月高

花輪通

一 三百八十八石八斗一升六合

田山村

高百石付六拾五匁

毛馬内通

一 千五百三十七石二斗八合

高百石付拾匁ヨリ九拾匁迄

酒屋

一 金拾六兩貳步

花輪中

十軒 上中下

一金五兩

毛馬内中

七軒 上中下



○明曆前後ノ鹿角郡貢米及諸役金錢ノ收納ハ花輪毛馬内兩館主ノ各家宰ニ委  
托セシモノナリ其明證ハ今日迄遺存シアル舊南部藩家老ヨリ右家宰ニ宛タ  
ル受取書ニテ徴スルニ足ル其小坂村半助家ニアル者寫左ノ如シ

五月梳飯金請取候事

一金五兩三厘四毛ハ毛馬内分高千六百六十五石三斗九升九合内六百七十二  
石五斗二升四合ハ古人御山見無主地荒高引殘九百九十二石八斗七升五合  
之御禮金百石ニ付貳分宛此外肝入四人一人六厘之積山之イモホド竹ノ子  
シホデ三ツメ五色代金百石ニ付八厘貳毛宛御立木高百石ニ付五駄宛壹駄  
ニ付四厘之直右御金此度取上儘ニ請取納候也

明曆四年六月四日

兵 助御印



藤右衛門御印

彌六郎御印

立山善兵衛  
湯瀬新右衛門

和井内治郎右衛門家ニアル者左ノ如シ

正月梳飯金上候事

一高二千百七石四斗二升九合

毛馬内御藏入

一三分五分八厘 正月御禮金高百石ニ付貳分宛

一十匁四分 御立木二百六十駄高百石ニ付十五駄宛一駄四厘之直

一三匁四分六厘 縁無百七十二疊高百石ニ付二疊宛一疊ニ付貳厘宛直

ノ十七匁四分四厘

右之通今度上ケ儘請取納候也

萬治元年閏十二月二十五日

九左衛門〇

藤右衛門〇

彌六郎

内藤勘兵衛との

湯瀬新右衛門との

此他幾通アレトモ略ス

○編者云小豆澤大日报社人ノ内谷内村住大博士ト稱スル者ノ所藏ニ係ル祭田證  
文ハ往古著名ノ國主ヨリ下附セラレタルモノニシテ希有ノ古書ヲ去ル年大



博士ノ家ニ就テ實見ノ儘謄寫シ置キシモノヲ左ニ記ス  
以 上

京都谷内村之内大日祭田二十三石六斗五升七合此内十三石七斗九升八本  
高爲祭田年貢赦免九石九斗二升八合卯ノ年檢地打出ノ分右是ハ年々物成  
リ指紙次第御藏ニ納可申候也  
元和二年六月晦日

利直

大日大博士

○南部二十二代國主右馬頭政康公五男武田(後毛馬内姓ヲ賜フ)勒負佐秀範君ハ  
初メ三千十八石ノ領知ヲ以テ毛馬内ヘ封セラレン人ナルカ當時御附人トシ  
テ佐羽内仁兵衛從屬シ來リシカ其祖先ヘ國主ヨリ賜リシ給祿證文寫左ノ如  
シ  
糠部郡淨法寺之内駒嶺ニ於テ三百石遺候知行可仕候也

慶長六年十一月二十三日

利直

佐羽内仁兵衛

佐羽内氏ハ後年ニ至リ自然毛馬内氏家臣トナリ其裔今日ニ至ルマテ鏡田村

○居住右證文ハ猶所有セリト

○立山氏ノ秋田城之介殿ヨリ給與セラレン證文寫左ノ如シ

一五百苧 松木村  
一六百苧 尺迎内村

合千百苧速可令知行者也

文祿四年七月十日

愛季

立山市内

知行方之事

一九十一石 山館村  
一七十四石八斗 茂内村  
一七十四石二斗 餌釣村  
已 上

右合二百四十石之所令扶助之條全可所務者也

慶長六年五月二十七日

實季



館山市内とのへ

右ハ他國ニ涉リタルコトニテ鹿角ニ關係ナキニ似タリト雖トモ立山氏中祖ヨリ今日ニ至ルマテ鹿角ニ住スルコト數百年既ニ土着ノ古家トナリシ上ハ其祖先ノ來歴ヲ現代ニ保存セシムルハ編者ノ最モ意ヲ注ク所ナリ

○鹿角全郡ヲ南北兩部ニ分チ南ヲ花輪通ト稱シ南部諸村之ニ屬シ北ヲ毛馬内通ト稱シ北部諸村之ニ屬ス而シテ花輪毛馬内ニ各公廩ヲ設ケ各長吏一員ヲ置キ之ヲ代官ト稱シ副一員ヲ置キ下タ役ト稱ス共ニ盛岡諸士ヨリ撰擇ス其下ニ屬吏數名アリ物書ト稱シ郷士ヨリ撰拔シ又其地ニ依リテハ百姓町人ヨリ撰擇スルコトアリ以テ諸務ヲ掌ラシメ而シテ代官ハ警察ノ事ヲ兼掌ス又別ニ小公廩ヲ建テ吏一員ヲ置キ歳奉行ト稱シ亦盛岡諸士ヲ舉ク專ラ貢米ヲ領收セシメ兼テ公私山林ノ事務ヲ管セシム、舊南部落ノ制度如斯

○舊南部落耕地制

田一反歩三百坪ニシテ上田中田下田下々田ノ四等級ニ分チ石盛ヲ附シテ貢米ヲ取リ畑ハ九百坪ヲ以テ一反歩トス上中下々ノ等級及石盛ヲ附シテ貢

米ヲ取ハ田法ニ同シ農民間ニハ田ニ於テ一人役二人役以上何十人役ノ稱呼アリ大凡七八畝歩ヲ以テ一人役トス畑ニ於テハ一ツ役二ツ役ノ稱呼アリ大凡三百坪ヲ以テ一ツ役トス又宅地及家屋ニ於テハ士農工商共一般租稅ナシ是ハ當時ニ於テ獨リ京都ト南部藩トノミナリキ勿論薪炭牧艸ヲ採ルニハ皆無稅ナリシ隨分慈仁深キ國柄ト謂フヘシ

○本郡ハ明治元年舊領主南部氏上地同二年眞田藩取締及三戸縣所管トナリ同

三年江刺縣ニ轉シ同四年三月秋田縣ニ屬シ以テ今日ニ至ル

○明治九年地租改正シ其耕地反別地價地租左ノ如シ

毛馬内村

田反別 二百二十五町八反九畝十五步

地價 五萬千三百五拾壹圓六拾錢九厘

地租 千貳百八拾三圓七拾九錢

畑反別 百十八町三反九畝十步

地價 八千〇四拾五圓三拾三錢六厘



宅地反別 地租 貳百〇壹圓拾三錢三厘  
 地價 二十八町〇五畝十八步  
 地租 六千五百拾五圓貳拾錢六厘  
 地價 百五拾三圓八拾八錢

大湯村

田反別 地價 二百七十七町八反九畝二十三步  
 地價 四萬三千六百貳拾三圓〇八錢七厘  
 地租 千〇九拾圓五拾七錢七厘  
 畑反別 地價 三百九十町五反八畝二十七步  
 地價 貳萬七千九百七拾三圓五拾四錢五厘  
 地租 六百九拾九圓三拾三錢九厘  
 宅地反別 地價 四十二町一反八畝二十七步  
 地價 六千七百七拾圓五拾六錢三厘  
 地租 百五拾四圓貳拾六錢四厘

小坂村

田反別 地價 三百二十八町九反五畝十一步  
 地價 五萬五千八百拾壹圓拾五錢貳厘  
 地租 千三百九拾五圓貳拾七錢九厘  
 畑反別 地價 百九十七町七反一畝十八步  
 地價 壹萬四千貳百九拾四圓五拾貳錢貳厘  
 地租 三百五拾七圓三拾三錢八厘  
 宅地反別 地價 二十六町二反九畝五步  
 地價 三千六百五拾貳圓九拾六錢三厘  
 地租 九拾壹圓三拾貳錢四厘

山根村

田反別 地價 九十一町〇九畝〇一步  
 地價 壹萬貳千貳百〇五圓六拾四錢八厘  
 地租 三百〇五圓拾四錢壹厘  
 畑反別 地價 百七十五町四反六畝〇二步  
 地價 五千六百七拾六圓七拾四錢九厘



地租 百四拾壹圓九拾壹錢九厘  
 宅地反別 十二町七反八畝十四步  
 地價 千百貳拾壹圓八拾五錢四厘  
 地租 貳拾八圓〇四錢六厘

大地村

田反別 五十一町二反八畝二十七步  
 地價 九千〇〇壹圓拾七錢九厘  
 地租 貳百貳拾五圓〇貳錢九厘  
 畑反別 三十三町八反六畝十六步  
 地價 千八百四拾貳圓六拾九錢八厘  
 地租 四拾六圓〇六錢七厘  
 宅地反別 三町七反二畝〇八步  
 地價 三百八拾壹圓拾貳錢六厘  
 地租 九圓五拾貳錢八厘

瀬田石村

田反別 七十二町三反四畝步  
 地價 壹萬四千七百五拾六圓拾三錢四厘  
 地租 三百六拾八圓九拾錢三厘  
 畑反別 五十六町〇一畝二十三步  
 地價 三千〇七拾六圓四拾八錢九厘  
 地租 七拾六圓九拾壹錢貳厘  
 宅地反別 七町〇八畝十五步  
 地價 七百貳拾五圓三拾六錢貳厘  
 地租 拾八圓拾三錢四厘

荒谷村

田反別 百十八町三反三畝〇二步  
 地價 貳萬〇九百六拾六圓〇八錢  
 地租 五百貳拾四圓拾五錢貳厘  
 畑反別 八十四町五反六畝十三步  
 地價 四千六百四拾四圓貳拾八錢九厘



地租 百拾六圓拾錢七厘  
 宅地反別 五町三反七畝十五步  
 地價 五百五拾圓貳拾九錢三厘  
 地租 拾三圓七拾五錢七厘

上向村

田反別 六十九町七反〇十九步  
 地價 七千貳百八拾八圓四拾八錢  
 地租 百八拾貳圓貳拾壹錢貳厘  
 畑反別 百七十八町三反三畝十七步  
 地價 五千貳百貳拾六圓七拾四錢九厘  
 地租 百三拾圓〇六拾六錢九厘  
 宅地反別 十九町三反〇二十四步  
 地價 千貳百七拾圓〇八拾五錢三厘  
 地租 三拾壹圓七拾七錢壹厘  
 平元村

田反別 二百五十九町三反一畝步  
 地價 五萬〇六百九拾八圓八拾六錢六厘  
 地租 千貳百六拾七圓四拾七錢貳厘  
 畑反別 二百六十九町六反五畝十七步  
 地價 壹萬五千四百拾六圓貳拾壹錢  
 地租 三百八拾五圓四拾錢〇四厘  
 宅地反別 二十五町六反四畝十四步  
 地價 三千圓〇六拾八錢貳厘  
 地租 七拾五圓〇壹錢七厘

草木村

田反別 百三十六町五反二畝七步  
 地價 壹萬八千百貳拾壹圓貳拾錢八厘  
 地租 四百五拾三圓〇三錢  
 畑反別 百九十町六反二畝十六步  
 地價 七千六百七拾三圓三拾五錢七厘



地租 百九拾壹圓八拾三錢四厘  
 宅地反別 十九町八畝二十五步  
 地價 千五百三拾五圓〇八錢三厘  
 地租 三拾八圓三拾七錢七厘

錦木村

田反別 二百三十一町二反〇二十七步  
 地價 四萬五千六百三拾八圓拾四錢  
 地租 千四百拾圓〇九拾五錢四厘  
 畑反別 百四十町九反九畝〇九步  
 地價 八千百三拾五圓七拾五錢七厘  
 地租 貳百〇三圓三拾九錢四厘  
 十八町九反〇〇五步  
 宅地反別 貳千〇七拾三圓三拾貳錢三厘  
 地價 貳千〇七拾三圓三拾貳錢三厘  
 地租 五拾壹圓八拾三錢三厘

末廣村

田反別 百七十七町九反二畝二十七步  
 地價 三萬八千六百七拾壹圓〇七錢九厘  
 地租 九百六拾六圓七拾七錢七厘  
 畑反別 百七十一町四反〇二十四步  
 地價 壹萬五千九百三拾四圓〇五錢  
 地租 三百九拾八圓三拾五錢壹厘  
 宅地反別 二十町二反二畝六步  
 地價 貳千五百拾三圓九拾五錢九厘  
 地租 六拾貳圓八拾四錢九厘

岡田村

田反別 五十三町七反七畝九步  
 地價 九千八百八拾貳圓拾九錢壹厘  
 地租 貳百四拾七圓〇五錢五厘  
 三十七町五反七畝二十七步  
 畑反別 貳千六百九拾壹圓三拾七錢壹厘  
 地價



地租 六拾七圓貳拾八錢四厘  
 宅地反別 四町四反八畝十五步  
 地價 四百五拾九圓拾七錢四厘  
 地租 拾壹圓四拾七錢九厘

右七小區通計

反別 四千四百七十二町五反〇〇八步  
 內 田 二千〇九十四町二反四畝十八步  
 畑 二千〇四十五町一反〇〇九步  
 宅 二百三十三町一反五畝十一步  
 地價 五拾貳萬八千貳百五拾五圓四拾五錢六厘  
 內 田 三拾七萬八千〇拾四圓八拾五錢三厘  
 畑 拾貳萬〇六百三拾圓〇拾貳錢貳厘  
 宅 貳萬九千六百拾圓四拾八錢壹厘  
 地租 壹萬三千貳百〇六圓三拾八錢三厘  
 內 田 九千四百五拾圓三拾七錢壹厘

畑 三千拾五圓七拾五錢貳厘  
 宅 七百四拾圓〇貳拾六錢

花輪村

田反別 四百八十四町七反二畝二十八步  
 地價 拾壹萬五千八百拾七圓四拾五錢三厘  
 地租 貳千八百九拾五圓四拾三錢六厘  
 畑反別 四百二十四町四反八畝二十步  
 地價 三萬六千〇五拾七圓拾三錢壹厘  
 地租 九百〇壹圓四拾貳錢八厘  
 宅地反別 五十五町〇八畝〇九步  
 地價 壹萬四千五百〇壹圓拾五錢壹厘  
 地租 三百六拾貳圓五拾貳錢九厘  
 柴內村  
 田反別 三百六十二町四反一畝〇四步



地價	七萬貳千貳百貳拾八圓五拾貳錢九厘
地租	千八百〇五圓七拾壹錢三厘
畑反別	二百九十一町七反五畝〇九步
地價	壹萬六千九百九拾三圓六拾貳錢五厘
地租	四百貳拾四圓八拾肆錢壹厘
宅地反別	二十九町五反六畝〇九步
地價	三千四百六拾壹圓六拾七錢
地租	八拾六圓五拾四錢貳厘
長井田村	
田反別	二百八十三町八反九畝步
地價	四萬七千貳百五拾圓六拾九錢三厘
地租	千八百八拾壹圓貳拾六錢七厘
畑反別	二百四十二町四反一畝十五步
地價	壹萬〇五百拾六圓六拾八錢貳厘
地租	貳百六拾貳圓九拾壹錢七厘

宅地反別	二十六町三反二畝十四步
地價	貳千五百〇貳圓六拾八錢五厘
地租	六拾貳圓五拾六錢七厘
長谷川村	
田反別	二百六十八町二反四畝十八步
地價	四萬千七百〇八圓拾貳錢貳厘
地租	千〇四拾貳圓七拾錢〇三厘
畑反別	百九十九町九反七畝二十九步
地價	八千百貳拾四圓貳拾九錢八厘
地租	二百〇三圓拾錢〇七厘
宅地反別	二十四町〇二畝二十四步
地價	貳千百〇八圓四拾五錢七厘
地租	五拾貳圓七拾壹錢壹厘
宮麓村	
田反別	百九十六町〇一畝十步



地價	四萬〇三百七拾圓四拾三錢六厘
地租	千〇〇九圓貳拾六錢壹厘
畑反別	百八十五町〇九畝九步
地價	壹萬千八百貳拾壹圓〇〇八厘
地租	貳百九拾五圓五拾貳錢五厘
宅地反別	十三町二反九畝二十七步
地價	千六百五拾三圓三拾三錢貳厘
地租	四拾壹圓三拾三錢三厘
右八小區通計	
反別	三千〇四十七町三反一畝十一步
內田	千五百五十五町二反九畝步
畑	千三百四十三町七反二畝二十二步
宅	百四十八町二反九畝十九步
地價	四拾壹萬八千八百九拾五圓八拾八錢七厘
內田	三拾壹萬千五百五拾五圓八拾四錢八厘

畑	八萬三千五百拾貳圓七拾四錢四厘
宅	貳萬四千貳百貳拾七圓貳拾九錢五厘
地租	壹萬〇四百七拾貳圓三拾九錢五厘
內田	七千七百七拾八圓八拾九錢五厘
畑	貳千〇八拾七圓八拾壹錢八厘
宅	六百〇五圓六拾八錢貳厘
尾去村	
田反別	五十一町〇九畝十四步
地價	壹萬千三百七拾三圓六拾八錢
地租	貳百八拾四圓三拾四錢貳厘
畑反別	百二十町〇一畝八步
地價	九千九百九拾六圓三拾六錢
地租	貳百貳拾九圓九拾錢〇九厘
宅地反別	九町三反一畝六步



地價 千三百八拾九圓貳拾錢  
地租 貳拾八圓九拾四錢貳厘

松谷村

田反別 百〇三町六反九畝十六步  
地價 貳萬貳千〇四拾七圓五拾六錢  
地租 五百五拾壹圓拾八錢九厘

畑反別 六十八町三反四畝十九步  
地價 四千〇四拾七圓六拾八錢  
地租 百〇壹圓拾九錢貳厘

宅地反別 七町〇三畝六步  
地價 八百六拾三圓九拾貳錢  
地租 貳拾壹圓五拾九錢八厘

三矢澤村

田反別 十二町三反〇二十八步  
地價 千四百三拾圓三拾貳錢

地租 三拾五圓七拾五錢八厘  
畑反別 三十一町八反三畝二十三步  
地價 千貳百貳拾四圓七拾六錢  
地租 三拾圓〇六拾壹錢九厘

宅地反別 三町二反六畝二十三步  
地價 貳百八拾六圓七拾六錢  
地租 五圓九拾七錢四厘

右九小區通計

反別 四百〇六町九反〇二十三步  
內 田 六十七町〇九畝二十八步  
畑 二百二十町一反九畝二十步  
宅 十九町六反一畝〇五步

地價 五萬千八百六拾圓貳拾四錢  
內 田 三萬四千八百五拾壹圓五拾六錢  
畑 壹萬四千四百六拾八圓八拾錢



宅 貳千五百三拾九圓八拾八錢  
 地租 千二百九拾六圓五拾錢六厘  
 內 田 八百七拾壹圓貳拾八錢九厘  
 畑 三百六拾壹圓七拾貳錢  
 宅 六拾三圓四拾九錢七厘

鹿角全郡總計

反別 七千八百二十六町七反二畝十二步  
 田 三千八百十六町六反三畝十六步  
 畑 三千六百〇九町〇二畝二十一步  
 宅 四百〇一町〇六畝〇五步  
 地價 九十九萬九千〇拾壹圓五拾九錢三厘  
 田 七拾貳萬四千〇貳拾貳圓貳拾六錢壹厘  
 畑 貳拾壹萬八千六百拾壹圓六拾六錢六厘  
 宅 五萬六千三百七拾七圓六拾五錢六厘

地租 貳萬四千九百七拾五圓貳拾八錢四厘

田 壹萬八千〇〇〇圓五拾五錢五厘

畑 五千四百六拾五圓貳拾九錢

宅 千四百〇九圓四拾三錢九厘

〔參考〕右改正ハ陸奥宗光ノ建議ニ基ツキ明治九年ニ行ハレタリ

○田租改正ノ建議

陸奥宗光

伏惟フ本邦田租ノ法古今時代ノ沿革ニ從ヒ種々變改遷ニ今法ニ及ブ而シテ其法タル一得一失未  
 々全備ニ至ラス蓋シ地多クハ其實ヲ失シ石少多クハ其度ヲ限ル且ツ歲月ノ遷移民力ノ増減ニ  
 從ヒ古者ノ上田ナルモノ今者ノ下田トナリ其下田ナルモノ反テ上田トナリ又田畑ニ伸縮ノ差ア  
 ルアリ肥瘠ノ別アルアリ以テ租稅ノ甘苦ヲ懸ス曠習ノ久シキ上下之ヲ常トシテ怪マスト雖トモ  
 其民ニ管アル甚シト云フヘシ而シテ今之ヲ一定改正セント欲セハ盡ク天下ノ田畑ヲ檢量シテ  
 正セサルヲ得ス乃チ檢地以テ地ノ廣狹ヲ正シ石量以テ地ノ肥瘠ヲ定ムルニ題キス其術タル之ヲ  
 一郡一村ニ施スモ尙容易ナラス況ンヤ天下ノ大機許ノ時ヲ要スチ知ル可カラサルニ於テチヤ其  
 間奸吏隨テ私曲ヲ逞シ愚民從テ狡詐ヲ恣ニスルコトヲ得ヘシ假令其奸ト斷トシテチカワレム  
 ルモ推測成算ノ間亦誤失ナキヲ保タス才難老練ノ輩ヲシテ其主宰ヲシムルモ其成功ヲ期スル  
 程乎トシテ際遇ナシ是其實地現在今日洗除シ能ハサル弊害ノ最モ著明ナルモノナリ況ンヤ今法



ノ如ク國國ノ租稅盡ク米穀ヲ收納スルノ弊端是ヨリ甚シキモノナリ如何トナレハ政府理財ノ道ニ於テハ歲出歳入ノ算限シメ確定セサル可カラズ乃チ明年ノ經費ハ今年ヨリ豫算セサル可カラズ而シテ明年ノ要凶今年ヨリト知ス可カラズ故ニト知ス可カラサルノ租稅ヲ以テ豫算セサル可カラサルノ公費ニ用ントス即チ未定ノ歳入ヲ以テ必用ノ歳出ヲ算ラサルヲ得ス理財ノ實術亦難カラズ且夫租稅米穀ヲ以テ收メレムルノ法封建ノ世ニ於テハ其運搬スル各部内ニ在リ之ヲ消費スル亦多クハ各部内ヲ出テス故ニ上下尙未々其弊ヲ見ス今ヤ郡縣ノ制課率ノ方法必ス一途ニシテ全國ノ租稅必ス之ヲ一處若クハ兩處ニ輸入セサルヲ得ス陸ニハ運輸ノ失費ヲ出シ水ニハ破船ノ危難ヲ抱ク凡ソ收稅法ノ煩雜疎漏ニシテ且不公平ナル之ヨリ甚シキハナシ臣故ニ左陳テ呈ス即チ今法ノ田租チ一變シ從來ノ石高反別石高免檢地檢見等一切ノ舊法ヲ廢除シ現在田畑ノ實價ニ從ヒ其幾分ヲ課シ年額ヲ定メ地租ニ充ントス其例假令ハ田地原價ノ百分ノ五ヲ地租ト假定スヘシ茲ニ甲田一畝アリ其地固ヨリ膏腴ニシテ水利ノ便アリ其價必ス貴クシテ一千圓ナルヘシ其地租チ五拾圓トス又乙田一畝アリ其廣狹甲田ニ同シト雖モ其地固ヨリ瘠土疎圃ニシテ耕作ニ便ナラサレハ其價モ亦必ス卑シテ五百圓ナルヘシ乃チ其地租チ貳拾五圓ト定ム是迄ノ上中下田ノ稱ヲ混同シ唯其地ノ良否肥瘠ニ就テ實價チ出サシムヘシ其價ニ就テ稅ヲ定ム故ニ其地其肥ナレハ田價必ス貴ク田價貴ケレハ地稅必ス重シ之ニ反シテ其地百瘠ナレハ田價必ス卑シ田價卑ケレハ地稅必ス輕シ如此ナレハ上下互ニ損耗ナク勞チ省キ煩チ去リ地租以テ中正平均ニ至ルヘシ臣謹ニ大坂兵庫和歌山ニ在職シ其法ヲ計考シ略定算ヲ得タリ又嘗テ一二ノ老農ニ質問シ村尾

ノ實際ヲ悉セリ之ヲ勘量スルコト略悉セリ施行ノ術亦甚々難カラサルヲ知ル若シ臣カ職ヲ以テ探ル可アリトセハ願クハ之ヲ大藏省ニ下シ臣ト合議シ取捨斟酌以テ施行スルコトヲ得セシメンコトヲ即チ其施設ノ方法ノ如キハ實地ニ就キ詳密ニ具狀スヘシ謹言

○明治十年政府北秋田鹿角二郡ヲ合シテ秋田縣第二大區トナシ大館ニ扱所ヲ置キ區長一人ヲ置ク其諸町村ヲ合併シテ九ノ小區トス鹿角全郡ヲ三ノ小區ニ分割シ北部諸町村ヲ第七小區トス毛馬内ニ扱所ヲ置キ副區長一人戸長副戸長各數人ヲ以テ區内ノ政務ヲ管掌ス南部諸町村ヲ第八小區トス花輪ニ扱所ヲ置キ其西部ヲ九小區トス尾去澤嶺山ニ扱所ヲ置キ區戸長ヲ置クコト共ニ七小區ノ如シ同十二年郡區編成改正セラレ花輪町ニ郡役所ヲ置ク二十三牟町村制施行全郡ヲ二町八村トナス曰花輪町曰毛馬内町曰尾去澤村曰曙村曰宮川村曰柴平村曰錦木村曰大湯村曰七瀧村曰小坂村而シテ各町村公民ヲシテ各町村會議員各十數人ヲ撰舉セシメ其議員ヲ以テ各町村長ヲ撰舉スルモノトス其詳ハ町村制ニアリ

又郡役所ニハ郡長一人郡書記數人ヲ置キ郡内各町村長ヲ統治セシム又警察署ヲ花輪ニ置キ其分署ヲ毛馬内ニ置キ各村ニ駐在所ヲ置キ警部巡查交互更



代シテ司法行政ノ事ヲ掌ル  
明治七年花輪毛馬内ニ各三等郵便局ヲ置キ其後小坂鐵山及大湯ニ三等郵便局ヲ置キ數年ヲ經テ花輪ニ電信局ヲ置キ二年ヲ越テ毛馬内ニ亦電信局ヲ置キ續テ小坂鐵山ニ電信局ヲ置ク

○本郡戶數及人口 明治三十七年十二月三十一日現在

町	村	男	女	合	計	戶	數
花輪	町	三千九百七十四人	三千八百九十一人	七千八百六十五人		千〇八十七	
毛馬内	町	二千五百七十七人	二千二百七十四人	四千七百九十一人		八百六十八	
尾去澤	村	二千四百五十一人	二千四百二十八人	四千八百七十九人		六百八十六	
宮川	村	千八百七十六人	千七百〇三人	三千五百七十九人		五百〇九	
曙	村	千四百〇〇人	千二百六十〇人	二千六百六十〇人		三百四十八	
柴平	村	千八百七十三人	千六百二十六人	三千四百九十九人		四百七十六	
錦木	村	千四百五十七人	千二百七十七人	二千七百三十四人		三百六十二	
七瀧	村	千四百五十三人	千二百二十一人	二千六百七十四人		三百三十九	

小坂	村	二千四百八十二人	二千二百六十〇人	四千七百四十二人		千四百六十三	
大湯	村	二千二百〇七人	千九百七十四人	四千百八十一人		六百六十六	
合	計	二萬千六百九十〇人	一萬九千九百十四人	四萬千六百〇四人		六千八百〇四	



鹿角志卷之三

十灣 內藤調一編  
湖南 內藤 虎校

地理 上

○五十四郡考 抄錄

東郡 新井君美著

陸奥 廣瀬典補遺

東陸州郡建置沿革。無得詳焉。世之所稱。以爲五十四郡。而古有三十五郡。於今亦稱五十二郡。其說皆不合。接舊事紀。成務始分其地。定以爲國者八。曰阿尺。曰伊久。曰染羽。曰浮田。曰信夫。曰白河。曰石城。史稱成務始分國郡。以定邑里。即此之謂也。應神復置道與。菊田。道口。阿岐。閉。神野。等國。凡其爲國者。十有一。

阿尺後改安積。伊久後改伊具。染羽後改糠葉。浮田史作優者疊。後改字太。亦作宇多。石城後改磐城。思國未詳。道與。道口。古俗相稱。道路近遠之語耳。阿岐。閉。一作阿岐。後改安積郡。安積鄉地。神野後改加美。按道與一作陸奥。又作陸道奥。方語並同。猶言東



道之奧區也。後併十一國。以是為名。實防于此。○又按舊事國造紀。先是景行之世。始置那須國。而次序在石城國下。神野國上。蓋上世以為道奧之地。已後及廢。為隸下毛野國。

厥後新建陸奧國。並廢舊國。以為屬郡。蓋出自孝德大化制焉。

弘仁二年二月。詔曰。夫郡領者。雖波朝廷置其職。蓋上世以來。國有國造。縣有縣主。未有郡領之稱也。置郡於各國。實自孝德始。而史景行紀曰。陸奧國成務記曰。始分國郡。皆後人追稱之語耳。

齊明四年四月。定置鵜田。淳代。津輕等郡。

據史是歲四月。鵜田淳代等蝦夷來降。乃定置淳代。津輕等郡。鵜田一作飽田。後改秋田。淳代今野代地。

和銅五年十月。割最上。置賜。二郡。隸出羽國。

是歲始置出羽國。故也。

後亦分鵜田。淳代。二郡。隸出羽國。

據史天平五年十二月。遷出羽。權於秋田村高清水園。蓋先是既分秋田。淳代等地。隸出羽國也。

七年十月。置郡於香阿閉等村。

是依蝦夷所請也。今稗貫郡香沼邑。乃古香阿閉。今閉伊南北地。

養老二年五月。置石城石背等國。割石城。標葉。行方。宇田。亘理。菊多。六郡。隸石城國。割白河。石背。會津。安積。信夫。五郡。及常陸國多賀地名菊郡。並隸石背國。

石背今作岩瀨。

初成務置石城國。後廢為郡。至于此復再置石城及石背國。後亦皆廢為郡。

按神龜五年四月。新置陸奧國。白河軍團。蓋可見先是既廢二國為郡。合陸奧國也。

弘仁二年正月。置和我。禪縫。斯波三郡。

和我後作和賀。禪縫後作禪拔。又作都賀。今作稗貫。方俗呼如禪縫。仍古之遺稱。耳。斯波後作志波。又作志和。

延喜六年正月。分安積郡。置安達郡。據延喜式部省式。延長五年十二月。所奏陸奧國所管者。曰。白河。曰。岩瀨。曰。會津。曰。耶麻。曰。安積。曰。安達。曰。信夫。曰。刈田。曰。柴田。曰。名取。曰。菊多。曰。磐城。曰。標葉。曰。行方。曰。宇多。曰。伊具。曰。亘理。曰。宮城。曰。黑川。曰。加美。曰。色麻。曰。玉造。曰。志太。曰。栗原。曰。磐井。曰。江刺。曰。膽澤。曰。長岡。曰。新田。曰。小田。曰。遠田。曰。氣仙。曰。杜鹿。曰。登米。曰。桃生。凡郡三十五。前史所載。而其不錄者九。新史既亡。莫有所考。



津輕。丹取。香阿閉。多賀。階上。和賀。稗縫。斯波。等九郡。不載于式。考之源順所錄者。多賀。科上二郡。後併宮城郡。並為郡。其餘未詳。

源順所錄

皆與式合。而自註曰。白河郡分為高野郡。會津郡。今分為大沼。河沼。二郡。安達。信夫。二郡。分為伊達郡。蓋天曆天元之間。凡其為郡三十九。拾芥抄所載。亦與式合。而增加高野。和我。稗縫。斯波。磐手。等郡。參之源順所錄。則郡之為數。多其一。而大沼。河沼。伊達。等郡。皆不載。註云。已上四郡不入式本。蓋謂和我。稗縫。斯波。磐手。等四郡也。

然和我。稗縫。斯波。並見國史。而岩手郡。亦見東鑑。磐岩俗通用。東鑑與六郡。註伊澤。和賀。江刺。稗拔。志波。岩手。又云。岩手郡。厨川。柵。按東鑑刻本作岩井。郡。厨川。柵。誤。今南部。治城在岩手郡。乃古厨川。柵。地。郡去岩井。郡。中間相隔。和賀。伊澤。等郡。行程凡百三十餘里。東鑑又載葛岡。比內。楳部。等郡。但其建置皆不可考。

比內。又作肥內。楳部。一作精部。者非。節用集所載。亦如拾芥抄。而加之以大名門。阿會沼。石川。稻我。磐前。金原。階上。葛岡。本吉。

群栽。鹿角。比內。閉伊。津輕。為五十四郡。

津輕。閉伊。階上。既見國史。葛岡。比內。並見東鑑刻本。作為田河內者。誤。

五十四郡。名始見于此。未知是何據也。

延喜式曰。凡諸國部內郡里名。並用二字。而節用所載郡名。阿會沼。大名門。並用三字。其餘自古未之有。而今亦所無者。皆可以疑已。

然藤行長記時人之言曰。陸奧古有六十六郡。後分十二郡。為出羽國。雖是無稽之言。其說所由亦既久矣。

藤行長所撰平家物語。阿古屋松條。

方今版籍所載。曰白河。曰白川。曰石川。曰田村。曰岩瀨。曰會津。曰大沼。曰河沼。曰耶麻。曰安藤。曰安達。曰信夫。曰伊達。曰刈田。曰柴田。曰名取。曰菊多。曰磐城。曰磐前。曰檜葉。曰檜葉。曰行方。曰宇多。曰伊具。曰互理。曰宮城。曰黑川。曰加美。曰玉造。曰志田。曰栗原。曰磐井。曰江刺。曰膽澤。曰遠田。曰登米。曰桃生。曰本吉。曰氣仙。曰牡鹿。曰和我。曰稗貫。曰志和。曰岩手。曰鹿角。曰二月。曰三月。曰九月。曰閉伊。曰北郡。曰津輕。總五十二郡。考之史籍。古郡併廢者。色麻。長岡。新田。小田。葛岡。凡五分置者。白川。檜葉。二月。九月。凡四分。改名者。田村。二月。九月。凡三分。北郡。未詳。南部。田氏。曰古老相傳云。南部舊有七郡。和我。稗貫。志和。岩



手。鹿角。閉伊。海上。若依此說。則今三戶地。舊屬若手郡。古海上。即今北郡地。然海上古未之聞。以俟後考。

補遺曰。按秋田卜部一閑所著水慶記。南部信直。以天正十五年。介前田利家。致信於豐臣氏。修臣順之禮。與羽二州。是爲通使之始。是以豐臣氏欣。即以其所并取之閉伊。磐手。鹿角。禪繼。津輕等郡。爲封。其後信直又亡。斯波氏得其郡。而失津輕。田氏所謂南部。有七郡。不知指何時而言也。

其餘皆仍舊已。因按色麻。新田。今皆併加美郡。爲邑。

色麻。俗作鹿間。亦作四窠。方語皆通。今加美郡。有上四窠。下四窠等邑。即此。初建武二年秋。源尊氏叛。乃以源家長。爲陸奥守。管領國事。明年春。家長與官兵戰。死于相州。尊氏乃以源家兼補陸奥。出羽等國。探題職。家兼以新田爲治所。而其所轄之地。總稱大崎。是嫌其郡名同仇家之稱。故因家兼所食邑名。而稱之也。

補遺曰。始所謂大崎郡者。以是始建。而新田郡竟以廢矣。

郡失舊名。乃因于此。家兼子孫傳之。十世至大正中。而喪其地。今加美郡。屬邑。有上新田。中新田。下新田等。乃古郡遺名。長岡。今併栗原郡。爲邑。

源義和曰。邑今在栗原郡金屋莊。美按昔皇室政衰。班田法廢。官私墾田。名曰莊園。周偏天下。兼并二郡。以爲一郡。邑中僅存舊名耳。

九戶。乃古糠部郡。

世稱天正中。源政實。以糠部地。叛。據九戶城。是也。○按東邊以部爲名。頗多。蓋方言也。補遺曰。緣邊地。以部名者。不獨東。阪。紀。伊。南。邊。有田部。切部等。皆濱海之地。義與邊同。不單聲同。

古有閉村。即今閉伊南北地。閉部讀同禪繼。東鑑作禪拔。又作部貫。方語相同。緣拔。其語亦同。謂拔出部內。以置此郡也。比內。即部內也。糠部。猶言負部。義與禪繼同。比爪。又作極爪。今作日詰。猶言部限也。凡界限。古俗謂詰。史稱燒津。俗呼燒詰。是也。今二月。三月。九戶。及野邊地。田名部。其義皆同。

補遺曰。以秋田藩白川七郎。藏古文書觀之。元弘時。九戶者。糠部郡中一鄉名耳。後廢糠部名。郡以九戶。而統其地乎。文書曰。下糠部郡。可早令結城。參河前司。親朝。領知當郡內九戶。右馬頭。茂時。跡事。右件人。令領知彼戶。於貢馬以下者。無懈怠。可沙汰之狀。所仰如件。元弘三年十二月十一日。由是觀之。今之所稱。五十二郡。實則其爲郡者。止有五十矣。美因論之曰。古者郡里制。凡



戶以五十爲里。置長一人。以二十里以下十六里以上爲大郡。置大領一員。小領一員。主政。主帳。各三員。二十里一千戶也。十六里八百戶也。十二里以上爲上郡。大小領各一員。主政。主帳。各二員。十二里六百戶。八里以上爲中郡。大小領。主政。主帳。各一員。八里四百戶。六里以上爲下郡。大小領。主帳。各一員。注欠二里以上爲小郡。領主各一員。二里百戶也。其大領。叙外從八位上。少領外從八位下。主政。主帳。初位以上。亦各有差。

銓擬有例。考選有法。所以導揚風化。撫字黎民也。東陸之地。古稱邊要。軍國之容。中外異制。郡領已下員外權置。

大同三年十月。征夷大將軍。按察使。陸奧守。坂上田村麻呂。奏言。郡司之任。職員有限。邊要之事。願異中國。望請擬任幹了勇毅之人。宜爲防守警備之備。制可。

如其大領。假授從五位下者。往往而有。承和十年九月。始置鎮府。分總戎團。信夫郡已南租稅。以充國府公廩。刈田郡已北稻穀。以充鎮兵餉。

弘仁格。按延喜式。陸奧國租稅公廩八萬三千七百十五束。而其十六萬二千五百十五束。爲鎮官料。復分相模國租稻五萬四千三十七束。爲鎮守府公廩。蓋國中公廩不足。盡給而取之。他州以爲鎮官料矣。

若夫前史所載。東邊諸郡。皆在式外者。蓋延喜之前。並復以爲荒服矣。

據今。凡邊遠國有夷人雜類之處。應輪調役者。隨事斟酌。不如華夏。蓋中外之制。其政頗異矣。若夫東陸之州。土壤曠濶。毛人雜居。其俗勇悍。叛服靡常。延曆以降。邊疆鎮靜。及弘仁初。制置和親。釋縶。斯波等。郡。尋廢。仍舊。蓋是之時。以衣河關。界中外之域。而關外之地。不役其人。不賦其田。乃如虞舜荒服之制矣。史文闕略。其詳莫考。已。陸奧話記云。六郡郡司。安部賴良。忠良子。其祖忠賴。東夷酋長。部落皆服。橫行六郡。漸出衣河外。不輸貢賦。出猶言入。是謂其侵略內地也。以今地理考之。古之所謂與六郡者。膽澤。江刺。並在內地。和賀。釋縶。斯波。若手。皆在關外。前史所載。而在式外者。皆關外地耳。

及皇政不綱。邊備不戒。北部豪族。安氏。父祖屢侵塞關。遂併內地。自領六郡事。而官不敢問焉。永承寬治之間。戎馬即動。迄無寧歲。初。安氏之亂。清原武則戰。而有功。爲鎮守將軍。管六郡軍事。以是傳之。藤清衡。藤氏三世最稱富強。邊烽無警。九十餘年。

據東鑑。鎮守府將軍。清原武則子武貞。以藤原清衡爲繼子。清衡傳領與六郡。清衡子基衡。管領陸奧出羽兩國軍事。基衡子秀衡。爲鎮守府將軍。兼陸奧守。從五位上。三世凡九十六年。

田野日闢。編戶歲增。制里置郡。蓋有如世之所稱者。



東鑑所載。葛岡。岩手。比内。糠部等郡。前世未聞者。可證已。

當是之時。史官失職。其地文獻亦不足徵也。文治之亂。府中圖籍悉燬矣。

據東鑑。東兵累敗。泰衡。經。火府庫而逃。奔州之圖籍皆成灰燼。州人橋實俊。實行。兄弟。能。請。故事。源。二位。召問焉。乃授筆為圖。二州之山川郡邑。皆在目中。唯失其書耳。

建武已後。南北分裂。國亦大亂。今其山河雖在。而府鎮關城。乃至無形迹之可求。延及近世。勝國之主夾輔。皇室。號令。諸侯。疆天下。創制田賦。

天正中。大暈天下之田。隨其多少。以定軍之賦役也。

若彼郡里之制。有名而無其實。則復與古異矣。

補遺曰。源二位。併地與權。而自取之。天下非復古之天下。況區區之郡縣乎。然迄室町氏之末葉。郡司莊司之胄。遙遙承襲。不至不祀為多也。織田氏。豐臣氏。崛起草莽。以攻伐為禮義。干戈為仁義。不踰數年。刷蕩天下。功業貫速成。夷滅不避舊家。屠戮及無辜。天若早降我神祖。在彼二氏之前。以仁慈不殺之心。而行吊民代罪之事。區宇歸于一。而民不蒙其慘。名族久不滅。而國郡之粉。更亦不至于今日之甚。白石氏之歎。豈其不宜乎。○余嘗與二本松。成田。伯溫。論。伯溫曰。郡縣之亂。戰國割據之時為甚。奪得全國。全郡者。素不改其名。以為已有。若只降其片郡。隻城。而不足仍其舊號。則必移之。管我。

郡中。是以紛亂錯糅。或至於朝以彼郡稱之。夕以我郡呼之。余聞其言。考之近郡。班班可證。野常。與羽等國。以此語為眼目。而視之。通古者甚多。時勢人情。天下大抵相同。則東國已然。雖西南北。亦必當有同似者。故書以詔好古者。使之得考索之一端。

○最明寺殿人國記曰

陸 與

富國ノ風俗ハ日本ノ偏鄙ナル故ニ人ノ氣ユキ詰マリテ氣質ノ倚尖ナルヲ萬丈ノ岩壁ヲ見ルカ如シ適マ道理ヲ知テモ前非ヲ改ムル事ナシ譬ハ江水ノ流滯塵芥積テ清ムルコトナキガゴトシ因之名人ト呼程ノ人<sub>不</sub>聞得<sub>ナリ</sub>右ノ生得ナル故タノモシキ事モアリ又ナサケナキ風モアリ五十四郡ノ内何レモ二ツ三ツニ風俗ノカワリメアレトモ大樞此趣キナリ此國ハ日ノモトノユヘニ色白フシテ眼青ミアリ人ノ形相最モ賤フシテ言詞卑劣ナレトモ勇氣ハ日本ニ比フ所モアルマジ因<sub>コレヨリ</sub>之無益ノ死ヲスル者有但偏僻ナリト雖モ其意地潔白ナル所アリ女ハ容良色白ク髮長ク顔ウルフン但形相音聲スグレテ鄙劣ナリシカレトモ其心底ノ真正ナル事ハ外ノ男子ニモ勝<sub>レリ</sub>凡富國及出羽上野下野上總下總常陸等大概人ノ音聲上調子ナリシカレ故倭執ナル事ナク差當所ノミ大カタニ動ルナリ



思慮分別ノ深キ事ハナシ殊ニ此國社鹿郡載鹿角階上津輕宇多數郡ノ人別シテ楚忽ノアラマシナル風ナリトソ

按ニ當國大國ナル故所々ノ異ナル風土有然共凡山ヲホキ國ナリ民俗本書ニ詳ナリ會津ハ白川ヨリ西ニ入道ニ山谷相續キタル國ナリ西ハ越後ニ隣テ寒烈雪深キ事北國ヨリモ勝タリ岩城相馬ハ所ノ本名ニハ非ス總州ノ部名名トナハ東ノ海濱ナリ故外ヨリハ寒緩シ白川二本松赤館三春白石福嶋等ノ所々皆山中ノ形氣ナリ仙臺ノ如ハ當時繁昌ノ地ナル故風儀上國ニ習ヘリ與ノ郡ニ至テハ南部名是亦所ノ本名ニ非ジ甲州ノ在ハ仙臺ヨリモ尖ニ寒烈雪深津輕ハ南部ヨリモ亦烈其風土ニ隨テ人心モ自別ナリ松前ハ蝦夷ニフハキテ風儀又異ナリシカレドモ本書ニ説クコトク一偏ノ鄙屈ナル事ハ各カハルコトナシ古昔ハ與ノ夷トテ人倫ニモ不通禽獸ノコトキ風ナリシニ中古上國ノ人君長トナリ政治ヲ施ス力ニヨリ其風ニ化セラレテノゾカラ人間ノ道ヲモシレルニヤサレハ近頃マデハ民家ニ子ヲブツカヘストイフコトアリ産子三乳ニ及ヒヌレハ其父母コレヲ殺ス人は是ヲアヤシマズ父母モ亦恬然トシテ側色ナシ其不仁ナルコト實ニ夷狄ノ風ナリシガ誠ニ仁風ノ遠ク及ヘルニヤ殘

忍ノ俗化シテ今其事ナシトソ

編者云以下數條ハ本郡所傳古記ヲ轉錄ス文辭鄙陋ナルモ盡ク其舊ヲ存セテ昔シ花輪ノ内皮投山ノ高ミヘ二月ヨリ狢來リテ熊ヲ大分取候テ皮ヲ投捨候故皮投ノ嶽ト申候彼嶽ヨリ鹿角川目見分候得ハ鏡ノ如クナル沼見ヘタリ狢申候ハ此川目開候ヒテ田畑ニ仕候ハ能キ郡ニ有ヘント見濟雪消申候時彼狢鹿角

へ引越花輪本館へ移リ柴内村ヨリ切明其頃此村ニ柴立故柴内トハ云々夫ヨリ鏡ノ池邊開申候今ノ鏡田是也其子孫花輪今泉ノ式部大町ノ鍛冶安平也俗説ニ百丁比夫ヨリ段々開捕村々人數深山ニ成三百丁ノ所ナリ水上ヨリ川筋ノ流レ内千丁比夫ヨリ段々開捕村々人數深山ニ成三百丁ノ所ナリ水上ヨリ川筋ノ流レ鹿角ニ能似タル故鹿角トハ申由昔郡ヨリ左少辨ト申公家ヲ被遺鹿角御見分被成京都ニ似タル處トテ京ノ郡鹿角ノ庄ト申候由

安保氏兄弟三人京郡ヨリ下向ノ事  
奥州京ノ郡鹿角ノ庄へ都ヨリ安保氏ノ兄弟三人被遣ケル嫡男ハ大里ヲ領シテ大里上總守カ先祖也次男ハ花輪ヲ領シテ花輪次郎先祖三男柴内村領地柴内瀨



次郎先祖ナリ其後秋本成田カ一黨ヲ御下シ有猶夫ヨリ奈良ハ大湯村へ下着則  
領知ス

○鹿角四十二郷二侍四十二人之覺

- 一 田山村 田山右京進領居館有後島山三郎知行ス
- 一 佐比内村 佐比内采女領館ハ飯市ニ有リ
- 一 湯瀬村 本ハ湯瀬中務領名字成田後湯瀬刑部領本名阿部一戸ヨリ來ル館有
- 一 長嶺村 長嶺下總領本名成田居館有
- 一 三ヶ田村 三ヶ田左近領本名阿部居館アリ
- 一 谷内村 本ハ谷内三郎領名字成田館有後南部御先祖御下以後一戸彈正左衛門領名字武田也 正友一所ニ被遺事
- 一 長牛村 本ハ秋元彈正左衛門領秋田牢人館有リ後ハ一戸攝津守一戸次男名字武田長牛彌四郎先祖鹿角國人銃頭三戸ヨリ御一門南部九郎正友被遺石鳥屋居城此時一所ニ被指越也

- 一 夏井村 夏井但馬領名字安保館有
- 一 長内村 長内刑部領名字成田館有
- 一 白掛村 白掛勘解由領館有
- 一 石鳥屋村 本ハ石鳥屋五郎領名字安保館有後南部九郎正友祖南部殿御一門鹿角三百町銃頭三戸ヨリ被遺事
- 一 松館村 松館越前領名字安保館有
- 一 尾去村 尾去越中領名字安保館有
- 一 小豆澤村 小豆澤駿河領名字秋元館有
- 一 大里村 大里上總守領高千石ニテ本名安保館アリ上總守先祖ハ鹿角郡へ都ヨリ下シ被差置ケル上使ノ頭也本姓ハ丹治氏ナリ
- 一 玉内村 玉内大炊助領本名安保津經へ半人貞任ノ末子附添人ナリ□嶋へ落行ク秋田下國是レナリト云
- 一 花輪村 花輪次郎領本名安保大里上總守先祖實弟ニテ一所ニ下リ花輪臥牛本館へ移リ其子孫村替ニテ九戸郡圓子へ高三百石ニテ被遺後天正九年大光寺左衛門佐ニ信直公ヨリ高三千八百石ニテ被遺知行村數花輪尾佐利石鳥屋



三ヶ田夏井等也

一 黒土村 黒土丹後領本名秋本館有リ

一 高瀬村 高瀬土佐領本名秋本知行村敷久保田用之目花軒田松山高梨川原館居館ハ高瀬ニアリ

一 高屋村 高屋筑前領本名秋本館アリ秋田へ卒人以後信直公御代佐藤近江ニ被下也

一 柴内村 柴内彌次郎領本名安保高千三百石花輪次郎末弟都ヨリ一所ニ下リ館アリ

一 乳牛村 乳牛六郎領本名安保館アリ

一 中柴内村 中柴内八右衛門領本名安保柴内彌次郎一門也

一 折加内村 折加内勘右衛門領本名安保柴内彌次郎一門也

一 高市村 高市玄蕃頭本名成田居館アリ

一 新斗米村 新斗米左近領本名奈良館アリ

一 大湯村 大湯左衛門督領本名奈良ノ惣領嫡子四郎左衛門次男次郎左衛門三男彦左衛門也惣領ノ四郎左衛門ハ天正十九年九月へ一味シテ生捕ラレ主九

戸ト一處ニ仙臺ノ三ノ迫ニテ切腹スル次郎左衛門彦左衛門ハ津輕へ卒入スル次郎左衛門ハ南部へ被召返知行二百石被下三男彦左衛門ハ津輕越中守へ奉公スル後大湯五兵衛ハ南部ノ一門毛馬内鞠負カ從弟也大湯小坂ニテ知行二千石領スルナリ

一 小枝指村 小枝指左馬之助領本名奈良大湯左衛門督次男

一 小平村 小平彦次郎本名奈良小枝指弟ノ末也

一 神田村 神田十郎領本名成田居館ハ基石館也

一 毛馬内村 毛馬内備中本名成田ノ惣領後ニ南部鞠負領天文年中三月ヨリ被遣知行二千石毛馬内瀬田石大欠日暮躰赤澤樽柏躰鱒口屋敷菅生躰籠屋ノ母居館古ハ當麻館後ニ柏崎館

一 瀬田石村 瀬田石太郎左衛門領本名奈良其後毛馬内大學領ナリ家來ノ月館隠岐知行分也斯波郡御陣之時隠岐武者奉行被仰付忠ヲ仕リ月館村七百石被下候

一 大地村 大地甚之丞領本名成田居館アリ

一 小坂村 小坂筑後領本名秋本居館有其後大湯五兵衛領館アリ



- 一 荒川村 荒川備中領本名成田居館アリ
- 一 濁川村 濁川但馬領本名秋本居館アリ
- 一 八幡館村 秋元兵部領砂子澤ニ館有
- 一 高清水村 高清水豊後領本名成田居館アリ
- 一 關神村 關神安房領本名成田館アリ
- 一 芦名澤村 芦名澤太郎兵衛領本名奈良館有シキヒ館ト號ス芦原ノ觀音堂ノ所ナリ
- 一 草木村 奈良越後領寺坂室田居館九館
- 一 高梨村 高梨土佐領本名秋本高瀬周防一門也子孫無之後ニ與四郎左衛門領此四郎左衛門ハ棟部郡一戸ヨリ文明年中罷越川原館ニ居ケル處ニ秋田ト鹿角合戦ニ付高瀬周防下知文明元年三月高梨館へ移申候自是四郎左衛門ヲ高梨宮内ト云其子孫今鹿角大森村ニ長右衛門トナ有之候

○八郎太郎カ事

一八郎太郎ハ鹿角郡柴内村ト草木村トノ奴也來滿小國山ヲ越六戸ノ内與瀬ノ

十和田ニ行ケル所ニ級ハギ小屋ニテ飯炊番ニ居ケル故澤へ下リ水汲ニ行澤ノ中ニイワナト云魚三ツ有リ取テ小屋へ歸リ炙リテ食ケル甚味ウマシ又彼澤へ行殘リ二ツモ捕テ食シケルニ喉悉ク渴キケル故小屋ニ有水ヲ飲ケレトモ飲足ラス次第々々ニ咽ノカハキ止マヌ後ニハ澤水ニ吸付テ飲ケルカ八郎太郎居タル所次第々々ニ水増シ川欠ニ成リ後ニハ澤中沼ニ成其身躰モ替リ忽蛇躰ニ成ケル友達ノ奴共狩ヨリ歸リ八郎太郎ヲ尋ケルニ篋カンシキヌキ拾沼ノ内ニ大蛇ノ形ニ成居ケル皆々動顛シ如何成事ニテ其コトクニ成行ケルト尋ケレハ右ノ次第ヲ一々申ケル是非ナク歸リ親兄弟妻子ニ其旨語ケレハ大ニ驚キ彼所へ行八郎太郎ニ見舞申ケルハ今一度人間ノ形ニテ見へ候得ト申ケレハ又本ノ人躰ニテ出申ケルハ前世ノ因果ニテ如此成ケレハ思ヒ切テ歸リ玉ヘト云ケレハ皆々モ力ナシミノカンシキ形見ニ持テ泪ニ古郷へ歸ケル今ニ其子孫有リテ其時ノ篋カンシキ有トカヤ則彼沼十和田ノ湯是也ソレヨリ歳時ハルカニ去テ後ニ觀音堂六供ノ内三戸郡科町龍現寺ノ近所ニ來滿坊ト云出家有ケルカ常ノ願ニハ萬代死スル事ヲ通シ玉ヘト紀州熊野ノ權現へ三十三度參詣シケル後南宗坊ト云ケル權現ノ告ニ曰此山ノ麓ニ必草鞋可有其ヲハキテ諸國ヲ廻リ其ヲラ



シ切タル所ニソ汝カ住所ニヌヘシトアリ果シテ草鞋アリ是ヲハキ下リシカ  
十和田ノ湯ニテ切ケルハ則蛇躰ト成リ八郎太郎ヲ追出シ住所スヘシトテ飛入  
ケル八郎太郎大ニ怒リ喰合ケル南宗坊ハ一代ヨミケル終ニ八郎太郎戰負テ追出サレ  
八郎太郎ハ篋ノ目ノ數口ニ成互ニイトミ戰ケル終ニ八郎太郎戰負テ追出サレ  
依之南宗坊ノ湯ト成今ニ至テ喰合戰ケル所赤根嶋トテ有ケル其ヨリ八郎太郎  
ハ鹿角郡ヲ湯ニセント米白川ヲ突留ントテ手立ヲ廻シ大石共ヲ牛ニ附テ領當  
ノ十文字野越水越有ニ牛ノ爪跡石トテ湯瀬然ル所鹿角ノ四拾三躰ノ鎮守ノ稻荷  
大湯ノ關神近所ノ宮へ御寄合御評定有テ花輪村臥牛大殿ニテ鍛冶十二人ニ金  
槌鶴ノ嘴打セテ八郎太郎カ包メル所ヲ破リ玉ヲ稻荷等ノ神御評定ノ宮ヲ集宮  
ト云花輪村ヨリ金槌鶴ノ嘴牛ニ附集宮へ遣シ玉ヲ柴内ノ近所ニテ牛血ヲ吐  
ケル處ヲ血牛村ト云花輪ニ鍛冶屋敷又ハ十二人ニテ金槌鶴ノ嘴打ケル處ヲ十  
二村ト云扱四十三躰ノ内大里村ノ稻荷ハ高嶺ニ御建有故鹿角中湯ニ成テモ仙  
北ヲ守ヘキト御寄合ナキ故八郎太郎追劫以後殘リノ稻荷遠イカリ玉ヒ大里ノ  
稻荷ヲ嶺ヨリ引落シ玉ヲ夫ヨリ今ニ至リテ米白川ノ端ニ建玉ヲ其時ニアヤマ  
チン玉ヲ故イマタ彼イナリ足ヲ引玉ヲヨシサテ八郎太郎ハ鹿角郡ヲ追出サレ

方々尋テ羽州秋田へ行男鹿村ノ内ヲ宿カリケレト里人宿ヲカナス里ノ端老人  
夫婦有ケルカ漸々ト宿ヲ借ケル其所ヲ湯トナシケル後老人夫婦ハ其故今男鹿  
神トイワイケル

○錦木塚別當黒澤圓次郎祖先ヨリ傳來ノ錦木山縁起左ノ如シ

奥州狹郡

錦木山觀音寺縁起

抑當寺錦木山觀音寺者人皇三十六代皇極天皇之御願所番國大守敏達天皇第五  
宮瑞籬皇子之御建立也其源者人皇十三代成務天皇之御宇奥州黎民動干戈度  
々也其來由者地理不分明而民爭奪境小者無勝火結黨而鬪爭故置郡司正邪正北  
奥州五郡者大己貴命之苗裔狹名大夫同帝三年御下向當國置吏長分地理之上  
定町數限界令開堤溝教農耕之道自是農夫等說服而無爭界民人服帝褒美其功  
改豐岳之郡狹名之以狹字稱號狹郡狹名大夫居官三十七年仲哀天皇二年於狹郡  
豐岳邑薨狹名大夫八代之後胤政子女得工布精或時織始毛布細布之根元也民間  
兒女習之而色色雜鳥毛織毛布長二丈六尺幅七寸其頃同郡草城里長子某戀慕政



子女而立錦木三年既及千束政子女初程者有慙人恐父之心重月而見夫容良吾故不似初而瘦恨聲入身中如爲死身作有身者古川里心者有草城之里而奴乘良荒父大海曰先祖文石不幸而落民間家貧而離間民自狹名大夫八代家名人知之嫁里子耻家名對先祖不孝之至也制之不許嫁長子自是臥病床闕針藥飲食推古天皇七年七月十日遂早世政子女哭泣無止心腸大痛暈倒而同月十五日誘引無常風命葉忽落大海悲嘆除乞長子之亡骸同穴故子女而以十束錦木埋之故號錦木塚(塚五間四方高一丈五尺三重上塙大石居)遺言曰立錦木成媒組緣起源者遠神代近頃人皇十代始崇神天皇之御宇其比道四道將軍(將軍ノ始)靖正戎夷故國家平均令皇子豐城命治東國至奧州而巡見郡縣而功臣等爲部吏改不正令教正道豐岳郡之部吏者山雄臣至豐岳郡立鄉邑長而治郡邑農夫等守下知民相和或時山雄垣間見里女而成夢成現露無忘雖然可言寄無使思餘而忍女家折節錦木之色濃紅二月花爲君手折立置窓忍閨中戰慄而身振或進或退于勞女見之坐心搖走出取持錦木取御手入閨中約二世之事自是鄉中娶妻立錦木云々

人皇三十一代敏達天皇爲師物部守屋好文史非佛法父皇欽明帝之朝自百濟國

獻釋迦像今度自百濟新羅重奉經論守屋奏曰本朝自古有神道而天下自平也患何不足事此經論厥戶皇子蘇我馬子宿禰好佛法尊崇敬貴其頃疫癘大起守屋曰是因信異佛輕國神毀室燒佛像流其灰難波堀江其僧逐遠嶋用明天皇在位二年而崩守屋以穴穗皇子爲奉即位馬子不從却而奉殺穴穗厥戶皇子蘇我馬子率軍殺守屋并中臣勝海其一族悉罪之敏達帝第五宮者守屋女岩手姬夫人皇子也故除皇子之列奉成庶人配流奧州當國之部吏猪人依馬子下知爲奉秋北與之部吏有麻呂竊奉迎五宮宮造奉恭敬猪人初五郡之官司等來豐岳尊護敬伏三十六代皇極天皇元壬寅年五宮七十三歲配流有勅免而上京有配所五十二年此時當國之產物毛布細布三百反砂金百兩獻自是爲貢物帝曰大職官鑣子朕伯父七人叔母十人幸五宮殘命父大兄皇子爲再會之念御落淚甚其時鑣子毛布細布由來遠敬聞帝押御感淚狹名者往昔勳功臣且而名家也命哉至政子女家斷絕堪痛哭草創一字之堂慰亡魂賜正觀音一軀善信自百濟持來木像誠難有勳願也同四年五宮還立一寺所賜之安忍觀世音稱號錦木山觀音寺因仁恩亡魂列安養聖衆生碧落遙隔都卒天噫々孝德天皇大化元乙巳年八月二日道師惠正法師敬白



○追言 安保權之助親行家譜多賀實錄抄實錄五宮二十一代居住多賀代々譜

一、政子女囊祖狹名者大已貴命二十六代之苗裔也成務帝之御宇北奥五郡之爲司村里ニ立置邑ノ長政法無私シカノミナラズ民ニ農業ヲ教ヘ東奥ノ民ヲ北奥ニ移シ倉廩ヲ開テ農夫ヲ賑ス故ニ他邦ノ民モ仁政ニ懷テ招サレニ來リ集ル其頃郡中ニ嶋ノ鷲ト云者山林ニ栖テ里ノ兒ヲ擲行民是ヲ嚴ニ術ナク農事ニ荒ム者多シ狹名鷲キ遷鞠明神ノ社ヲ造營シ高祖大已貴命ノ所持シ玉ヲ鞠ヲ寶殿ニ納メ鳴弦修シ祈願シ玉フ是ヨリ鷲民ノ子ヲ取事ナシ田夫等歡喜而四季ノ祭祠無怠今藥師カ峯ニ移シ奉リ藥師狹名之大夫之後胤狹名杜本文石安世健相狹野大海政子女八代政子女布緒ノ業ニ妙有テ毛布ノ細布ヲ織始諸人賞翫ス是ヨリ里ノ婦女是ヲ習ヒ諸ノ鳥ノ毛ヲ以テ織ル其頃狹名郡ヲ毛布之郡ト書事同韻ヲ以書スト云上古ノ事ニシテ其據知ラス只毛布ヲホメテ毛布之郡ト書ト見ヘタリ

一、敏達帝ノ皇子息長眞手ノ王女廣姫皇后ノ生ミ玉フ皇子一男二女老女君ノ夫人ノ腹ニ三皇子一女岩手姫ノ腹ニ五宮ノ皇子兎名子ノ夫人ノ腹ニ二皇女豐

御食炊屋姫ノ皇后ノ御腹ニ二皇子五女十七人在敏達帝ノ御弟用明天皇即位シ玉ヒ皇子既戸皇子政事ヲ總録ナシ玉フ蘇我ノ馬子ノ宿禰輔佐シ奉リ佛法ヲ信用敬貴ス用明帝崩後ニ守屋穴穗皇子ヲ位ニ即ケ奉ラントス皇子馬子モ不從却テ馬子穴穗ヲ弑奉リシカノミナラズ三十三代崇峻天皇ヲ弑奉リ守屋ヲ殺シ子族悉ク罪ス五宮ハ守屋ガ孫也皇子十七人之列ヲ除キ庶人トナシ奉リ奥州ニ遠流シ奉ル馬子謀弑奉ラント北奥ノ部吏有摩有猪人カ弟高枝ト謀ツテ五宮ノ難ヲ救ヒ奉リ豊岳ニ供奉シ奉リ豊岳ニ宮造リシテ妹美和子ヲ以宮仕シ奉リ五郡ノ牧領主等和順シ奉リ君臣ノ禮ヲナシ三十六代皇極天皇元年勅免有テ上京ナシ玉フ此時三品ニ叙シ赤冠ヲ賜フ大職官鎌子奏曰ク奥州ハ大國ニシテ人ノ心勇健ナリ動ハ戎夷起テ一國不平ナリ五宮ノ御子富穗ハ勇有テ智有リ民ノ富ルヲ見テハ且ツ喜ヒ貧民ノ訴ヲ聞テハ且ツ驚キ課役ヲ免シ玉フ思フニ仁德帝ノ量有リ家臣ニ有摩麻呂弓ヲトツテハ神武ノ皇子神淨名川ノ命モ耻玉フホドノ名士ナリ堅横大夫ハ智武内モ不及勇力萬夫ニ越タリ十三郡ノ勇牧等二人ガ武威ニ恐レ富穗王ノ德ニ和而十三郡ノ武士君臣ノ約ヲナス富穗王ヲ以テ奥州ヲ治メ玉ヒ帝喜テ鎌子ヲ以テ執達ス奥州



岩出郡不來方ノ庄ニ城ヲ築キ府トナシ玉フ父五宮同年八月豊岳ニ隠住シテ  
老夫ト遊テ五十二年ノ勞苦ヲ忘レ玉フ同年十二月晦日於豊岳ニ墓シ玉フ熊嶽  
ニ送葬奉リ三品五宮明神ト尊崇シ奉リ麓ニ九間四面ニ建立祠堂、毎歲十二月  
晦日祭之

祭祀ノ品無紋ノ白旗ヲ連テ祭官白衣ヲ着シ百味ヲ備ヘ神樂ヲ奏シ神慮ヲ  
ス、メ奉ル郡中ノ老夫十二月二十八日ヨリ晦日マテ庭火ヲ燒キ上古ノ事  
ヲ言シテ追慕シ奉ル神主ハ堅横ノ大夫ガ孫大幸豊饒ノ者ナリ世ニ蜻蛉長  
者ト號ク

一、觀音寺大破ニ及カ炎上之節再建スル事再建代々

天平寶字二年富穗五代大江大人磨再建

貞觀九年安保上野介從五位侍從親仁再建

天曆五年安保陸奥守從五位親平再建

安和元年兵火同人再建

康平七年安保備中守親雄再建

治承元年鎮守府將軍藤原秀衡公ノ下知ニ依テ安保上總介親光再建

寛元四年羽州神宮寺ノ大守安保權大夫親顯再建

貞和五年安保伯耆守親義再建

爰ニ毛馬内ノ住人成田越前ト云者鄙賤ヨリ出テ生得強勇ニシテ隣郷ヲ掠メ  
取リ權威ヲ振フ貞治壬寅元年榮内ノ領主檜代八郎ガ城ヲ賣ム此時觀音寺ノ  
住僧覺水代八郎ガ弟也土民三十餘人ヲ連テ越前ガ館ヲ燒キ妻子ヲ殺シ奴僕  
ヲ切殺スコト草ヲ刈ガ如クス越前是ニ驚キ三ノ閉伊ヘ逃テ兄ノ徳永軒ヲ頼  
ミ三ノ閉伊之勢ヲカリ再ヒ榮内ヘ來ル代八郎花輪ヘ走テ一族ヲ催ス越前此  
時四月下旬觀音寺ヲ燒キ寺僧五人徒黨ノ土民三十二人切殺シ寺内ヲ破却シ  
被官ニ割賦シ地領ヲ押領シ成田豊前ニ遣ス自是觀音寺斷絶ス或時越前カ曰  
ク錦木塚ノ内ニシテ機音有ト云塚ヲ穿テ塚之中ニ其靈魂有テハタラカ實  
否ヲ見テ世ノ迷ヒヲ明ト松柏ノ森々ノ藪々タルヲクタク塚ヲ掘穿テ土中ヲ見  
ルニ心ニカ、ルモノナレサモ有ント土ヲヨセ私館ニ歸ル夫ヨリ瘴病煩不日  
ニシテ死セリ

人王三十四代



一推古天皇七已未歲七月十日狂夫死ス同月十五日政子女卒ス此年ヨリ皇極天皇元壬寅歲マテ四十三年ニナル

人王三十六代

一皇極帝元年政子女ノ爲ニ觀音堂御草創アル此年ヨリ貞治元壬寅年マテ七百

二十一年ニナル但觀音寺ハ皇極帝四年此年大化元乙巳歲ニ瑞籬皇子敏達ノ宮

ノ宮嶽大明神也五御建立也テハ七年ヨリ貞治元年ニナル

○右年合テ貞治元年マテ七百六十三年ニナル

人王九十九代後光殿院

一貞治元壬寅年四月下旬觀音寺成田越前カ爲ニ燒失シテ永ク斷絶ス此年ヨリ

文化二乙丑年マテ四百四十四年ニナル

○前後合而文化ニ凡千二百七年ニナル是ハ政子女死テヨリノ年數ナリ

一草城村之男通ル道ノ跡ヲケフノ細道ト云右ノ道ニ今モ露ナシト云草城ヨ

リ塚迄ハ一里餘今ハ草木村ト書ナリ

一男政子女ニ逢ハテ歸ル曉小流ニ涙ノ顔ヲ洗ケルトナリ依テ小流ヲ涙川ト云

今ニ有リ後百姓ノ唱ニハウレイ川ト云ナリ



欠

MISSING



音に聞くけふの細布着て見んと思にむせぶ胸もあくやと

實 隆

○錦木塚懷古

遊歷人作

君不見。南部城西毛布里。綽約處女。□□裡。慧性關心世所稀。明眸皓齒一何美。□□擇對未許嫁。里中好色誰家子。覲覲彼妹寄殷勤。心旌搖搖亂若雲。目挑情馳無不到。尾生之信那足云。躡牆撼說無由去。夜夜微行多露露。有鷲雉鳴松桂谷。綏々狐行草城路。街風冒雨度幾宵。檨檨林中錦繡樹。一夜一株春復秋。千株千夜未曾遇。身疲氣衰奈情何。墮淚川畔獨經過。維時鶯發驟雪翻。倏忽凍死斃郊原。妾亦感之心私慕。遂期黃壤契幽婚。一樹空認同穴塚。塚千年賜詔。吊香魂。楓葉秋紅錦機張。蟋蟀聲吞自斷腸。我亦與東探勝客相傳。俗說謾成章。章成佇立藥裡側。古河風水轉沾裳。

○錦樹丘

同人

古河陳迹吊荒涼。錦樹秋寒幾夜霜。猶有陰蟲傳促織。機聲勢斷人腸。

○錦樹墳歌

長谷川龍嶺 空閑人

孤村地僻倚幽邃。忽看片石埋紫翠。云是狹里錦樹墳。野翁爲說千古事。君不聞昔者推古皇帝時。邑之長有好女兒。女二八名。政子。碧紗窓裡巧織機。天質美不假粧紛。玉貌閑



麗雪爲肌。細腰織手何其飽。齒如合貝翠羽眉。寒蟬峨峨綽態多。更疑芙蓉出綠池。遐邇無聞老與少。見之何人不惱思。草城村中一男子。風塵清英美姿儀。眷戀政子爲最甚。寄情通錦樹。枝千枝萬條。遂不答。秋風誰感。顏色衰。臥病空去窻。窻。鄉。政子始聞。不勝悲。仰天慟哭。淚爲血。懷恨吞聲。瓊花萎。何知一旦先朝露。父母哀號無盡期。悔令悲愴不埋婚。合尸聊葬郊北原。郊北原頭艸蕭瑟。爲栽錦樹成墓門。墓門不朽千餘歲。猶看拱木連枝存。國風往往弔古在。君豈無辭慰芳魂。聞之余亦淚模糊。撫碑長揖且踟躕。墓乎墓乎吁何久。埋身莫嗟在荒蕪。維雖天地多墳塋。今古獨高錦樹名。

○錦木塚懷古

玉山秀典 盛岡人

狹里蕭條幽草深。霜寒旅客少來尋。白雲山外含秋日。紅樹村中響暮砧。雁幣不須媒氏職。鳳琴難挑美人心。孤墳似訴千年恨。颯爾凄風動錦林。

○錦木塚懷古

泉澤修齋

錦木當年不見收。幽婚遂得其孤丘。老杉空護一塊石。長記草木來往秋。

○錦木塚和泉澤修齋詩

高橋松園

錦木墳前促機鳴。終宵咽露若爲情。千秋未擲寒梭恨。猶作當年札札聲。

○錦木塚

香國 土居通豫 土佐人

織手織毛併織愁。蕭郎遺恨淚河流。可憐錦木無人問。風雨空山土一邱。

○題錦木墳

小野素郷 盛岡人

錦木や顯れ出て舞ふ胡蝶  
荒晴や露の細道涙川  
夜の雪錦木塚のいかに降

○けふのせはの

天明五年の秋つかろちをへて南部の鹿角郡になりて錦木のむかしを尋ね岩手郡和賀郡を過て仙臺路にかゝり江刺郡に片岡村邑に宿りたもまたかいのせたり其言葉みしかういひもたらされはけふのせばのよと名づく

参河の眞澄誌

編者云眞澄大人ハ菅江氏ナレトモ自著ノ書ニハ皆参河ノ某トノミ記セシヨシ眞澄遊覽記三百卷ハ皆ヲ佐竹侯ノ所藏ナリシヲ明治三十二年ノ交秋田圖書館ニテ借受ケ贈寫セシメ今ハ同館ニ蔵セリ眞澄氏平常晝夜共手中ヲ冠リ頭顯ヲ露ハサハシ故世人綽號シテ常被リトイフ



葉月二十六日あしたのま雨ふりてほどなう晴れ行遠近のやまのけしきたくふ  
かたなう見やりつゝ行は遠う行ならん雁の聲のみしてしはしのうちに霧ふか  
うこめてそこかたもしらされは

いつこにかさして行らん山たかみあさる雲に消るかりかね  
さなめたるいにしへ人の心まておもひ出られてあはれいとふかく過れば又  
村雨ふり出て沾れつゝ來ればみちのおくの南部鹿角郡土深井といふ里を左に  
出て松山の館をへて岨路わけくれば木ふかう茂る山陰にはらゝと鳴る音の  
うちしきるはいかにと草かるあけき兒にとへは鹿のなつきおしとて雄鹿とし  
のぬかどぬかどをおし合ひ角と角とを打たゝかはしける其音といふいつこに  
やどうかゝへは雄鹿ふたつ木立よりいてゝ奥山に去ぬ伊夜彦の神の麓にけふ  
らもか鹿の伏らん皮のきぬきて角つきなからとあるを此こゝろにもいはゝい  
ひてんかわきてこの山路は鹿のいと多しといへはこのわらは聞て名さへ鹿角  
にてとうちわらふにいつれをかかつの郡の名もしるくおしかあらそふ秋の山  
かけ  
ゆくゝも又おなしうつれなしと待やわふらん角つきに雄鹿つまかふわさも

わすれて 新田神田といふ邑につきたり川水ふかくいてまさりて舟わたさね  
はこゝに泊る夜更てか戸の鳴るに寝さめて 萩の葉の音せぬ夜半も身にそし  
むたひねの床に通ふ秋かせ 二十七日水あせ行たれば舟渡しぬ此河を毛布の  
渡といふか

夢にさへふる里人にあひかたきけふの渡に袖ぬれにけり

古川といふ村につきて錦木塚と聞しやあると尋れば稻かる女田の中に立てか  
りあけたる田の面を行て大杉の生たるあなたと鎌さしてそこををしへたりと  
しふる楢のもとにぬるての木櫻の梢かへてなとすこしもみちたる木に生ひま  
じりたる中に土小高くつきあけて犬のふせるかとき石をすへたりこれやそ  
のかみ赤森の郷の邊に月毎に市たちて家居あまたにとみてにきは、しき所あ  
りてけり其近となりやの里に蘆田原といふにすむとしたかき翁いつこよりかを  
さなき女子ひとりやをやしなひ來りてあかほとけとほくゝみたて、この女ひと  
ゝなりてかたちきよらに心なをくあいきやうつきてあけくれのわさには白鳥  
のこ毛をませてはたはりせはき布をおりてその市にもて出でうるを見る人  
ことこの女にけさうし又毛布のめてたさとてわれゝとひこしろひあうか



ひてかふ廣河原といへる里に男ありて世を渡るわさには楓の木まきの木まの  
 似たり大まきか酸の木勝軍木のかはさくら若木あふちの葉に似て葉さ、味  
 しひ苦けりは五もこの木の枝を三尺あまりにして一束にゆひなかどう木と  
 いひてけるは仲人木といふ言葉にてやあらん世にいふ錦木とはこの木ともわ  
 きて色よく紅葉すれはうへいふにやあらんむかしよりことくにいへといか  
 ゝあらんかひろ河原の男なかどう木を市路にもて行てあきなふを人とかひて  
 わかおもふ女ある門のどにたつれば女見てわかすへき男とおもへは此木を夜  
 るのまにとり入るをおやは其ことゝしりてあはせたりといへり千束といふも  
 この木をひとつかふたつかといふにてもしるへし此にしき木うり毛布あきな  
 ふ女のみめことからよきに戀てあさからす契りて夜毎に人しらす通ひ今は人  
 めは、からぬたたらひもしてんど錦木のかかやかなるをその女の門にたつれ  
 は女うれしうどり入なんどせりけるを翁とめてこの男なせそよなくあま  
 たして立つるなかどう木の中にまだよき男やあらんいかにも智あらん男をこ  
 そむこかねともなさめと錦木うる男をおとしめそねみてければすへなう翁の  
 心にまかせたり日毎重るいくつかの錦木はそのまゝに朽ぬ此こゝろをやけふ

の細布胸あはさなることに世にはいひなしぬ女おもへどもそのかひなふ男く  
 れともあははて物こしにしのひあからさまに夜なくない別ぬ翁みそかに男  
 の夜半にかたらふことをしりてひねもすひるはねてよるはいもねす此女をま  
 もりていさ、かもとには出たさす布もうらせす男いかゝしてか女を見てんと  
 翁のまどろまんまにどうかへといどもかなしき聲にけちかくふくろうの  
 なげは翁ねさめしてしはふきぬある夜は来りて板戸さど明ていまはものいは  
 んとおもふにきつねの軒近う叫ふに翁の夢おどろかいてほいとけさりきこの  
 ことをのちにいひつたふにやいま鼻か谷狐か崎といふ名あり翁ともすればあ  
 かしぶとて山ぶどうのかつらの皮を纏になひたへまつとして火ともしうちふ  
 りくうちとを見めくれは男くる夜もく逢かたくこゝかしことあらぬかた  
 にみちふみ迷ひ廣河原に歸りぬその行かひのすちを奥の細みちけふの細道と  
 いひて風張といふ處のしたつかたに中りてあり其通路に涙も露もいとよかう  
 物うしとはらひしとて其儘草の露むすぶなしと田にある女ともいへるにお  
 もひつゝけたり  
 しら露のをくの細みち物うしとはらひし野や今もむすはし



鶴田村の邊になみた河といふめるはあはぬ夜毎くを恨みなかるなみたの  
顔をあらひたるより川の名におへりとも又いつまで世にすみありつともあか  
をもふ女を見ることこそかたからめとや思ひけん深き林に入て此男くひれ死  
けり又其川に身をなけたるゆへなみた川といふともいへり女もたゝ此男のみ  
戀ひおもひやみて身はやいたはり重く湯水のまれすつゐに身まかりぬ翁うち  
おどろきふしまろひてかくはかりおもひふかくせちに契しなかと夢にもしり  
せはあはせてんにとてくひなけゝといふかひなくせんすへもなければ親とも  
なくく男も女もひとつ塚の中に男の立つる千束の錦木どもにこめつきて其  
邊に寺を建て錦木山観音寺といひしとなん此男女の塚のもとにたゝすみてな  
きたまに手向はやと五もとの木の枝のすこしもみちたるを折て葎の上にさし  
紙に引ひすひて

錦木の朽しむかしをおもひ出で係にたつはしのもみち葉  
細布の胸あはさりしいにしへをどへははたをるむしそ鳴なる

といふたくさの歌をかいつけてもとの田つらをつたへあせみちをくれはかの  
田の面の女休らひてといふまゝしはしとて芝生に在てものかたりを聞は中む

かしの頃までふん月のなかはつかのうちにたをる音の聞へ物見坂といふよ  
り見ればかたちうつくしけなる女のはたものむかひ居て機ををある士の  
あやしみて此ふる塚の中に女あらんほり見てんどこゝらの人に仰て鋤録立て  
ほりこほちてのちはまぼろしに見へたりつるつかの傍もをさなくる音もたへ  
はてにささるころより毛布ををわさはもはら絶うせたりけりといひ捨て又鎌  
とりおりたち薙ぬらべ今は世に在るもまれなる奥布のもちひられしはむか  
しなりけりといふふるき歌思ひあはしたりこの古河の村をさ黒澤兵之丞と  
いふものゝ家に傳て今もをるといへはそれか宿を尋てあるしものかたりを  
聞にいまはさら鳥の毛をませてをることばあし待らしをりとして昔に奉る  
ことあるにそのあろは家のうちと清らかに注連ひきはへて奉るその織る女も  
湯あひいもあしてうみをつくりてをりいどなむどなんはたはりのいとせはき  
ゆへ衣にぬひてはむねあらはるゝよりいふにや今も南部布とて村よりせは  
き布をり出しぬ此たくひにこそあらぬいにしへのみつきものにはきよらかに  
織て奉りたるならん所黒澤かやにそのかみよりをりつたへたるもゆへやあら  
ん道奥のけふのせはのゝほとせはみ胸あひかたき戀もするかなおもへた



毛布のさぬの麻衣きても透見ぬむねのくるしさ　どなかめおけるもみな此  
毛布郡のこの宿にをる布のむかしをよみし歌のこゝろなりやをらこゝを出て  
松の木村といふをくるに石のおはしかたをならべたる祠ありこれやしなの越  
後にはわきて陸奥にいと多し冠田村へて深川を渉る　おほ空にわたる術の  
われならはけふの波りをいふかになかまし　どよめるはこの流ども又古川と神  
田のあはひのわたりをいふともたれしれる人なし鶴田を過て村の名をとへは  
鐵砲とこと／＼しういらへたるときたはれうたつくる

羽よはきつる田のひなは心せよ鐵砲村の近くありつゝ  
花輪の里に出たりわかことひとりありとやはきへどありけるはこゝ處にてお  
なし名のこゝにもあるにこそあらめ此里をはしめ此あたりのわさどて紫染る  
いとなひありこれを染るにかならずにしこほりてふ木の灰をさすといふなに  
くれと子の字のみ付て物いふを聞ておなしう

野に出てひかしこにしこほりためて染るとそきくかつのむらさき  
かちまる飾摩の里にひとしく筑舟むらさきの野の外にかく名の世に聞へたり  
こゝを離て木の下に休らひ

たけくまにあらぬ花回の松陰もひとり行身のたつきとそなる

大里村にいたりて作山誰とかいふ宿にとまる  
二十八日うらふれておなし旅館に居る遠かたの山の尾ことゝに雪の出るや  
と見ゆるは銅ふくけふりなりけるとかその山より来るわらはあちかのことき  
ものに茸あまた入て馬の齒つふれてふくさの實をひたにくひく行たりける  
を見て　あなうまのはつふりくらふ重かなどうちたはれたり

二十九日夜邊よりの雨つれ／＼と晴行けちめも見へねは家にをるに菊池何某  
といふ村の長とひ来てかたる

なか月一日いまたあまよの空なり川水やふか、らんとてやのぬしせつにと、  
めければけふもおなし宿に在て近きあたりを出ありくに鶴田山大徳寺に遊ひ  
て惠音といふ僧としはしうちものかたらひ此かへさやのをさなき盆のあまに  
どらせはやと物あきなふやに入てくたものかはんとあくうによれば年高き翁  
ふみどもやりてつゝらあるははこやうのものをしふのりもてそはりけるな  
さけふか、らんふみもやとうか、ひ見る中に錦木山観音寺由来記としるして  
黒うす、つける冊子ありそれしはしといへは翁ゆるしぬひらき見ればこはい



かにそのすちくは正しからされと大化のむかしに惠正法師のかい殘せるに  
遠きいにしへを忍ひてこゝにのす(右由來記ハ錦木塚別當黒澤氏所藏ノ觀音寺  
縁記ト同文ナル故茲ニハ略セヌ)とかいたりからふみのまねひふかゝらぬ人の  
はかなふ作なせるもんしやうなからそのことはつはらにしろし遠き千とせの  
むかしまでそれと愚ぶに足れり

二日朝たつをりしも惠音ほつしとよりさしのそき又いつかなといへるに 昨  
日來てけふの細布たちさらはむねあひかたき別ならましとてやを出て小豆  
澤村になれはいかめしき大日如來の堂ありそのゆへはそのかみ田山の庄のう  
ちに平間田本といふ處に男女すんで耕をわさにもおつねに出てうちかへし鋤  
を枕にひるねしたりける男の鼻より秋津むしのさ、やかなるか出て岩のはさ  
まをめぐり莓の雫やなめたりけん羽ぬれて飛かへりひたんのはなの穴に入ぬ  
妻もひち枕してけるかおとろき男をおこしぬ男起あかりおもしろの夢見しと  
いふとき女しかくと語るを聞てさらはその處はいつこいて行て見てんと女  
のをしゆるかたをさして尋至り昔よりつたう泉をむすへは薫りみちたる酒な  
りあなうれしあめのたすけにあへるものかなと酒の泉のほとりに家たて、風



欠

MISSING



宿近きあら河の波音こ、らなく蟲のこゑ、あど枕にひ、き老ならぬ身も寝  
覺かちにさめてはいと、こし方のみおもひも捨すいねもつかれぬに軒はの山  
ならん鹿のゆくりなふないおどろかしたるに涙おちて

ふる郷をおもひ出湯の山ちかくわきて物うき棹鹿の聲

三日湯舟にいまた星の影あかうさしうつる頃起出て人皆衣ふるふわさしてこ  
、を出慮さかる人のいふ過來し小澤てふ南に長牛といへる山より砂金ほると  
いふは 皇の御代榮へんどみちのく山はいつこも、むかしよりこかね花さ  
さけるにこそあらめと齊田、兄畑、佐比内などをへて折壁といへる里ありこゝの  
あう垣に關手あうためて通しぬわれ持たるいさ、かのこかねはやはしき世の  
よねのしろにつかへはて、椎の葉に盛らん料もなければゆく、うすきころ  
もひとへをうりてんどおもひつ、

いくちささきならし衣ぬきかへてあしをかりねの長させにせん

どなかめたるをかたれば人さもといひて又歌をわうふ

やをら田山といふ里に出たりこのあたりの村にてはものかく人まれにめくら  
暦とて春より冬まで一とせの月日の數を形にかいて田植耕の時をしれり世に



ぬごなれるためしなりけり吉澤たれといふかやにとまる  
 四日ようへより雨ふる苗代澤村梨木峠を行に牛をふ男けふはも、さどを行て  
 宿からんにいそげとさきなる子らにいふ道をとへは一塚といひあるは一里と  
 いふ六町を一里としひとつかとは七里を合てよそちふたまちをいふなりけり  
 この國のならひなり牛馬のゆきかひしけう路は田の中のことにぬかりはきふ  
 かうさし入て行なやめは日たかう曲田といふ邑に宿つきたり夕附行ころ雨晴  
 たるに露いとふかう外山の鹿の聲高くなければやのわらは窓にかしらしいた  
 しあ山の山にてかのし、がさかぶおとよといへは男ら鹿は世におもしろきもの  
 なり何かしの神の夜みやありつるにこもりあかしたるあした笛つ、みの聲に  
 うかれて放ちたる野かひの馬にましりて角ふりたて、おどりくめくるをこ  
 の小童めかさかひしま、木山の中にみなどひ入ぬわれかや野にかくろひあり  
 て見しをりの樂しさとかたるをねふりく聞ひたる翁あくひうつしてさるゆ  
 へ世中に在る獅子舞は鹿踊を見てはしめたるといふか誠ならんとかたる鹿は  
 聲のをやみもなうなけは枕とりつ、  
 さらてたにさひしき夜半の草枕なみたなそへそ小雄鹿の聲

五日どのしらみゆけは女戸おし明てこは水霜いふなりかしろ霜ましりふりたり  
 とて眞柴折くべ物にるにあたりて出たつよそひすけふは末の松山見にいかん  
 とおもひてとくくと出ぬ梨木坂のこなたよりは二戸郡といへり保登澤石神  
 中齊駒ヶ嶺をへて淨法寺村とて枕おしきやうのものをつくりいたすをわざと  
 せりむかし淨法寺なにかしといふ人しるよしして住給しなと語る吉祥山福藏  
 寺に入て活龍上人とかたらひてこよひは此寺に一夜をどありけれどこゝろせ  
 けはこの寺をまかんで、石淵岡本などいふ村をも遇るに老たるほうししり  
 よりゆくりなふ聲をかけていはくいつこにか旅人は行そとこたへて世にあり  
 とあるかしこきところこそたつね奉り侍れ老ほしさらはこ、にも桂清水とて  
 たふとさきところありいてをしへ申へしとてとしふる桂木の根より水細くわき  
 出るにはくらをたてり是なんむかし圓仁たいしの夢のみさかありてもこの給  
 ひしどかたりはたみてらの觀世音は行基菩薩の作給ひてそのいにしへは聖武  
 天皇の建給ひてそのかみはいかめしき堂とも多かりつるなど御前にぬかさけ  
 て語るを聞て水月の意を  
 かしこしなく世桂のかけそへてなから、水の月やすむらん



山路はるくどわけ来て金葛といふ村にやどかりうすき衣をかたしきても  
やすからぬにあれたる板戸のひまより夜半の秋風寒く吹入てはたへをおかす  
にいこ、ふしもつかれす風ひきそ衣重ねきてよとあと枕のかたくへなどし給  
ひし父母のふかき情をいまはたおもひ出てた、なみたかちに夢もむすはす  
あなさむし衣織ぬふ人もかなくすのかつらや糸によらなん

(編者云既ニ他郡ニ涉レルヲ以テ己下略シヌ)

○皇太子殿下御結婚ノ時錦木塚別當黒澤氏細布ヲ獻納セシニ其御答禮書左ノ  
如シ

秋田縣鹿角郡錦木村

黒澤圓次郎

一 狭布細布 貳卷

右

皇太子殿下御結婚奉祝ノ爲メ獻納候段御満足被思召候事

明治三十三年五月十日 東宮大夫侯爵 中山孝麿印

右黒澤氏寶藏セリ

○ダンブリ長者之事

其昔小豆澤村ニ民有成年正月元日ノ夜夢中ニ老翁來テ我ハ大日神ノ靈ナリ天  
ニ有テ普ク身變ジ國民ヲ惠ミ太巳貴ト成テ人民ノ家業耕作ノ事教ヘ又大山祇  
ト成テ山野ヲ司トリ産物ヲ出生ス是等モ我カ權化ノ神也汝モ我カ化身ナリ川  
上ヘ行テ住ナラバ有徳人ト成ベシ國郡ノ田畠ヲ披キ民ノ寶トナスベシ此所ハ  
盤地ナル故我鎮坐シテ五穀ヲ育人民ヲ養フナリト夫婦共同告ヲ蒙ル小豆澤村  
ニ根元ト云所有村始リノ屋敷ト云此所ニ住居シケルガ此時代迄ハ神社モナク  
神ヲ祭ルニ土ヲ高クシテ木ヲ串ニケツリ紙ヲ少切挾ミ立置供物ヲ備ヘ神此處  
ヘ天下リ安座シ玉ヘト天地ヲ拜シケルトカヤ雪消勝地ヲ見立大日神鎮座シ玉  
フ土檀ヲ築祭拜シテ夫婦打連川上ヲ尋田山ノ奥平間田ヘ行住居シテ世ヲ可渡  
様モナク葛藤ノ根ヲ掘テ食事トシ畑ヲ切披キ或時朝日ノ出ルヲ見テ朝日指夕  
日輝其許ニ寶ノ泉涌出テ有ト心ニ浮ビ夫婦畑ヲ耕盡休シケルニ男少殿入タル  
時向ノ岩ヨリ秋津虫飛來テ男ノ口ヘ尾ヲ入テ飛行テハ飛來二三度尾ヲ入ケル  
男目覺テ我今名酒ヲ呑テ夢見タル由語レハ女御身殿入タル時向ノ岩ヨリアケ



ツ二三度飛來口へ尾ヲ入タル由語レハサテハ其處我ニ生レタル寶有ベシト行  
テ見ルニ岩ヨリ醴泉涌出有吞テ見ルニ夢ニ吞タル名酒ニ逸ナシ其味甘露ノ如  
ク吞者病癒壽命ヲ延ブ汲共ツキルコトナシ則其處ニ屋形ヲ造住居シケル今ニ  
長者屋敷跡醴泉涌出タルト云岩有其德ニ隨テ招スニ眷屬集リ千人程ノ飯米朝  
夕前ノ小川ニテ研ケレバ川水下迄白ク成流故此川ノ流米白川トカケリ數百疋  
ノ馬放置ケル山ノ上ニ池有テ龍天下リ住其池水吞タル馬龍ノ如ク馬ノ日ニ數  
百里ヲ走ルトカヤ其所ヲ龍馬カ嶺ト申也通力自在ノ四人臣有テ四方ノ事ヲ司  
取東西南北數郡ノ田島ヲ披キ耕作ヲ營ミ鹿角比内へ通用ハ湯瀨ト小豆澤ノ間  
道難所ニテ夏川水淺キ時ハ牛馬通ケレトモ春秋ハ不通故平間田ヨリ清野澤へ  
山越シテ大木立木ヲ切テ通故切通ト名付清野澤ヨリ山越テ花輪へ出ケル山坂  
ニテ人馬通用難義シケル故杉澤ノ奥ニ天狗居ケルヲ招キ寄西ノ方道披クベシ  
ト有ケレハ其夜ノ内ニ湯瀨ト小豆澤ノ間川ノ廣サモ高サモ六丈五尺有ケル所  
へ大木ヲ集橋掛渡シ鹿角比内ノ道披キ是天狗橋也其夜長牛瀧ノ邊へ釣木引渡  
シタレハ夜明テ天狗飛去橋成就セス天狗ノ所行ハ則時ニ不成事重テ不成云依  
テ仙北道披クス此故ニ長牛ノ夜明嶋ト申ケルトカヤ諸方ヨリ稻付賦リ掛置タ

ル所縁場長根ト云糠ヲ捨タル所大糠森小糠森ト云テ有借又正月二日ノ未明ニ  
ハ耕作ヲ祝數十人ニテ扱押ノ祝義有今大日祭禮ノ扱押ハ此例ナルベシ卯月八  
日大日神鎮座シ玉ヲ土檀へ參一尺二寸ノ串角ニゲヅリ紙ヲ挾其年月ノ數立盤  
供物神酒備へ再拜シケルト云今大日祭禮ノサツヘイハ此古例成へシ人民卯月  
八日ノ神參是ヨリ始ルト云其身權者化身ノ人ナレハ思フ事不滿ト云コトナシ  
去レトモ未タ子一人ナキ故四十八ノ土壇ヲ築毎日參拜シテ天へ祈リケレハ女  
子一人出生ス其名ヲ秀才女ト申テ父母寵愛不淺壇ヲ築タル四十八森今ニ有此  
時未タ金銀ナシ何ヲ以寶トシケルヤ世ニ無隱有徳人トナリ人王二十七代繼體  
天皇ノ御宇都へ登長者御印願上ケレハ大内ヨリノ宣旨ニハ寶滿ルヲ以長者ト  
云第一ノ寶子ナリ子ヲ持タルヤト御尋有ケレハ女子一人持テ候都一見ノ爲召  
連タル由申上ケレハ大内エ被召御覽有ニ無双美女故内裏へ被留置長者ノ御判  
ヲ下賜リ彌富榮ケル此元秋津虫寶ノ有所ヲ告ル此虫所ノ語ニダンブト申故  
世ノ人ダンブリ長者ト申ケルトカヤ

大日神社勅建吉祥天女之事

借秀才女内裏ニ宮仕次第ニ身經上リテ名ヲ吉祥姫ト被成御后ニ被備タル由古



郷ノ父母命數限有ツテ夫婦共死去シケレハ寶モ消失醜モ常ノ水ト成四人ノ臣  
モ渡天シケルヤ跡ヲ隱シテ失ニケル其時御后古郷ニ父ノ後記ヲ被殘度由帝ヘ  
奏シ被申ケレバ帝敎聞有テ神ハ國家ノ守末世ノ後記ハ神社ナルヘシ長者常ニ  
尊敬シタル大日神社御建立有ベシト善記二年勅使ヲ以小豆澤大日神鎮座ノ靈  
地ヘ一社ヲ御建立有大日神示現社ト號シ大里小豆澤長嶺川部ハ本一郷谷内此  
四ヶ村現地ニ定郡中ノ鎮守ニ崇玉ヲ由社ハ十三年ニシテ現地四ヶ村ニテ屋根  
替替ベシ大破ノ修理ハ時ノ國司ヨリ其沙汰有ベシト社領ノ地被寄社務神主被  
附置今ニ至迄靈瑞新ニシテ國郡ノ變有事ヲ告玉ヒ信心ノ輩諸願不滿ト云コト  
ナシ善記二年ハ繼體十七癸卯ノ年也舊記ニ繼體十六壬寅善記年號始リ本朝年  
號ノ始ト有平間田長者ノ墓所モ大日神社ト號シケル借吉祥姫薨シ玉フ時我ガ  
死骸古郷ノ土中ニ埋玉ルベシト御遺言依テ尊骸送被遺道小豆澤ニ埋天女ノ號被  
贈吉祥天女ト奉號由此時未タ佛法渡ラス吉祥院ハ後ニ御墓所ノ邊ヘ立御菩提  
所ト名付タルベシ繼體天皇ハ越前國足羽明神ト現玉フト云

五ノ宮權現

五ノ宮山權現ハ繼體天皇第五ノ皇子譚者ノ爲ニ帝都立去ラセ玉ヒ我心ノ止ル

所住所ナルベシト北國ヲ經テ東國ヘ下向シタマヒ秋田比内ノ方ヨリ東ニ高山  
見ヘケルヲ御心付有急カセ玉ヘハ乘セ玉フ御馬ノ鞍ニ離レ捨玉フ前輪其後  
光リ物ト成テ東ノ方ヘ飛後輪大里村ニ有其處尻鞍ト名付前輪小豆澤東ノ山ニ  
有ケルヲ里人見テ其處鞍落場ト名付タル由宮ハ我止ルベキ所ハ此所成ベシト  
小豆澤村根元ニ御馬繫カセ玉ヒ東ノ嶽ヘ登山シ玉フ故五ノ宮山ト申也宮ハ薨  
シ玉ヒケルヤ又生ヲ替化シ玉フカ此山人倫不通故知ル者ナシ繫セ玉フ御馬石  
ニ成タル由縛歌石ト云テ有御供ニ被召連タル金丸兄弟一石ニ成タル由一ノ皇  
子ト申テ有御馬モ金丸兄弟モ石ニ化シケルヤ死シテ碑ニ立ケルヤ分明ニ不知  
也大日堂養老ノ御再興ノ時五ノ宮山奥ノ院トシテ宮ヲ奉崇權現本地十一面大  
士尊像前立獅子頭作シ玉ヒ本堂ノ内陳ニ安置玉フ尊像ハ本堂回祿ノ時燒失獅  
子頭ハ七日七夜舞習ノ内ニテ右新二頭共別當神家ヘ下置タル故燒失セスシテ  
祭禮ニ相用ル也御山祭禮ハ神主一ノ庭九月朔日ヨリ注連ノ内ニテ神酒ヲ遣同  
二十日幣帛供物神酒ト相備湯立神樂一ノ庭宅ニテ相勤也一ノ庭古代小豆澤ニ  
住居シケル所永祿年中大里備中謀ニテ大里ヘ相招引越タル由一ノ庭祭田ノ内  
袖振田五百疋五ノ宮山神田ト故神役ハ古例ヲ以今ニ小豆澤村ヘ出ル也此山以



前人倫不通享保四年公儀ヨリ諸國高山ノ繪圖書上被仰付御役人田中久太夫物書一人徒目附一人繪師被召連花輪山役人中村伊平太古人兩人山見一人足輕一人神主一ノ庭大里小豆澤湯瀨三ヶ村肝煎共人足召連山先ハ三ヶ村又鬼共二月七日登山被成ケルトモ雪中ニテ山荒澤嶺不見譯夏ニ至三ヶ村人足ニテ道切御役人一方井九郎右衛門江刺家兵左衛門物書一人徒目附二人繪師森休印被召連花輪役人淺石治左衛門關左五右衛門古人兩人山先一人足輕二人神主一ノ庭三ヶ村肝煎又鬼共召連六月九日湯瀨村ヨリ登山被成繪圖書認大日堂へ下リ別當へ五ノ宮山ハ何レノ村ノ山ニ候哉ト被尋小豆澤村ノ山ニテ三ヶ村氏子ニ御座候由申ケレハ鹿角郡小豆澤村五ノ宮山ト被書留タリ其節秋田領十二所役人中ヨリ花輪役人中へ文通申來當領ヨリ見へ候五ノ宮山何郡何村ノ山ニ御座候哉家中寺社ノ山ニモ御座候哉此段承知申度由申來花輪役人中盛岡へ御伺返書當領五ノ宮山鹿角郡花輪代官所小豆澤村ノ山ニ御座候家中寺社ノ山ニモ無御座候由被申越タル由他領ノ山ニテモ其處ヨリ見へ候山ハ可書上旨被仰出故右ノ趣申來ル由其後寛保二年諸山諸木書上ノ時五ノ宮山東神ノ澤西二人引南馬ノ變立北ウタ内澤切小豆澤村附ト書上タリ高山御改以來參詣ノ者登山シケル故

同十年五月二十日湯瀨村市兵衛社建立シケレ共雪ニテ押潰レタリ安永六年九月信心ノ靈石ノ尊像石ノ社建立別當典徹大日堂ニテ開眼修法相勸尊像ハ施主共縁へ奉送社ハ大日社内ニ古來ヨリ五ノ宮拜所有其處へ立置タリ施主數人故名元是へ不記(右一古記)

○歸省記

湖 南

編者云明治三十一年夏兒虎次郎歸省セシ時東京ヨリ鹿角マテ往復ノ眼ニ觸レ耳ニ聞キシ事ヲ筆記シテ歸省記ト題セシ小冊子アリ其中大日堂及五ノ宮ニ關スルモノヲ茲ニ抄録ス

吾カ鹿角郡ハ北ニ小坂南ニ尾去澤ノ二大嶺山アルヲ以テ其民ノ有頼ナルコト他地方ニスグレタリ米價ハ殆ント東京ニ伴シク秋田盛岡ヨリモ貴ク特ニ薪炭ノ價ハ十數年來其價ノ三四倍ニ及ベルハ鐵山ノ燃料トシテ斧斤ノ時ナラスシテ山林ニ入ルニモ由ルベケレハコハ強テ喜ブベキニハアラズ又鐵毒ノ田畝ヲ害スルコトハ川流ノ魚類ニ乏シキ等ヲ見テモ明ラカナレド戸々殷富ノ實ハ其古ク煤ビタル家サヘモ何トナク修潔ナルニテモ知ラレタリ但ダ沃土ノ民ノ逸



レ易キニ似テ其淫佚ノ弊ハ到ル處ニ怪シキ料理店ノ構ヘラレ酒ニ侍スル美人ノ蓄ヘラル、ハイカバカリ風俗ヲ敗壞シヌラン現ニ小學ノ側ニサヘカ、ル家ノアルハ駭クベキ事ナリト老婆心切ヲ費スモナツカシキ故郷ナレハナリケリ眺メ飽カヌ邱壑ヲ跡ニ見テ上京ノ途ニ就キシ日ハ花輪ニテ友ナル大里醫學士ヲ訪ヒ其弟ニテ現ニ法科大學ニ在ル武八郎氏並ビニ其ノ小弟ト旅伴ニハナリヌ花輪ヨリ一里小豆澤ニハカノ大日堂アレハ數十代ノ昔ヨリ堂ノ別當トシテ今大日靈貴神社ト改マリテモ依然トシテ社掌ノ職ニ在ル安倍嘉津馬翁ヲ訪ヒ翁ノ語ル所ヲ聽キ神寶四ツ耳ノ釜ヲ覽社記ノ類ヲ閱シヤガテ翁ノ息悦人氏ニ導カレテ九間四面ニシテ剩ヘ其一間ハ七尺ニモ餘リスベキニ堂内一柱ダモ用ヒザルヲ以テ工匠ノ凡ナラヌヲ示セル所謂大日堂ニ詣デヌ始メ吾ハ思ヒキ社記ノ類ハ或ハ杜撰モアラン堂内ニ存スト人ノ傳フル古佛像コソハ其樣式ノ欺クベカラヌ時代ノ手法ヲ示スベケレバ之ヲダニ觀ンニハ大方ハ創立ノ時代ヲモ推測シ得ベシト然ルニ其ノ本尊タル大日ノ大像ハ寛文再建ノ時ニ同郡長牛村ヨリ移セリト當時ノ棟札ノ銘ニ見ヘタルガ其製作モ文祿慶長以前ニハ瀨ラザルベシト推セラレ又不動毘沙門二像ハ甚ダ奇古粗朴ナルモノナルガ其形式

ノ鎌倉以後ノサマニシテ而モあいの南洋蠻人等ノ彫刻若クハ埴輪ノ若キスベテ未開種族ニ通有セル幼稚ナル手法ヲ用ヒタルハ思フニ此地方開化ノ程度マダ低カリシ程ニ地方ニテ製作セルナラン但ダ此ニヨリテ其時代ヲ定メンニ由ナシカ、レバ佛像ニヨリテ年代ヲ推測セン希望ハ全ク敗レヌ此ヨリ外ニ徵スベキハ先ツカノ寛文六年ノ棟札ナリ然ルニ里俗ノ傳説トシテ繼體天皇ノ勅願トシ逸セル年號トシテ史書ニ見ユル善記二年即チ同天皇ノ十七年ニ創建シキト舊梁銘ニ記セルヨシ見ヘタルトコレ將イカバアルベキ奥ノ院ト稱セシ五ノ宮神社ハ繼體第五ノ皇子菟皇子ヲ祀リ皇子ハ安閑天皇ノ御世ニ東下シテ此ニ來給ヒシトハ社記ノ言フ所ナレトモ菟皇子ノ後ハ大和ノ皇別ニ酒人真人是ナリト書紀姓氏錄ニ見ユタルガ此ニ下向シタマヒシコトハ徵ナシ社記並ニ鹿角ノ古キ口碑トモニダシテ長者トイフ者アリテソノ創建者タリトイフコトハ一致セレバヤ、信ズベキモダシテ長者ガ何ノ世ノ人ナリシカハ未ダ詳カナラズサレトモ吾ハ思フヨシアリテトニカクニ其鎌倉以前ニ在リシトイフコトヲ信ゼントス文明十八年ノ修葺マデハ南部家ノ記録モアリトイヘバ疑フベクモナシ壽永二年錦戸太郎國衛ガ父秀衡ノ命ニヨリテ再建セリトイフハ棟札モ



今ハ燒亡セ又安倍氏ノ系圖モ疑フベキフシ少カラネト其故家ニシテ外ケ濱ニ源ヲ發シテ天喜康平ニ横張セシ安倍氏ト同族ナラント推セラレバ又其祭事ニ存セル鳥冠駒舞等ハ今全ク鄙ビタル手ヅリニナリカハリタレド伎樂雅樂高麗樂ナトノ真言ノ古寺院ニ遺存セル所ハ多ク鎌倉以前ニ在レハ姑ラク其ノ傳化ト見テカクハ臆斷セルナリ五ノ宮トイフモ諸國ノ一二三四五ノ宮ノ順ヨリイヒケンモ知ルベカラス強チニ某ノ天皇ノ第五皇子ヲ以テ之ニ擬スルハ豈セリトイフベシ 祠ニハ南部ノ畫工月嶺ガ畫牛ノ額一丈四尺ニ一丈六尺ノ大キサニテ筆勢觀ルベシ祠前ノ老杉ハ周圍三丈ニ餘レリ

○南部信直攻秋田比内事

扱モ南部信直ノ女ヲ秋田忠次郎ニ送ラレケル時婿引出物トシテ鹿角ノ郡ニテ三百町ヲソ付ラレケル然ルニ實泰夫婦卒シケル後讒者有テ信直ト實季ト不快ニ成テ剩信直方ヨリ實泰ニ付ラレタル所領ヲハ是ヨリ送り返ヘキニ一旦ノ斷モナクシテ信直取返シヌルコソ意恨ナレ何様ニモ此返報ニ近日南部ニ働テオモヒ知ラセントイヒケル所ニ山北ノ小野寺秋田口境迄馳出タル由告來レハ南

部ヲ差置テ先小野寺ヲ追拂ハント人數ヲ催シ山北ニソ出馬セラレ南部又此由ヲ聞テ憎キ實季カ企カナサアラハ今山北ト秋田戰ヲ勵マス折ナレハ實季湊ニアルヘカラス我比内ニ入トモ勢微ニシテ防事叶フヘカラス是幸ナレハ秋田ヲ攻ントテ軍兵ヲ催シ鹿角口ヨリ攻入ケリ先手ハ櫻庭兵助稗貫帶刀其外北南東奥瀬花牧ヲ始千八百餘人花輪ニソ陣取ケル城介是ヲ聞給ヒテ夫安カラヌ事也南部ヲ我比内ニ入立テハ叶マシ馳向テ追テラセト阿仁大館槍山ニ飛脚ヲ立テ下知セラレ是ニ依テ馳向フ人數ハ米内澤阿仁常陸介資清同右馬頭貞清同十郎兵衛尉阿仁播磨守同右兵衛尉片山駿河守山田十郎左衛門齋藤佐藤高橋槍山作兵衛野代傳左衛門十孤二郎兵衛五城目兵庫和田内膳父子等催シテ千人ニハ過ス赤澤ニ陣取テ待處ニハヤ南部勢ハ白根西道ヲ經テ押寄互ニ闘ヲ作り弓鐵炮ヲ打合ケルカ兩陣打物ノ稍ヲハツシ愛ヲ専途ト戦ヒケリ南方ハ大勢討ルレトモ新テ入替攻懸ル秋田小勢ナレトモ義ヲ重シ命ヲ輕ニスルモノ多シテ退事ナシ軍ハイツ果ヘシトモ知レナリケリ南方ニハ北南東櫻庭稗貫伊武者眞先ヲカケ敵ハ小勢ナルソ一騎モ殘サス討取レトオメキ叫ンテ攻ケレハ秋田勢終打負叶ハスシテ大明神マテ引退ク南部勢勝ニ乘テ追驅タリ秋田勢屈竟ノ



兵六十四騎愛ハ馬ノ足立ヨキ所也タトヒ軍ニハ負ルトモ大將ト組テ討トレト  
 イフ儘ニ馬ノハナヲ並ヘテ南部勢二千カ中へ割テ入項王カ勢ヲ含ミ樊會カ勇  
 ナシ頃刻ニ變化シテ百度戰フトイヘトモ信直ニハ近付得ス一ノ關ニ引退キ  
 味方ヲ願レハ四十騎ハ討レテ二十騎ニ成リ其上數ケ所疵ヲ蒙リ朱ニ成テ暫ク  
 息ヲ繼タリケリ米内澤常陸介申ケルハ是程ニ討成サレ命イキテモ何かセンイ  
 ナヤ引返シ敵陣ニ驅入討死セント怒リケレハ阿仁播磨守聞テ今ハハヤ繼ニ殘  
 ル軍兵モ皆手負タリ馬モ疵ヲ請矢モ射盡シ鋒先折レテ候ラヘハ何ト思フトモ  
 叶フマシ引退キテ大館ノ城ニ楯籠リ敗卒ヲ集メテ又コソ合戰ヲ勵マシ候ハメ  
 敵モ案内知ラヌ所ヘハタヤヌクセメ入事モ成ヘカラス幾度モ身ヲ全ウシテ敵  
 ヲ亡スコソ良將ノ謀トハ承ハリヌ今日ハ一ト先引セ給ヘト云ケレハ皆此義ニ  
 同シテ大館ニ引取ケル去程ニ南部信直ハ赤澤大明神一ノ關迄切取所々ニ要  
 害ヲカマヒ關ヲスエ人数ヲ籠置キ南部ニ引歸陣セラレケル(奥羽永慶軍記抄録)

○五城目兵庫心變比内落城事

元南部ノ郎等タリシ大光寺左衛門尉ハ不實ニ逆心ノ名ヲ得テ戰ヒニ利ヲ失ヒ  
 津輕ヲ落テ今ハ比内ニ身ヲ隠シ居タリケル其頃南部ヨリ秋田ヲ攻ル折シモ比

内ノ城ニ有ケル五城目兵庫ハ主君實季ヲ恨メル子細アリ大光寺ハカネテ五城  
 目ノ朋友ノヨシミアレハ幸ニシテ五城目ヲ語ラヒ比内ヲ南部ノ手ニ入我身ノ  
 科ヲモユルカレ本領安塔セント思ヒ密ニ五城目ヲ語ラフニ兵庫元來主ヲ恨メ  
 ル時ナレハヤスト領掌セリ大光寺大ニ悦ヒ急キ飛脚ヲ以テ三戸ニ注進ス  
 其書札ハ北左衛門信愛カ館ニ送リケル信愛被見スルニ某不慮ニ御敵ニ罷成  
 今牢浪ノ身ト成候今度信直公秋田ヲ攻給フニ比内ヲ御手ニ入奉ラント存シ大  
 館ノ城代五城目兵庫ヲ語ラヒ候ニ兵庫内々實季ヲ恨ル子細有テ安々ト領掌申  
 テ候フ急キ御馬ヲ出サレ候ハ、比内ハ忽御手ニ入候ヘシ願ハクハ某カ過ヲ御  
 ユルシナサレ候ハ、五城目ニ心ヲ合セ軍忠ヲ抽フヘク候トソ奮タリケル信愛  
 則信直ニ訴フ信直聞給ヒテ大光寺ヲ逆心不實ノ義戰止テ我聞及シ事アヲ夫ハ  
 トモアレ今度比内ヲ手ニ入レントノ注進コソ神妙ナレ其義ナラハ我馬ヲ出ス  
 ヘシト返答ヲソシ給ヒケル大光寺大ニ悦ヒ五城目ト軍慮ヲ廻ラシ三戸勢ヲソ  
 待ニケル三戸ニハ比内攻ノ陣觸有テ各軍ノ用意シテ打立ケル先一門ノ人々ニ  
 ハ八戸彈正少弼北左衛門佐信愛九戸左近將監政實東中務南遠江守石龜紀伊守  
 七戸彦三郎四戸中務其外家ノ子郎等ニハ櫻庭安房守小笠原安藝守一條但馬守



淨法寺修理亮大湯四郎左衛門同五兵衛尉湯瀨宮内等ヲ始トシテ其勢七百餘騎  
天正十六年三月ヲ打立鹿角郡ヲ經テ西道山ヲ打立赤澤大明神ニ陣ヲ取扱モ  
一方ノ城代和田内膳ハ思ヒヨラサル所ニ南部ノ大勢寄ルト聞五城目心變トハ  
夢ニモシラス軍ノ術ヲ廻ラシ評定ヲ極メ大館近邊ノ勢ヲ集メ楯籠ル所ニ三戸  
ノ勢雲霞ノ如ク押シ寄せ城ノ東西南北ヲ打圍ミ関ノ聲ヲ上ケレハ城中ヨリ打  
テ出雄雄ヲ争ヒ戰フ處ニ兼テ合圍ノ事ナレハ五城目兵庫大光寺左衛門尉敵ヲ  
城中ニ引入レ裏切ヲソシタリケル比内勢心ハ猛ク勇メトモ何カハタマルヘキ  
前後ノ敵ニ攻ラレテ弓手ニ向ヒ馬手ニ向ヒ討ル、者數ヲ知ラヌ和田内膳五城  
目カ心變ニ軍慮相違シテ迎モ遁レサル所ト最期ノ軍清クセヨトイフ儘ニ崩黃  
ノ糸ニテ威シタル具足冑ニ三ツ引兩ノ腰小旗太ク過シキ馬ニ打乘リ鎧押取カ  
ケ出レハ緞ク兵ニハ嫡子岩之助二男小次郎船木與右衛門渡邊新左衛門永井十  
左衛門堀内權左衛門深間内武者之助ヲハシメ究竟ノ兵七十騎一手ニ成テ敵ノ  
大勢ニ驅入縱橫ニ切テ廻ル六七度揉タリシカ次第ニ討レテ終ニ一人モ殘ラス  
其外義ヲモ耻ヲモ知ラサル輩ハ四角八方へ逃散タリ南部ニ降參スルモ多カリ  
ケリ今度ノ軍ハ是程ニ日ノ中ニ勝利アルヘキ事ナラテトモ大光寺五城目注進

ニテ思ヒヨラサル所へ押懸タレハコソ城介後詰スル間モナク比内ハ南部ノ手  
ニ入ニケル大光寺左衛門尉ハ此度ノ注進故比内ノ庄ニテ本領ヲ返シ給ヒ直  
ニ比内ニソ置レタリ猶モ秋田ノ押用心ノ地ナルユニ與力百騎足輕百人北信愛ニソ  
内ニソ置レタリ猶モ秋田ノ押用心ノ地ナルユニ與力百騎足輕百人北信愛ニソ  
添ラレケル信直ニハ勝関ヲ取行ヒ三戸ニ歸陣セラレタリ(奥羽永慶軍記抄錄)

○秋田城介返攻比内事

羽陽比内ノ庄ヲハ先ニ秋田忠二郎領シケルヲ實泰死後舅ノ南部信直是ヲ奪取  
テ一門北左衛門信愛ヲソ置レケル其外大光寺左衛門尉五城目兵庫秀兼ヲ差添  
與力二百餘騎付ラレケリ城介實季先頃南部ノ戰ニ討負利比内ヲモ切トラレ鬱  
憤モ散セス時節ヲ以テ比内ヲ取返シ奥州鹿角郡ヲ攻トラント常ニ思ハル、所  
ニ今度津輕ノ亂逆ニ依テ南部後詰ニ趣クヨシ聞及シカハ其留守ヲ伺ヒ先比内  
ヲ討取ラント所々ノ軍兵ヲ催サレケル所ニ阿仁ノ加成ノ一族等實季ノ出馬ヲ  
期セシテハヤ比内ニ取懸タリト飛脚ヲ以テ渡ニ告ク此者共戰ヲ急キケル故  
ハ比内ノ城代北左衛門尉信愛カ家人トモ民ヲ劫シ過役ヲ取ヨロツ忒ニ振廻ケ  
レハ土民共大ニ愁テ加成常陸介同播磨守カ館ニ注進シテ早ク馬ヲ出シ給ヘ北



左衛門ニ恨アル者共御味方ニ馳參候ハ、比内ヲ忽攻落シ候ベシトソ訴ケル是ニ依テ實季ノ出馬ヲモ待ス寄ケルトソ聞エケル城介此事ヲ聞給ヒテ急ニ打立ント取物モ取アヘス土崎ノ湊ヲ出ラレケル相伴ナフ人数ハ秋田二郎五郎同文五郎同彌十郎湊勘解由左衛門同典膳同彌左衛門同兵右衛門同久兵衛新山將監吉田嘉平次長沼長助安藤入道不傳齊同備中守季林同兵部實村同五郎季宗同傳七飯岡半兵衛尉佐々孫左衛門景連上杉半左衛門實定堤五郎左衛門實致大平仙鶴岩倉右近藤倉將監ヲ始都合三千人比内ヲサシテ急ケル豊嶋新内三百餘人ヲ引具シ跡ヲ慕フテ討程ニ大川ノ宿ニテ追付ケリ扱モ北左衛門ハ秋田ノ一族阿仁米内澤比内ノ地下人相催シ攻來ト聞エケレハ大ニ驚キ早打ヲ以此由ヲ南部ニ告タリケレ共三日迄三日ノ路次ヲ隔テハ五六日ノ間ニハ後詰アルヘシトモ思ハレテ敵ハ急ニ押寄レハ進退愛ニ極リヌ去共城邊ノ土民等未タ心變リモ無ケレハ其妻子共ヲ本丸ニ押ヘ置男ヲハ十五以上六十以下ヲ撰ミタル土民五百餘也其外ノ者ハ皆敵ニソ成ニケル比内ノ大將北信愛相從フ者共同彈正大光寺左衛門尉五城目兵庫季兼毛馬内源治櫻庭兵助唐手半藏是彼三百餘騎惣人数千八百人半途ニ出迎テ待懸タリ寄手ノ方ニハ阿仁ノ城主加成播磨守同十藏

同運之助米内澤ノ城主右馬頭檜山作兵衛尉野代傳右衛門尉船川仁兵衛尉ヲ先トシテ健ナル軍兵五百ヨキ地下人トモ馳加テ雲霞ノ如ク押寄ル其間近ク成レハ互ニ時ヲ作り弓鐵炮ヲ打合ケリハヤ兩陣ノ若者共暫モ休ヘス矢面ニ顯レ出鐵先ヲ捕ヒテ戰タリテトモ兩陣前ナル味方ニ隔ラレ陣ハ徒ラニ時ヲ移セハ未タ勝負ハミエナル所ニ比内ノ大將信愛下知レテ敵ノ備ヲ横合ニ足輕五十人ヲ以テ鐵炮ヲ散々ニ打セケレハ忽騒ソ見ユケル此時北彈正與力百騎總ヲ並通スナ餘スナト喚叫テ突テ掛ル阿仁米内澤ノ者共シトロニ成テ敗軍スナレ共播磨守右馬頭フミ止リキタナシ者共返セト大音揚采配取テ呼ハレハ逃行者共皆取テ返シ相戰フ右馬頭ハ餘ヲニ味方後レケルハ口惜クヤ思ヒケン鐵フミハリノヒ上リ加成右馬頭季清ナリ續ケテ殿原トイフマ、ニ三尺ノ太刀拔ソハメ南部勢ニ割テ入弓手馬手ニ切テ廻ルテトモ大勢ノ中へ只一騎驅入ハ何カハタマルヘキ八方ヨリ鐵ニテ突落テ終ニ討死シタリケリ右馬頭カ郎等檜山主馬介命惜ムケレキモ無ク同時ニ敵陣ニ驅入レハ是ヲ見テ加成十藏同軍助片山駿河守今井安藤高橋周防其外究竟ノ兵二百餘騎トフト喚テ突テカ、レハ南部勢モ心得タリト面モフラス防戰フ互ニ命ヲ盡テヨリ輕ンシ入亂レ討ツ



ウタレテ諍合事何レ隙アリトモ見エナリケリ馬モ朱ニ成テ兩陣共ニ討ル、者大勢ナレハ其死骸ヲフミ越前へハ進メトモ後へ退者ソナキ南部方ニハ五郎兵衛尉五城目内記萱森入道眞先カケテ突テカ、ル秋田勢今ハ叶ハス一同ニ追立ラレ既ニ阿仁ノ境迄引退ク南部勢勝ニ乗テ時ヲ作リツ、透ヲアラセス追カケ

阿仁近所マテ攻寄タリ頃ハ卯月十八日俄ニ白雨車軸ノ如ク降ケレハ兩陣互ニ戰ヲ止林ノ中ニ入テ息ヲ繼居タリ其間二町計隔ケルカ半時計ニシテ天霽ケレハ南部方ノ先手二百餘人林ノ中ヨリ顯レ出陣先ヲ一面ニナラヘ懸ラント身刷フ阿仁勢ハ季清ヲ討ル、ノミナラスカクマテ敗軍シケレハ本意ナク思ヒフ、淺利藤馬同伯耆守寒川與兵衛戸館久治曲淵源助十狐五郎風張民部ヲ先トシテ三百餘人討テ出追ツ返シツ相戰フ阿仁勢ノ中ニモ格闘主馬介生年十七歳成シカ其健先諸人ニ勝レ打ミニエヌ南部方ニモ萱森入道眞先ニ出テ主馬介ニ健ヲ合セシカ先ノ白雨ニ浸セル土滑カナレハ足ノフミ所ヲ定メスウツ臥ニ倒ル、所ヲ主馬介得タリカシヨシト突健ニ内甲ヲシタ、カニツカレ痛手ナレハ立上ラントスルニ叶ハス主馬介ニ首ヲトラレケル去程ニ敵味方戰ヒツカレ相引ニシテ猶豫スル所ニ大阿仁ノ城主常陸介味方敗軍ト聞テ安カラス思ケレハ白

髮ニ兜ヲ戴キ取物モ取敢ス手ノ者十四五騎ヲ率シ三柏ノ紋染タル大旗ヲナ、セモミニ揉テ馳付軍ノヤウヲ伺フニ日來鬼神ノ如クイハレタル嫡子右馬頭ハシテ究竟ノ者共二十餘騎討死ス常陸介是ヲ聞テ我弱年ノ子ヲ先ニ立面強ク死殘リ老ノ身ノ人ニ見ラレンモ耻カハシ今年六十餘リ迄敵ニ押付ヲ見セシタメシナシサレトモ定業ナリケルニヤ今迄ハ生殘リタリケフヲ限リノ軍ナレハ敵ノ大將信愛カ彈正ニ組テ刺違ヘント牙ヲカンテ馬ヲ立ケルカ播磨守ニ向テ我新手トイヒ嫡子季清カ弔ヒ軍ナレハ一戰仕ラントイフ儘ニ敵陣ニ打向ヒ共ニ旗ヲ進メ相爭フサレトモ南部勢ハ戰ヒ疲タリ常州ハ新手ナリ其上大將ニ組ント無ニ無三ニ突テカ、レハ既ニ旗本迄近ク攻寄タリサシモ剛ナル南部勢モ今ハ叶ハスシテ一度ニトツト崩レタリ後陣ニ扣シ播磨守此由ヲ見ルヨリモ餘スナ洩スナトイフマ、ニ関ヲ上テ鼓貝ヲナラシ汗馬ヲス、メ喚叫テ追懸タリ餘リニ強ク追討レ南部ノ武大將北彈正取テ返シ敵一人鎗ニテ突倒シ殿シテ引ケルカ大鎗ヲハ土民共カ遮リテ攻落シハヤ入替リテ野代ノ城主大高傳右衛門カ旗ヲ押立防ケレハ城へ引事叶スシテ直ニ西道へト引ニケリ常陸介ハ是非大將ト組ント心カケ鞭ニ籠ヲ合セ追カクレハ殿シケル北彈正相體坂ニテ踏ミ止リ



常陸介ニ鎗ヲ合ケルカ思ヒ詰タル敵ナレハ終ニ常陸介ニ突落サレ首ヲハ常州ノ家人ニソカ、レケル討洩サレタル者共信愛ニ追付只今彈正殿討レ給フト云ケレハ信愛口ヲシキ次第ナリト馬ノ首ヲ廻ラシ跡ヲ願ルニ敵纒百人計ニテ追來レハ信愛聲ヲ上ケテ何者ナレハ小勢ヲ以テ大敵ヲ追懸ルハ不敵ナル奴原カナ一人モ遁スナ討取ント三百餘人引返セハ眞先ニ進ミケル若武者大聲上テ我ハ加成運助トイフ者ナリ相手ニ不足ハ有マジト信愛ヲ目ニカケテ一文字ニ打テカ、ル南部方與力ノ者共ヨリ能敵ナルソ我討取ラント争ヒケリ運助モ今ハ最期ト戦セシカ無勢ナレハ叶ハスシテ終ニ其所ニテ討レニケリ常陸介モコッニテ討ルベキ所ニ城介大勢ヲ引率シ揉ミニモンテウチケル程ニ一昨日湊ヲ立テ今日申ノ刻ニソ馳着タル後陣ノ勢加ハレハ五六千人ニ成テ爰ノ山カシコノ峯ニ數百ノ旗馬印ヲ翻シ時ノ聲山彦ニ響カシ追懸タリ信愛迎モ叶ハスト下知シテ白根ヲサシテ引ケレハ又追討ニセラル、者數ヲシラヌ唐手兵藏カ首ヲ小繁六太夫討取ケリ毛馬内源治カ首ヲハ槍山與力ノ水間喜右衛門討取ケル信愛大光寺五城目櫻庭ハ危キ命ヲマスカレ鹿角ニソ引取ケル城介モ此大勢ニテ輒ク鹿角マテモ攻入ラントイハレケル所ニ小田原ノ御陣觸類ナル由湊ヨリ飛脚

ヲ以テ追カケ告來レハ重テコソ鹿角ヲハ攻ヘケレト先相州ノ御陣ヘ馳參ラント比内ニハ一門老臣等數ケ城ニ籠置テ湊ニソ歸陣セラレケル 此合戦ノ時櫻庭ノ郎等岩船八兵衛中村吉之助道又門十郎鈴久名惣吉折壁彌助ノ五人戦死セリ(奥羽永慶軍記抄錄)

地理 中

○南部郷村志 鹿角之部

御邦内郷村志卷六目錄

毛馬内縣

- |     |     |      |      |     |
|-----|-----|------|------|-----|
| 柴内村 | 牛乳村 | 鶴田村  | 新斗米村 | 高市村 |
| 上臺村 | 小平村 | 小枝指村 | 冠田村  | 室田村 |
| 澤尻村 | 古川村 | 濱田村  | 草木村  | 寺坂村 |



一本木村	倉澤村	宮野平村	風張村	大湯村
根市村	箒畑村	松山村	大欠村	石野村
瀬田石村	毛馬内村	中野村	關上村	腰廻村
蘆名澤村	長者久保村	萬谷村	荒川村	牛馬長根村
長澤村	鳥越村	鶴谷村	高清水村	赤坂村
大地村	小坂村	濁川村	野口村	蟹澤村
花輪縣				
田山村	湯瀬村	小豆澤村	大里村	花輪村
甘藷村	鏡田村	狐平村	神田村	高屋村
花軒田村	土深井村	三矢澤村	尾去村	松館村
石鳥谷村	長内村	三ヶ田村	白欠村	長牛村
夏井村	長嶺村	川都村	谷内村	

御邦内郷村志卷六

鹿角郡毛馬内縣

(産物) 細布 花染類 芥子紙

柴内村

高二百四十八石五斗餘

千二百二十四石一斗餘

馬百九十七疋

民戸百四十六軒内四軒小深澤六軒狐平二軒折ヶ内  
 萬松寺 祝融山寺領十七石二斗曹洞宗越後國村上靈樹山耕雲寺末山利直公  
 御眞筆御繪像一幅有羽黒新山權現社領八石二斗九升餘別當修驗大殿院右寺  
 社領元和二年六月利直公御寄附成徳三基寛政三年庚  
 不動堂 岩屋山福昌寺法輪院末寺別當天台宗不動院阿保一品親王建立之本  
 尊行基作元和二年六月利直公御寄附成徳三基寛政二年庚  
 東深山花輪縣西米代川限南花輪縣道北高市村  
 乳牛村 高二十七石九斗餘  
 二百七十三石七斗餘



民戶四軒

稻荷 別當 圓藏院

東同上西北柴內村南花輪縣境之

鶴田村 高五十七石一斗餘

五十一石三斗餘

馬六十疋

民戶二十一軒內二軒下川原

稻荷宮 別當 大藏院

東高市村西米代川南柴內村北新斗米村

新斗米村 高十六石九斗餘

二百三十二石八斗餘

民戶十四軒

八幡宮 別當 大藏院

高市村 高五十五石四斗餘

二百八十九石九斗餘

馬三十二疋

民戶二十七軒

八幡宮 生鬼大神社 大藏院

上臺村 高十八石二斗餘

馬三十七疋

民戶二十軒

小平村 高七十石一斗餘

四百八十六石六斗餘

馬百四十三疋

民戶八十二軒

圓福寺 曹洞宗 大湯大圓寺末山報恩寺支配

右四ヶ村東花輪縣山中界西米代川限南柴內村北小枝指村

小枝指村 高十三石四斗餘

五百六十九石一斗餘

馬百二十六疋



民戶七十四軒

八幡宮 齋宮多故 法道院

隆昌寺 小枝山上州白井雙林寺末寺 報恩寺支配

東廣野山中西米代川南小平村新斗米村相接北根市川

舊館 往古小枝指又左衛門居住

冠田村 高百五十一石四斗餘

百二十九石

馬三十六疋

民戶二十三軒內五軒曲谷地

稻荷 不動院

室田村 高二石一斗餘

三十七石七斗餘

馬十疋

民戶八軒

澤尻村 高二十五石五斗餘

馬六十疋

民戶七軒

八幡宮 別當 喜樂院

古川村 高百三十五石二斗餘

馬三十五疋

民戶三十四軒

錦木塚 此塚有山男通路所其行路無露云々別當古川村狹布一子相傳也深齊

八十日織出之舊事紛々邑俗不詳之多不毛地矣每巡見使自前々呈細布一反宛

天明八年申九月巡見使通行

觀音寺 錦木山孝德天皇大化元年乙巳八月二日建立之導師惠正法師細布狹

布郡古川村也覺右衛門先祖女織出之細布而云狹之里政子女云々

稻荷社 喜寶院

濱田村 高二百一石四斗餘

二百四十八石七斗餘

馬百十八疋



民戶六十軒內十一軒根市戶十五軒五間屋十三軒猿賀野  
猿賀權現 卯木村一妙院

八幡宮 不動院

右數々村東草木村西米代川南小枝指村北隔川中野村

草木村 高百六十三石五斗餘

四百二十二石六斗餘

馬二百二十九疋

民戶百十七軒內三十六軒下草木十四軒九館七軒保田二十三軒二本柳

八幡宮 一妙院

東深山齋谷西寺坂村南廣野北一本木村

寺坂村 高三十四石四斗餘

百二十六石三斗餘

馬六十五疋

民戶三十七軒

八幡宮 良覺院

一本木村 高四十七石三斗餘

四十石餘

馬十六疋

民戶八軒

集宮 觀音也

倉澤村 高十石二斗餘

十石六斗餘

馬十六疋

民戶八軒

宮野平村 高十三石五斗餘

三十九石一斗餘

馬四十一疋

民戶十七軒

大宮 良覺院

高十七石五斗餘

風張村



四十五石二斗餘

馬十四疋

民戶十軒

貴之宮 良覺院

右數ヶ村東草木村西濱田村南小枝指村北隔大湯川關上村中野村相接古川村交在毛馬內町行路從室田村舟渡松山村道

大湯村

高百七十四石餘

四百四十三石六斗餘

馬百四十六疋市中共二

民戶百二十五軒內四十六軒上町三十二軒下町十三軒上之湯二十二軒下之湯

六軒折戸一軒山中二軒白澤軒軒土澤二軒集ノ宮新田

不老倉銅山東在三里餘山中

大圓寺 普門山最上黑瀧白川寺末寺報恩寺支配

集宮

舊館

山中有一家此所三戶與毛馬內之界也從三戶縣關村行程二十五里又從毛馬內

縣大湯村二十五里羊腸九折五十里自九月至三月而行路絕矣山中巡檢使平日

休息場故新造旅館覆之以木皮四方皆生芽天明八年二月末明年因有巡檢使而

前年修補被仰付山中皆大木也是云來滿山五十里

東南北山中西花輪縣同行尾去澤銅山之道也

根市村

高十三石九斗餘

馬四疋

民戶五軒

稻荷社 新山堂 勝善堂 別當良覺院

等畑村

高九十九石八斗餘

五石二斗餘

馬八十三疋

民戶三十四軒內十三軒堀內四軒赤川五軒大樂前

銚子瀧 雄瀧中瀧泊瀧共三瀧也

東西深山幽谷北鹿角郡與北郡之界山中南大湯村



三寶荒神 白山社 宮本坊

松山村 高百八十三石一斗餘

四石七斗餘

馬百十四疋

民戶六十三軒

關所 三戸與福岡交代勤之

此所南尾去澤銅山道花輪縣

八幡宮 伊勢宮 山王宮 圓藏院

大欠村 高二百八十八石九斗餘 櫻庭肥後采地

馬四十八疋

東西米代川南山中花輪縣境北隔米代川石野村

觀音堂 雌神社 多寶院

石野村 高七石五升二合 馬四疋

民戶十四軒

積昌寺 金羅山大湯村大圓寺末寺報恩寺支配

伊勢宮 稻荷社 山神社 常覺院

理念寺 喜應山盛岡本誓寺末寺

東隔米代川毛馬內村南松山村舟渡西山中秋田境北瀨田石村東隔米代川古川村

室田村冠田村

高二十石三斗餘

二百四十七石三斗餘

馬七十三疋

民戶五十軒

八幡宮 別當喜樂院

伊勢宮 同 不動院

東隔川毛馬內村西南北川西深山秋田領以嶺或川為界

毛馬內村 高四十五石四斗餘

九百七十石三斗餘

馬二百三十一疋



民戶三百十四軒內三十一軒上町三十四軒中町四十六軒下町五十七軒五軒町  
三十三軒加屋町七十五軒下小路三十八軒川原町  
官舎稅官

柏崎館

月山權現寺額十一石二斗餘廣增寺

承應甲午年重直公建立元祿四年重信公御再興

伊勢宮 稻荷社 寶珠院

八幡宮 新山社 不動院

此外有數社略之

仁叟寺額額山閉伊郡善勝寺末寺報恩寺支配

善德寺額額山盛岡大泉寺末寺

誓願寺直至山同上

常照寺淨光山盛岡本誓寺末寺

本光院 三戸妙光寺末寺盛岡法花寺支配

東中野村西隔汁毛川瀨田石村南隔米代川古川村北隔汁毛川萬谷村

中野村

高十二石五斗餘

三十八石八斗餘

馬六十九疋

伊勢宮

不動院

稻荷社

本光院

關上村

高三十二石一斗餘

百九十八石四斗餘

馬四十三疋

民戶三十軒

八幡宮

愛宕室

喜樂院

腰廻村

高二十七石八斗餘

三十六石九斗餘

馬四十二疋

民戶二十二軒

稻荷社



東隔大湯川風張村西毛馬內村南隔大湯川濱田村北毛馬內村

芦名澤村 高二十石八斗餘  
百四十一石餘  
馬百十二疋

民戶六十六軒內六軒長戶路六軒割石

觀音 新山堂 伊勢宮 山神 常樂院

東隔川大湯村西長者久保村南毛馬內村北廣野也  
長者久保村 高二十八石二斗餘  
三十四石三斗餘  
馬二十六疋

民戶二十一軒

不動室 毘沙門堂 新山堂 不動院

萬谷村 高五十三石八斗餘  
三百八十一石四斗餘  
馬四十九疋

古者馬場村ト稱ス

民戶二十六軒

萬養寺自性山花輪縣三ヶ田村寶珠寺末寺報恩寺支配

恩德寺赤石山花輪村長福寺末寺報恩寺支配

八幡宮 愛宕堂 觀音堂

舊館 往昔毛馬內權之助居住

荒川村 高十七石餘  
三百十八石三斗餘  
馬四十五疋

民戶二十四軒

諏訪大明神 八幡宮 稻荷社 別當法樂院

牛馬長根村 高三石八斗餘  
三十四石七斗餘  
馬三十二疋

民戶四十四軒內二十二軒雨池

稻荷社 雷神社



長澤村

高二十石二斗餘

馬十疋

民戶十三軒內五軒大森

稻荷社

右數ヶ村東隔汁毛川芦名澤村西毛馬內村小坂村相接南隔汁毛川關上村北鳥越

村從是北小坂村大地村道

鳥越村

高十石六斗餘

五十五石五斗餘

馬七十疋

民戶四十三軒內三軒二渡三軒鹿倉七軒藤原

觀音堂

不動院

輪村

高八石餘

三十五石二斗餘

馬四十一疋

民戶四十六軒

東廣野等畑村西小坂村南牛馬長根村北深山

高清水村

高九十二石一斗餘

百十三石九斗餘

馬三十五疋

民戶三十九軒內四軒七瀧

法量堂

館神社 七瀧大明神

赤坂村

高二十六石五斗餘

一石一斗餘

諸稅免地

馬九疋

民戶十一軒內六軒四津屋

大地村

高百五十二石九斗餘

八十六石五斗餘

馬六十三疋

民戶四十二軒內二軒上川原四軒下川原

藥師堂

熊野堂



舊館

東荒川村隔兩川西山中溪谷秋田領南隔川瀨田石村北小坂村

小坂村 高八百四十一石九斗餘

百六十八石一斗餘

民戶百三十五軒內八軒和尙田二十三軒岩澤二軒曲谷地一軒十兵衛川原二十三軒細越

新山社

貴ノ宮

八幡宮

伊勢宮

山神

午頭天王

吉祥院

鏡得寺

瀨澤山

花輪縣

三ヶ田村

寶珠寺

末寺

報恩寺支配

此邑中神社多由來不詳故略

東鶉村西山中秋田領以嶺上爲境南大地村北濁川村

濁川村

高二百三十九石一斗餘

十八石九斗餘

馬百三疋

民戶百六軒內六軒若木立十九軒夜路米十八軒砂子澤

關所 自三戶縣交代勤之

山神

摺野大明神

八幡宮

稻荷社

小坂村

吉祥院

東廣野鶉村西新遠部澤高岳群山秋田領以嶺上爲界南小坂村北野口村

野口村

高四石二斗餘

二十二石三斗餘

馬九十七疋

民戶三十六軒內一軒二夕又六軒大森平

十二天社

雷神社

小坂村

吉祥院

東同前村西濁川村南同北高岳連山

蟹澤村

高六十二石三斗餘

百五十三石一斗餘

馬四十疋

民戶十三軒

稻荷社

不動院



總計

高一萬千二百六十六石五斗餘  
內

七千九百八十五石六斗餘

采地

民戶二千四十一軒

安永九年改

馬三千百八十三疋

寬政丁巳年改

鹿角郡花輪縣 田山村往古二戸郡屬同縣今屬鹿角郡花輪縣參詳之

(產物) 紫染類 茜染類 木地挽物類 硫黃

田山村 高三百四十一石五斗餘

二百二十四石八斗餘

馬百五十六疋

民戶二百七十七軒內六軒田中十四軒扇畑此民戶在二戸郡三軒越戸二軒田澤  
十六軒苗代澤四軒杉澤四軒姥子石二軒失神六軒相澤五軒栗木田四軒小峠十

五軒平間田十軒切通一軒鴨仕田五軒清野澤二軒小原二軒大原八軒日戶路九  
軒折壁六軒同所四軒石名坂二軒蛇口三軒長坂八軒戶鎌八軒左比內二軒中野  
平四軒館市二軒兄川口四軒下新田四軒大畑九軒兄川十七軒上新田一軒片原  
丁三軒保呂部一軒巢子十七軒兄畑

稻荷 大日堂 藥師

地藏寺田谷山福岡縣淨法寺村福藏寺末寺報恩寺支配

東福岡縣山中梨木峠荒屋新町道西谷內村南沼宮內縣以山中爲境北湯瀬村

湯瀬村 高七十五石一斗餘

六石五斗餘

馬五十二疋

民戶三十七軒內四軒扇熊井一軒石通三軒才田二軒大岩平

溫泉 在村中春秋遠近群集浴

東田山村大概山中溪谷西谷內村北米代川天狗橋一之波橋過小豆澤村多九曲折  
坂從冬至春多絕行路積雪故也

小豆澤村 高三百三十三石餘



三十一石餘

馬八十七疋

民戶四十四軒內一軒小山三軒碓二軒和田

吉祥院養老山秋田仙北白岩雲岩寺末寺報恩寺支配

神明

大日堂 八十四石九斗餘 祭田 盛岡法輪院末寺 明光坊

繼體天皇十七年因勅建立九間四面高十三間堂中柱四本往來在東側

此山中供松杉數千株皆七八圍可謂靈社也

邑老傳云往古豪家之者云長者居住于田山村有二女子貢京師為官得幸而產皇子數年之歸鄉里於與羽賜五百反年々勅使三人來謁于茲斃之後稱號大日有祭祠自正月朔且至三日有古作面貌寫後紅顏云非祭日不能拜有日六坊者製公家衣冠在大日之側會祭日為農治之事此日旗以細布作立之自往古至于今祭祠不絕雖不詳以俚俗言記之里人云蜻蛉長者文明十八年<sup>代十五</sup>政盛公御修補之

熊野堂 地藏堂 山神堂 藥師堂

右延寶九年 重直公修補之

東山中西隔米代川長嶺村南湯瀬村北大里村

大里村 高四百三十八石四斗餘

二百八十二石四斗餘

馬百二十七疋

民戶六十一軒內八軒玉內一軒山田一軒追搦

大德寺 關川山毛馬內縣柴內村萬松寺末寺報恩寺支配

觀音 午頭天王 地藏堂

東山中田山村西隔米代川松館村南小豆澤村北花輪町

花輪村 高五百十二石三斗餘

千八百五十三石餘

馬

民戶四百八十四軒內二十軒新田町六十三軒六日町九十四軒谷地田町十七軒澤口十一軒關向六軒袋町四十軒大町三十七軒新町三十軒關向四軒橫町四十二軒橫丁十六軒今泉九軒中小路三十一軒川原町三軒小上清水十軒小深田三軒鐵砲九軒用野目五軒同所五軒曲澤二十九軒久保田



恩德寺赤石山花輪長福寺末寺在萬谷村

長年寺風林山加州金澤宗德寺末寺報恩寺支配

專正寺寶珠山京都本願寺末寺

明達寺花輪山寺領十一石一斗餘盛岡法明院末寺

圓德寺真乘山下野國大澤圓通寺末寺盛岡大泉寺支配

長福寺杉澤山毛馬內縣柴內村萬松寺末寺報恩寺支配

長福菴 頓悟菴

藥師 神明 八幡宮社領五石

條子館 樋口館 稅官所 南館 古館 北館 稻荷社領五石在東方

八王寺稻荷

東福岡縣以深山嶺上為界西尾去澤村隔米代川舟渡也是云稻村渡此處銅山道也

南大里村北鏡田村毛馬內縣道也

甘露村 高十三石九斗餘

鏡田村 高二十三石一斗餘

八十一石九斗餘

馬五十九疋

民戶十八軒

狐平村

高七石二斗餘

四十五石四斗餘

馬十九疋

民戶十一軒

東花輪村西隔米代川高屋村南花輪村北毛馬內縣

神田村

高百二十九石五斗餘

二十一石二斗餘

馬四十九疋

民戶二十七軒

八幡宮 稻荷社

東西北限米代川南高屋村 高二十四石餘



九十八石餘

民戶二十八軒內八軒在下川原

稻荷社 藥師堂

花軒田村

高八石一斗餘

三十九石三斗餘

馬十七疋

民戶十四軒

東米代川限西土深井村毛馬內縣界山中南尾去澤村北高屋村

八幡宮 午頭天王在邑里外

土深井村

高六十八石餘

馬六十疋

民戶二十七軒

關所

稻荷社

高梨子館

三ッ矢深村

高二十六石餘

馬七十六疋

民戶四十四軒內十一軒上新田十六軒下新田

右村々東南深山尾去澤村西北秋田領境

尾去澤村

高百九十三石三斗餘

二百四十八石四斗餘

馬四十一疋

民戶九十九軒內四十五軒西道口十三軒蟹澤六軒松子澤二軒瓜畑二軒鍋倉

午頭天王 八幡宮 天神宮 神明

長泉寺松峯山毛馬內縣萬松寺末寺報恩寺支配

銅山 惣入方一年大概一萬四千兩餘山中家二百五六十戶篠小屋八十戶有

餘三千八百人餘金堀子 天明八年陪巡檢使到于此地于時大雨洪水不得渡米

代川宿銅山記云始慶長年中連綿不絕于今出銅數百萬斤東隔米代川花輪村西

溪谷秋田領以峯上為堺南石島谷村松館村北花軒田村

松館村

高十七石六斗餘



三百十三石餘

馬六十三疋

民戶四十九軒內十三軒黑澤二軒川原

東同前西石鳥谷村南長內村三ヶ田村相接北尾去澤村

石鳥谷村 高七十九石五斗餘

二百三十七石四斗餘

馬五十疋

民戶五十八軒內十九軒在水澤

東南松館松村西同上長內村相接北尾去澤村

長內村 高十六石五斗餘

百三十七石一斗餘

馬八十二疋

民戶二十八軒內九軒在森山新田

八幡宮 熊野堂

東三ヶ田村西山中秋田領峯限南長牛村北松館村

三ヶ田村 高百五十二石八斗餘

四百四十一石九斗餘

馬六十九疋

民戶八十二軒內十二軒大久保十三軒荒町八軒野尻三軒杉山

寶珠寺 龍雲山 毛馬內縣柴內村萬松寺末寺報恩寺支配

東長峯村西白欠村南夏井村北長內村

白欠村 高五十八石五斗餘

馬二十五疋

民戶十一軒

東三ヶ田村西山中秋田領南長牛村北長內村

長牛村 高六石九斗餘

二百六十八石餘

馬八十六疋

民戶四十三軒內二軒在道地

夏井村 高三百石六斗餘



百六十五石九斗餘  
馬百六十六疋

民戸七十一軒内十軒小割澤三軒櫻内三軒櫻内口一軒外野  
東谷内村西南連山秋田領深山北長牛村  
瀧江寺夏井山志和郡山勝源院末寺報恩寺支配  
長嶺村  
高一石五斗餘

百五十八石二斗餘  
馬八十三疋

民戸三十三軒内四軒小水澤二軒和田  
東米代川限夏井村西三ヶ田村南谷内村北川部村  
川部村  
高二十七石一斗餘  
八十二石三斗餘  
馬二十九疋

民戸十九軒内一軒和田一軒川原向一軒深川  
東米代川西三ヶ田村南長嶺村北松館村

谷内村  
高百四十三石一斗餘  
五百四十七石五斗餘  
馬百九十五疋

民戸百四十軒内四軒瀧畑十四軒永田二軒根瀬三軒赤平六軒蛇澤十軒熊澤六軒杉谷地二軒及澤二軒深川一軒湯坂一軒切留

觀音  
延命寺無量山秋田綴子村寶昌寺末寺報恩寺支配  
五ノ宮嶽 四角岳  
東山中西米代川切南田山村北長嶺村

邦内名山高岳川澤塘堤岩窟湖水瀑泉温泉首卷詳之故略之

○奥州出羽大境論起リシハ慶長十五年ナリ右ハ寛永十六年マテ南部ノ百姓共自由仕來ノ處同年極月十三日秋田ヨリ色々申掛此方出入ノ者切支丹御改被成候依テ兩國ヨリ出合改可申ト相談定メ秋田ヨリ侍屋次三左衛門赤館定右衛門



杉山五兵衛三百人斗ニテ參候南部ヨリハ毛馬内權之介家來高市立善和田五郎  
左衛門相馬嘉兵衛物頭ニテ大地村給人ハ百姓共二三十人ニテ被參至候ヲ談判  
ヲ開キ切支丹ノ法如何ノ故カ公儀ノ許ナレヤ否ヤ爭論ノ極打合トナリ秋田衆  
打返申候乃チ南部ノ者物頭黒宮二郎三郎石橋新三郎津子彌平等三人盛岡ヨリ  
御出寶地見分(古記)

天和年間丙辰秋田古人南部古人相寄合繪圖面吟味白根金山峯境ト定血判致候  
(古記)

○延寶五年德川政府裁許申渡書

奥州南部領鹿角郡花輪村毛馬内村ト羽州秋田領澤尻村十二所村味噌内村茂  
内村別所村扇田村大館村山境諍論之事裁許申付之覺

一米代川ヨリ南バツカイ深境之由秋田領雖申之境之内南部領之古田有之條秋  
田領申所非分也南部領ヨリ土深井渡境之由申之高梨館外館一館川原館一屋  
敷之由秋田領之者雖申之南部領ヨリ二館二屋敷ニテ南部領之者住所之由申  
候見分上分明候之條南部領之者運運之事  
一金山之内西道本山之儀比内沼山之由秋田領ヨリ雖申之南部領ヨリ金堀茶間

符數多有之古來ヨリ之金堀小屋并樹木等其上南部之奉行屋敷古跡并樹木畑  
等相殘至于今金堀候ト相見得候其外西道小杉平西道崎之山西道北平西道夏

山右之所々南部ヨリ金堀候古間符體ニ相見得條秋田領申所非分之事

一金山ヨリ嶺嶺南境嶺山胃石迄境之由南部領之者雖申之フナノ木坂ヨリ内

一通澤ニテ秋田領大葛金山金堀候者爲用事五十年來大木伐候伐カフノ古跡  
數多有之其上甲石南部之者近年新規申立候儀無紛相聞之條南部領申所非分  
也撫木坂栗木平馬立場嶺通境體ニ相見得候事

一米代川之北西方大森ヨリ下之森檜木菅ノ澤山神林長木嶺通清水ヶ峠迄境之  
由南部領ヨリ雖申之下森境嶺澤ニモアラヌ是亦秋田領新澤村田地之中ヲ川

通檜木迄境通候儀非分之至也其上南部領ヨリ山鏡貳百貫文出之三ッ森上ノ  
森之下深澤へ入小羽取候ニ付南部百姓與五右衛門ヨリ秋田百姓和泉所へ

遺候書狀二通有之間南部之者申所旁以不謂之事

一米代川之北東之方大森赤澤山松森札立場日暮山水澤頭戸長根製裝掛坂限峯  
通境森清水ヶ峠マテ境之由秋田領申所分明ニ相見得候其上先年長木澤之内  
ニテ比内之者取置候材木毛馬内之者掠取南部家來櫻庭安房ヨリ秋田家來盛



江内膳へ遣候返狀之面秋田領ト相聞候之條彌以儘ニ候然トモ袈裟掛坂嶺通南部嶺小坂村新畑之内嶺ニモ不相見得所ヲ境引通候儀非分候先年ヨリ南部之者覺候境分明ニ候事

右此度爲御檢使設樂市左衛門中山茂兵衛設樂源右衛門被差遣之見分之上評定之面々令相談裁斷之米代川之南トフカイ渡高梨館外館之間ヨリ大羽平朴木時大持長根龍ヶ森土高場山拾神迄嶺續スバリ合横澤立菱山馬立場栗木平ブナノ木坂迄限之米代川北東ハ大森赤澤山松森札立場日暮山水澤頭戸長根袈裟掛坂澤限嶺通境森清水ヶ峠迄水落嶺通山境相立爲鑑繪圖之面墨筋引之各加印判繪圖一枚宛双方へ下置之間此旨守之不可違失者也  
延寶五丁巳年六月四日 (此繪圖面寫編者所藏ナリ)

角左衛門  
喜右衛門  
五兵衛  
内藏允  
若狹

○右御裁許前湯瀬新右衛門古人共召連於盛岡御老中席ニ諸事被仰含新右衛門跡御扶持三拾人扶持被下延寶二年罷登江戸ニ四ヶ年滯留公儀御會所(今ノ裁判所)へ十三度罷出同五年御裁許濟ニテ罷下候節御褒美トシテ拜領之人數左之通

御刀(相州展正) 御山役 湯瀬新右衛門  
御金三兩 花輪古人 町井左平治  
同 同 赤坂彌之助  
同 毛馬内古人 伊藤重三郎  
同 同 馬淵金兵衛

出雲 攝津 山城 但馬 大和 美濃



○鹿角郡各地古實ノ占書ニ散見スルモノ及口碑ニ傳フルモノ左ニ記ス  
南部秋田二氏攻戰ノ事ノ若キハ之ヲ永慶軍記ニ比スレバ尤モ實錄ニ近  
キヲ覺フ

花輪

昔時京都ヨリ丹治氏兄弟三人ヲ下ナル其兄ヲ上總ト云フ千石ヲ領シ大里ニ住  
ス二男ハ花輪次郎ト稱シ臥牛本館ニ住ス(臥牛中古ハ伏牛ニ作リ近世福士ニ作  
ル)三男ハ柴内彌治郎トテ千三百石ヲ領セリ天正八庚辰年十月信直公ヨリ大光  
寺左衛門佐光慶三千八百石被下置鹿角郡ノ内花輪尾去澤石鳥谷三ヶ田夏井ノ  
五ヶ村也明曆三年即性院様(山城守重直公)御代毛馬内九左衛門長次毛馬内ヨリ  
花輪へ知行替御境御預リ延寶二年中野伊織三千石ノ内千五百石智行替花輪へ  
來リ樋口館ニ居住御境御預リ南館北館之ニ附屬セリ明治維新南部吉兵衛代上  
地トナル(文政年間南部藩ニ於テ中野氏ニ南部ノ稱號ヲ允ナル)

毛馬内

古記云毛馬内ト云コトハ元來毛馬内澤ト云處ナリ其ヨリ古館其ヨリ今ノ毛馬  
内ナリ本ハ毛馬内澤ニ館アリカイ館ト云又牛館トモ云也昔ニ畑マキ候者スキ

ニテ長サ七寸計リノ牛カラ金ニテ作角ト口ヒル爪耳コ者小金ニテ惣体ハカラ  
金ニテ作牛子ヲフミ出昔眞言坊主法積院有鏡ト申人有リ其坊主ニ爲見候所是  
ハ大事ノ於館神ノ御本尊候俗持候ヲハ御バフ當リ可申ト言ハレ御取リ被成候  
其弟子盛岡大庄嚴寺ヘナリ被申定テ持參可致館ノ山モ牛ナリニ御座候毛馬  
内ノ館是ナリ毛馬内ト云事ハ昔毛馬内澤ノカツテ(甲子)女瀧ノ下ニ月毛馬ニ澤  
ノ主ニナルト申月毛馬子見ル者モ有リ又ハ芦毛馬見ルモ有リ依テ毛馬内トハ  
申又人申者瀨田石ノ八幡ニテ昔ヤフサメ有八月十五日ニ的有リ馬ハ毛馬ト申  
計ニテ乘リヤフサメ有月毛馬蘆毛馬川原毛馬此三毛ノ馬ニテ乘ヤフサメ候ト  
申也馬場子今有毛馬内ノ城主昔者秋元氏名ハ不致傳聞ニ者有ン其ヨリ武田氏  
鞠負殿ト申ト也其頃迄神田十五石有リ別當ハ毛馬内ノ多門坊其先ハ不知多門  
坊ハ毛馬内不動院弟子也

○今之毛馬内ハ慶長二年丁未春當國主信濃守利直公御國巡被遊候節古館右之  
毛馬内ニ御巡其トキ御意被遊候者向イ之野崎者ナニト曰ソト御意被遊候ニ付  
當所役昆治左衛門罷出此野ヲ柏キ野ト申上又下ノ原ヲ何ト曰ゾト御尋被  
遊此谷地ヲ釋迦堂谷地ト申上ル其時ノ御意ニ此柏キ野之崎居館ニ可成前之



谷地下之原ヲ在家ニ可成ト被仰付候間其節ヨリ御奉行ニハ小枝指右京殿被仰  
付柏々野崎堀切新城ニ被成釋迦堂谷地ヲバ町被成上ニハ二之九家十三軒三之  
九ニ十二軒羽場小路又ハ小給人町鐵小路ニカイホリ合館小路上小路御町金之  
手城之下山伏小路ト屋敷ヲ御ワリ被成候其年之年號者慶長二年ヨリ御普請被  
成同年迄方々御普請相濟同九年本毛馬内ヨリ新城ニ御移其ヨリ段々九月迄  
引越家作慶長二年ヨリ唯寶永五年迄百壹年戊申五年也丑寅之方ニハ館神本地  
白山妙理權現十一面觀音ニテ弓矢八幡御内證摩利天ニテ御座候前立者稻荷ト  
玉崎大明神ナリ寺號者金光山號白山トモ玉崎山トモ申也御祭九月二十九日也  
昔者神田二十石也場十二取越是也今神田三石被下場ハ森崎也  
毛馬内古館ハ往古成務天皇ノ三年ニ俠名ノ大夫郡司トナリ下向シテ溝渠ヲ開  
キ農耕ヲ教ヘタリト云フ建久二年十二月南部三郎光行ハ奥州糠部五郡(九月三  
戸北津輕鹿角)ニ封セラレ此時毛馬内備中ノ所領タリ本名成田氏ノ宗家也天文  
十七年南部二十二代右馬頭政康ノ五男武田鞠負佐秀範三戸ヨリ來リ毛馬内潮  
田石大缺赤澤檜柏鉢罎口屋敷菅生鉢等知行二千石ヲ領ス毛馬内ニ居館アリ四  
代目範氏幼穉ニシテ國境取締ナキヲ以テ大湯ニ移サレ正保元年秀範次男三左

衛門直次代リ住シ明曆三年八月櫻庭兵助光英閉伊郡ヨリ來リ代ル知行二千二  
百石ノ内千八百石毛馬内潮田石大欠荒川萬谷高清水芦名澤諸村ニ於テ領ス明  
治維新櫻庭綱忠代上地トナル(糠部ハ今二戸郡ニ此名殘リテ糠部郷ト云一戸村  
即是ナリ)南部行信公御代被仰立九戸ヲ分割シテ二戸郡ヲ置

大湯

古館ハ奈良助左衛門ノ所領ナリ嫡子四郎右衛門ハ天正十九年九戸政實ニ一味  
シテ軍敗レ自害ス二男次郎左衛門ハ二百石ニテ召出サル其後大湯五兵衛二千  
石ニテ領知ス南部一族毛馬内鞠負ノ從弟ナリ明曆年中赤尾又兵衛來リ住セシ  
ニ南部家繼嗣ノ事故ニ依リ家中二黨ニ分レ爭論ニ及又兵衛ハ一黨ノ頭首ニテ  
敗リ取リ寛文五年五月仕ヲ致シ國公ノ止ムルヲモ不聞辭シ去テ土屋侯ノ招致  
スル所トナル同年十月北九兵衛代リ住ス明治維新南部伊豫代上地トナル(文政  
年間南部藩ニ於テ北氏ニ南部ノ稱號ヲ允サル)大湯古館ハ村ノ南端ニアリ原倉  
館ト云下モノ湯藥師堂ノ上ニアリ東西凡ソ八十間南北凡ソ四十間赤尾又兵衛  
氏築キタリト云



○秋田近季鹿角攻事

永祿元年夏六月初秋田ノ住人秋田城介阿部ノ近季比内郡ノ領主淺利殿ヲ頼  
 シテ鹿角郡ノ五人ノ侍ニ見參ヲシタシ度ト有ケル淺利殿ノ謀ニテ鹿角五人ノ  
 侍共見參可參ト同心シケル淺利殿被申ケルハ御同心ノ上ハ互ニ兩境ニテ見參  
 可然ト被申鹿角ヨリ大湯四郎左衛門小平彦次郎柴内彌治郎花輪中務大里豊前  
 等土深井ヲ越テ出ル秋田ヨリ近季ノ名代ニ大高筑前大浦縫殿助無仁内久藏同  
 平右衛門四人ハ比内領藤田川ヲ越テ中ノ臺ニテ見參シケル其時小枝指又左衛  
 門親小次郎參合見參之場ニテ酌ニ立ケル依之大高筑前方ヨリ小枝指小次郎ニ  
 脇指ヲ引出物ニ出シケル此時ヨリ慶安四年迄九十二年也長牛カ先祖一戸攝津  
 守義實ト申ハ一戸殿ノ舍弟ニテ女鹿小供ヲ知行ス鳥ノ海居住シケルヲ其頃京  
 ノ郡鹿角庄長牛ニ被遣ケル故ハ鹿角郡ノ國人斗有間其上秋田ノ境目ニテ依之  
 後見ノ爲ニ南部伊豫守正友カ祖谷内彈正左衛門ト一所ニ長牛村ヲ領ス故長牛  
 ト稱號ス長牛ノ先主秋本彈正左衛門秋田ヘ率人ノ後一戸攝津守移ケル長牛縫  
 殿助友義ハ一戸攝津守ヨリ四代ノ子孫ナリ  
 秋田近季ハ比内ノ領主淺利殿ヲ則討及ケル依之比内郡ハ近季ノ手ニ入是ハ淺

利カ家老ニ片山駿河心替リシケル故近季カ勝利也阿仁郡ニ神成右馬頭ヲ郡代  
 ニ差置ケル

近季ハ由利ノ打越殿ヲ始七騎ノ者迄手ニ入ケル其上鹿角郡ヲモ切取ヘキトノ  
 評定ニテ廻文ヲ鹿角郡ノ侍ヘ遣ケル其廻文ニ此度味方セラレ、ニ於テハ先知  
 一倍ノ加増可道ト其上ニ金銀武器絹布等ノ音物ヲ差越ケル永祿八年七月ノ頃  
 ニ鹿角ノ侍ニ加判シケル者共ニハ大里備中花輪中務柴内相模守此三人ハ安保  
 氏三人衆ナリ其外尾佐利ノ安保左衛門太夫小平大湯等ノ者共ナリ又加判ニ乘  
 ナル者共ニハ鹿角郡ノ旗頭石鳥谷ノ九郎政友長牛縫殿助谷内彈正左衛門小枝  
 指左馬助毛馬内ノ者共也此者共申ケルハ先祖代々ノ主君信直ニ逆心ヲ仕聞敷  
 トテ連判ハセサリケル  
 永祿九年九月ノ頃秋田勢ト由理七騎兼松前守護ノ蠣崎阿仁ノ神成比内勢并鹿  
 角逆心ノ者共一所ニ成先陣ニハ石鳥屋政友ノ居館石鳥屋ヘ取掛ケル長牛縫殿  
 助谷内彈正左衛門モ此館ニ籠ケル秋田勢ハ入替々々大勢ヲ以攻戰ケル數度隙  
 ナク攻ケル故終石鳥谷落城シテ政友モ不叶シテ長牛ノ館ニ籠ケル  
 永祿九年ノ秋ヨリ長牛城ニテ數度戰責ケレトモ城強シテ落サリケリ長牛籠城